

東國通史

緒言

人生僅カニ五十年ニ過キス而シテ古今ノ成敗ヲ歴觀シ躬
 其世ニ在ルガ如キ思ヒアラシムル者ハ史ニ非ザレバ則チ
 能ハズ一室ニ閉居シテ而シテ各國ノ事實ニ通曉シ人ヲシ
 テ之キ目撃耳觸スル如キ感アラシムル者ハ史ニ非ザレバ
 則チ能ハズ而シテ史ノ體タルニ非ズ万国ノ變遷ヲ記ス
 ル者アリ一國ノ事蹟ヲ錄スル者アリ或ハ政治ノ沿革ヲ主
 トシ之ニ雜フルニ民情ヲ以テスルモノアリ或ハ民情ノ向
 背ヲ主トシ之ニ繫クニ政治ヲ以テスル者アリ其他社會邦
 國ノ大勢ニ涉ラズシテ專ラ一事ヲ詳ニスル者アリ夫ノ宗
 教、文學、制度等ノ史ノ如キ皆是ナリ而シテ各一得一失アリ
 蓋シ其全体ヲ記スル者ハ以テ一事ヲ詳ニスルヲ能ハス一

事ヲ叙スル者ハ以テ大勢ヲ舉グルヲ能ハズ之ヲ要スルニ
其主トスル所異ナルアルガ爲メノミ故ニ讀者亦編史ノ目
的ニ隨ヒテ其採ル所ヲ異ニセザルヲ得ザルナリ
本書ノ原本ヲ「セ、コンスタチユーシヨナル、ヒストリー、オフ、
イングランド」ト云フ英國ノ學士トーマス、エルスキン、メー
氏ノ著ス所ニシテ千七百六十年以來一百年間英國憲法ノ
沿革ヲ記スル者ナリ書中國王ノ特權、王室ノ歳入、二院ノ構
成、ソノ特權、政黨、言論、身體ノ自由、及ビ立法ノ進歩等各々題
目ヲ別チテ其事歴ヲ詳ニシ而シテ其末附スルニ千八百六
十年ヨリ近時ニ至ルマテノ憲法ニ關スル大事記一篇ヲ以
テス蓋シ著者ノ意、讀者ヲシテ英國一、百餘年政治ノ沿革ヲ

ルヤ一時ノ制作ニ成ラズシテ而シテ歷世ノ慣習ニ出テタ
ルヲハ世人ノ普ク知ル所ナリ故ニ其終始ヲ詳ニセント欲
セハ史ニ由ルニ非ザレハ則チ能ハサルナリ而シテ夫ノ立
憲政治ニ樞要ノ制度タル宰相責任ノ如キ政黨内閣ノ如キ
大抵此一百年間ニ確定セル者ニシテ英國今時ノ政体ハ此
際ニ大成シ王室ノ安寧、人民ノ自由モ亦此際ニ保全スルヲ
得タリト云フモ敢テ誣言ニ非サルナリ今ヤ吾ガ國ニ於テ
ハ憲法ノ問題社會ノ注目スル所トナリ議論百出ス世人若
シ此書ヲ讀ミテ英國憲法ノ事歴ニ通シ而シテ後之ヲ我が
國情ニ參シテ以テ其得失ヲ察セバ則チ亦裨益スル所ナク
ンハアラサルナリ
譯字ハ大抵世間通用ノ者ヲ用フ而シテ其字面原義ヲ盡ス

ニ足テサル者必ズ注解ヲ挿入ス又譯字ヲ得サル者ニ至
リテハ則チ邦字ヲ以テ原音ニ填シ盡スルニ「」ノ單句ヲ
以テシ且ツ其意義ヲ下ニ注ス凡ソ此類者(按)ノ一字ヲ加ヘ
テ以テ之ヲ原文ニ別異スルニ由ル然レモ此
地名人名物名等ノ標號皆世間普通ノ例ニ由ル然レモ此
一ニ告ケサルヲ得サル者アリ夫レウエ「ル」ス「チヤ」ム
等ハ地名ナリ而シテウエ「ル」ス太子「チヤ」ム公ト記スル
時茲如キハ一切人名ノ例ニ從ヒ單批ヲ用ヒテウエ「ル」ス
太子「チヤ」ム公ト書ス之ヲ我カ國ニ例スルニ武藏常陸ハ
國名ナレモ武藏守常陸守ヲ人ノ稱呼トナスモ如キハ人
名ノ例ニ從ハサルヲ得サルカ如シハ「ル」ハ國名ナリ
然レハ「ル」ハ家ト云フモ如キハ王統ノ稱トナルヲ以

テ則チ「」ノ標號ヲ用フ「ル」セテ「ル」ハ官職ナリ
然レモコロチル某セテ「ル」某ト連スルモハ其姓名ト併セ
テ又人名ノ標號ヲ用フ「ル」アル「ル」等ハ封
侯ノ爵ニシテ其等級モ亦異ナルアリト雖一切譯スルニ公
ノ字ヲ以テシテ某公ト稱シ公侯伯等ノ區別ヲ立テズ亦皆
簡ニ從フナリ

明治十六年二月

譯者識

六

原叙

本史ヲ作ル所以ノ者ハ一百年間英國憲法ノ進歩シ開發シ
シタル沿革ヲ考ヘ立法習慣政畧等ノ件ニ關シ諸般ノ緊要
ナル變遷ヲ記セントスルニ在リ此ニ緊要ト稱スル者ハ是
ニ由リテ以テ政制改良セラレ施治上ノ弊害矯正セラレタ
ル變遷ヲ指シタル者ナリ
本史ハジョージ三世ノ即位ヲ以テ其端ヲ發セリ是憲法史
上自然ノ時期アリテ筆ヲ此ニ起シタルニ非ス蓋シ是ヨリ
以前ノ本史ハハラム氏其才筆ヲ以テ既ニ之ヲ詳記セルガ
故ニ今復述ヘズ但シ本書中ノ記ト聯絡セル者ニ於テハ往
々前代ノ事ニ遡及スルヲアリ
英國ノ混合政治(按)君制貴族制民制等ノ如キヲ考察スルニ
諸原素混合セルヲ云フ

當リ吾人ハ政制ノ諸部局ヲ各自ニ監ニ其變化ヲ視又邦國中ニ存スル他ノ勢力等ニ對スル關係ヲ察セザル可カラズ此觀察法ニ因リ予ハ年月ヲ逐ヒテ事ヲ記スルノ法ヲ用ヒズシテ其考察セント欲スル題目ノ自然ノ區別ニ隨フテ要スト思考セリ此ク人如キ軀裁ハ特別ナル事項ヲシテ時ニ或ハ一目ニ明瞭ナラシムルヲ能ハザラシメ而シテ異様ノ觀法ヲ以テ屢々筆ヲ同一ノ時期ニ下ストアルヲ免レズ然リト雖全躰ヨリ之ヲ看ルキハ予ハ此ヲ以テ最モ便利コシテ且ツ訓誨トスルコ足ルノ法ナリト信ズルナリ其軀裁此クノ如シト雖決シテ史躰ヲ失フニ非ズ則チ各題目毎ニ必ず一十年ニ通シテ之ヲ考フ但シ同時ニ現出セル事件ト雖他ノ題目中ニ入ルベキ者ハ必ず別ニ之ヲ記シテ敢テ混同

スルヲナカシメタリ
第一卷(按)原本全部三卷タリ而シテ譯本ハ則チ其一卷ヲ別チテ數卷トセリ此ニ言フ所ノ第一卷第二卷等ハ皆原本ノ卷ハ王家ノ特權、威力、歲入、及び上下二院ノ構成、權力、職務、及び各院雙方ノ關係ニ就キテ其沿革ヲ記セル第二卷ハ憲法ニ關スル諸題目、就中、政黨、出版、政治上ノ動搖、國教、俗生ノ自由、及び宗教ノ自由等ニ沿革ヲ記セル第三卷ハ同一以時期即チ一百年間ノ我カ立法ノ要概、其政略、及び其結果ヲ記シテ之ヲ畧評シ以テ本史ノ筆ヲ止メントス
本史ヲ記スルニ當リ世評紛然トシテ是非一ナラザルノ問題ニ遭遇スト雖予ハ其沿革ノ事蹟ヲ明カニスルヲ本旨トナシ勉メテ爭議ノ精神ト語勢トヲ避ケタリ然リト雖人民自由ノ開發ハ常ニ安全ニシテ且ツ大利ヲ生シタルノ一事

於テハ予固ク信シテ疑ハズ故ニ歴史上ノ事實ニ就キ其
 開發ノ跡ヲ察スルハ予ノ最モ熱心ヲ感ズル所ニシテ予ハ
 敢テ其熱心ノ情ヲ蔽ラフ欲セサル可シ若シ此事ニ關シ予
 ラシテ亦疑失望ノ念ヲ懷カシメン歟予ハ寧ロ初メヨリ本
 史ヲ著スノ勞ヲ執ラザントスルナリ
 我カ法律ハ年々ノ議院ニ於テ之ヲ議定スル者ニシテ其政畧
 トスル所ハ現時諸政黨ノ政治家并ニ公正ナル學者ノ認知
 スル所ナルヲ以テ予ハ諸政黨ノ政略上ニ論及スルヲ要セ
 ズシテ充分ニ其沿革ヲ記スルヲ得タリ且ツ政治家一身
 上ノ行爲意思ニ涉ラザリシヲ以テ予ハ此一百年間ノ憲法
 史ヲ編ムニ當リ近時ノ施政ヲ評論スルニ於テ敢テ燭ル所
 アラザルナリ

本書總目

- 第一篇 シヨロシ三世在位間國王ノ威權
- 第二篇 攝政ノ時、シヨロシ四世、ウヰリアム四世、ヴヰント
リア女王ノ在位間國王ノ威權
- 第三篇 未丁年不能力ノ間國王ノ特權
- 第四篇 國王ノ歳入、王室ノ費額、年金、國王其王族ニ關
スルノ特權
- 第五篇 上院及ビ貴族
- 第六篇 下院
- 以上原本第一卷
- 第七篇 下院ガ國王法律人民ニ對スル關係
- 第八篇 政黨

第九篇 出版及ビ言論ノ自由

第十篇 同上

以上原本第三卷

第十一篇 臣民ノ自由

第十二篇 教會及ビ宗教ノ自由

第十三篇 同上

第十四篇 同上

第十五篇 地方政府

第十六篇 英國ニ合スル前

第十七篇 英國ノ殖民地及ビ屬地

第十八篇 一般立法ノ進歩

第十九篇 千八百六十年以後十年間憲法ニ關スルノ大

事記

以上原本第三卷

大尾

英國憲法史

エルスキン、メー、原著

嶋田三郎

同譯

第一編

國王威權ノ發達ノ其原因○國王一身上ノ威權ノ制限○宰相ノ責任○ジョージ三世ノ即位○ジョージ三世國王一身ノ威權ヲ政治上ニ奮ハント欲ス○ジョージ三世ノ政略及ビ其効果○ジョージ三世治世間ノ國王ト宰相トノ關係

國王威權ノ發達

我英國ノ歴史ニ於テ國王特權ノ政體廢替シ民權自由伸張シタルノ時限纔ニ終リテ忽チ又國王ノ威權發達セルノ事

實ヲ見ルルニ以テ英國君主政治ノ牢固ニシテ其勢力時ニ乘
シテ奮揚スルコトヲ証スルニ足レリ是ヨリ先シエームスニ
世ノ廢セラレタル革命ニ於テ「スチユア—」家諸王ノ擅制
ハ地ヲ掃ヒテ衰々宰相ニ責任ヲ歸スル國會政府之ニ繼キ
テ立テリ此變革ハ後代ノ諸王ヲシテ國會ノ志向ニ從ハシ
ムルノ前兆ヲ現シタリト雖モ當時ニ在リテハ唯纔ニ國君
ヲシテ法律ヲ違反セザラシムルヲ保證トナリタルニ過キ
キ唯其狀如何ト云フニ君權ノ施行ハ憲法ノ制限内ニ局
セラレテ之ヲ超越スルヲ得ズト雖モ國王ハ其往古ヨリ保
有セル特權ヲ毫モ減スルコトナク依然トシテ政治ト教法ト
ニ關スル諸權ノ出所トナリ名譽ノ泉源トナリテ邦國ノ最
上位ヲ占有セリ但シ此等ノ權力ハ國會ニ對シテ責任ヲ負

ク所ニ宰相之ヲ施行シ而シテ下院ハ國王ノ特權ニ畏怖ス
ルコト昔日ノ如ク然ルニ非スト雖モ國王行フコトヲ得ル以條
件甚々大ニシテ其威權ノ原因モ亦許多ホリケレハ夫ノ革
命後ニ百年餘以上ヲ經過スルニ至ル迄ハ憲法上國王ガ占
ムル所ノ勢力ハ實ニ人民ガ占ムル所ノ勢力ノ上ニ出デタ
リ國會ハ人民ヲ代理スト云フト雖モ幾ト其名義ニ止リ且
ツ當時輿論ヲ適當ニ發シ充分ニ表スルノ手段ニ乏シカ
シガ爲メニ國會ヲ刺衝スルノ力モ亦至ツテ微弱ニシテ之
ガ爲メニ國會ハ一般人民ノ利益ヲ代理セズシテ寧ロ互ニ對
立爭抗スル黨派ノ意見ヲ主張スルノ狀アリ即チ國王ヲ制
限スルガ爲メニ設置シタル人民ノ代議會ニシテ國王ノ
旗下ニ從屬シ國王ノ權力ヲ贊助シ以テ其擴張シタル權力

有幾分カノ配當ヲ得タル是ヲ以テ往日ノ景況ニ比スルハ
 國王其威權ヲ保有スルニ多少ノ困難ヲ増シ諸種ノ勢力ヲ
 盡シテ之ヲ維持スルニ必要トシタリト雖モ其國會ヲ制ス
 ルヲ得ルニ至リテハ依然トシテ舊ク如クナリ
 此際ニ當リテ國力ノ繁盛ヲ加ヘタルハ皆國王其勢力ヲ
 増加スルニ助テ官局ト公費トノ増加ハ以テ恩典
 ヲ以テ惠與スルノ手段トナリ人民ノ富メルニ隨ヒテ社會
 ニ許多ノ階級ヲ生シ之ニ屬スルハ人々其威權ヲ有タル者
 由利害ヲ感觸ス同クシ且ツ國王カ特權ヲ以テ授ケルノ恩
 典ヲ希望シタリ勢此ノ如クナリシカ故ニ後來人民ノ勢
 カヲ擴張スルニキル原因トナル可キ者ニシテ多年ノ間却テ
 テ國王其威權ヲ張ルノ資トナリタリ

王權出ル所ノ原因
 原因○下院

蓋シ國王其威權ヲ張ルノ資タルハ大ニシテ數多シ國王
 ハ其臣民カ最モ得シヨクテ望ム所ノ名譽官職位地登庸ノ如
 キ恩典ヲ頒與シ而シテ此威權ハ諸種ノ人民ニ及ブ迄到ラ
 サル所ナシ選舉者ナリ國會ナリ皆此威權ノ範圍内ニ在リ
 原來上院ニ之ヲ下院ニ比スレハ國王ニ親接シテ利害ヲ同
 シタルノ傾向アリテ貴族ハ朝廷ノ支柱トナリ且其裝飾ト
 ナルハ各國皆然リトス而テ英國ノ貴族ハ我カ國ノ制度中
 ニ包有セラル、所ノ民權ニ對スル堡砦ニシテ君主政治ノ
 ノ外郭ト認メラレ凡ヘテ貴族ヲ造ルノ權ハ國王ノ掌握ス
 ル所ナリ乃チ當時ノ俗貴族若シハ其先祖ハ皆國王ノ寵命
 ニ因テ其班ニ列シ或ハ之ニ因テ既ニ上位登進セシ者アリ
 或ハ登進ノ望ヲ後日ニ屬スル者アリ合同王國ノ貴族ハ位

王封出...

地ハ蘇格蘭及ヒ愛爾蘭ノ貴族ガ垂涎スル所ノ者ナリ(按)合
 國トハ英蘇愛ノ三島ヲ合シタル英王國ノ謂ニシテ蘇愛二
 國ノ貴族ハ此合同王國ノ貴族ニ命セラレシテ望ムナリ
 僧貴族ニ至リテモ亦其尊榮ヲ國君ヨリ得テ上位ニ登進セ
 ンガ爲メニ國王ノ威權ヲ仰瞻スルハ俗貴族ニ異ナルヲ大
 法而シテ斯クノ如クニシテ一切榮譽ノ位置ハ貴族ノ專占
 スル所トナリ而テ權勢顯赫ナルヲ(按)第一等ノ爵位
 公爵トニシテ既ニ各般ノ顯榮ヲ受有シタル者ト雖尙ホガ
 ナス(按)尊爵ノ榮号ヲ得ンコト望ミ地方公ローバクニ出
 名(按)封建制度ノ時ヨリ國王ノ名代トシテ官職ノ
 地方ノ政務ヲ執リタル尊榮ノ官
 如モ之ヲ有スル者ハ他ニ異ナルノ面目ト夫賦與セ
 ラルガ故ニ最尊ノ貴族ト雖更ニ此官職ヲ得テ以テ人
 ニ誇ラント欲スルノ情アリ此他政府ト王宮トシテ大官要職

ハ皆貴族ト其親姻トノ專有ニ歸シ而テ政府ノ恩典ノ分配
 亦大抵貴族ノ司ル所タリ且ツ貴族ノ位地タル親シク朝廷
 ノ恩遇ニ浴シ社會ノ禮待ヲ受テ於茲者ニシテ高貴ナル貴
 族ハ自ラ國王身上ノ朋友トナシ此等ノ理由カガ爲メ
 上院ニ常ニ必ク國王ノ一方ニ傾テ或ハ宰相ニ抗シテ國
 王ヲ助テ或ハ王命ヲ聽キテ自家信スル所ノ説ヲ拋棄シ而
 シテ政黨ノ關係ニ因リテ上院若シ國王ノ信任セル内閣ニ
 反對スルトアルモ其反對ハ卑弱ニシテ柔順ナリ然リト雖
 上院ニシテ此クシ如キ憲法上ノ理論ニ於テ固ヨリ當
 然ノ事ニシテ毫モ矛盾アルヲ見ズト雖モ下院ハ之ニ
 反シテ人民ヲ代理シ國王ト懸隔シテ獨立ノ位地ヲ有シ王
 權ノ擴張ヲ喜ハサル者ナリト認メラル、ナレモ其實際ハ

果シテ如何ナリシ乎其説ノ詳ナルコト之ヲ後段ノ文中ニ
讓リテ此ニハ唯簡單ニ左ノ數言ヲ陳セントス蓋シ一千八
百三十三年代議制度ノ改正ニ至ル迄ハ各州大抵豪族大戶
ノ威權ニ制セラレ今日ニ至テモ尙ホ幾分カ此餘響アリ據
邑ニ至テハ或ハ貴族及ビ其親縁ノ專有セル者多ク然テ
ルモ亦其威權ノ下ニ服スルアリ或ハ政府ノ威權著ク選舉
之間ニ行ハルコトアリ而テ政府ノ貴族トノ範圍外ニ獨立ノ
位地ヲ有スト稱スベキハ唯都府ト大市トナルノ時ニ稀
有ノ事情ニ由リ全國以諸族強大ナク輿論ニ刺激セラレ
ニ非シレバ人民ノ代理及ビ人民利益ノ代理トシテ大抵
憲法上ノ理論ノミニ止リテ實際ニ其職ヲ遂クルコトナ
時若シ黨派ノ異ナル者ナラバ政治社會ニ並立セズラ

國王ガ任命セル内閣諸相ニ公然トシテ反對スル者蓋シ
無カリシナラシ國會ノ議員ニシテ心ヲ傾ケテ國王ノ恩典
ヲ仰望シ選舉ノ間ニ政府ノ内意ヲ奉シ國會ノ内ニ政府
所爲ヲ贊成スル者ハ其功勞ニ對シテ貴族ノ爵ヲ授ケテ
ノ位官職年金ノ賜ヲ受クル等此クノ如キ報酬ヲ公然ニ行
ヒ又初メヨリ其報酬ヲ約束セシムル此他秘密ニ行ハル
ル弊害ニ至リテハ更ニ甚クシキ者アリト雖モ第六篇ニ
至リテ之ヲ詳説スルギヨリ以テ今此ニ論セズ國會ノ議員此
クノ如クニシテ其選舉人ト雖モ此弊害ニ感染セサル者ナ
ク且ツ國力隆盛ナルニ隨ヒ年々非常ニ増加スル所ノ租稅
ヲ徵収支出スルガ爲メニ之ヲ掌理スルノ小官ヲ置クコト其
數甚ク多シ而シテ此等ノ官職ハ皆政府ノ意ヲ受ケ其所爲

人民ノ勤王心ニ富ミタルヲ

ヲ贊成セル議員ノ薦舉セル者ニ授ケテ之ニ副ユルノ位地トナレリ以上掲ケルカ如キ情勢ナルヲ以テ當時國會ニ於テ宰相同意ヲ表スル者ハ登仕ノ途ヲ開キ宰相ニ反對ノ投票ヲ爲ス者ハ廢黜ノ禍ヲ免ルル能ハザリキ前段叙述セシ者ハ皆國王威權ノ發達セル原因ニシテ其他之ヲ助ケル者一アリ英國人民勤王ノ心是ナリ蓋シ英人ハ國王ヲ愛スルノ心ニ厚キヲ以テ非常ニ暴惡シ君ニアラザルヨリハ之ヲ愛セザルヲナシ又英人ガ法律ヲ遵奉シ政府ヲ尊崇シテ敢テ之ニ違ハサル故モ勤王ノ心ニ厚キガ如シ故ニ其ニ般ニ心ヲ歸スル所ニ常ニ政府ノ一方ニ在リ政府ノ所爲ニシテ善良ナラズカ英人舊ク之ヲ贊成シ假令其所爲ニシテ不善ナラシムルモ積習ノ迷誤往々政府ヲ可

國王一身ノ威權制限セラレタルヲ

トナルノ情アリテ之ニ反對スルツ心ナリ國情此ノ如シ英國國會内閣外ノ權力ハ善惡ヲ選ハズ共ニ強大ナリシテ想見スルヲ得ル英國人民之幸不幸ハ其君相ノ才智因テ決スルハ恰モ擅制國ノ君相ニ類スル者アリ其威權ニ此等ノ濫用アリ國王以政治上ニ有ル威權ヲ助長シテ雖モ國王ガ一身ノ資格ヲ以テ政府ヲ預決スル所ヲ疆域ハ大ニ制限セラレタリタリ三世ハ其時代ニ在リテ最モ才幹アリ政治家ナリ内治ニ向テハ革命ノ主義ヲ持シテ身其任ニ當リ尙且射カラ外務ヲ負擔處辦シ條約ヲ商議ヲ爲シ又兵馬ヲ戰陣ノ間ニ指揮セリ然ルニ之ニ繼テ即位スルノ國王ハ才能復カニウリテ及ハズ

宰相ノ責任

テ宰相ニ非常ノ人ヲ出シタルガ故ニ夫ノ宰相責任ト云ヘ
 ル憲法上ノ理論是ヨリ自カラ實行セラルルニ至レリ
 國家ノ政治ハ凡テ國會ニ一切ノ責任ヲ有スル宰相之ヲ行
 モ而シテ每事必ク宰相ノ議ヲ經サレテ之ヲ舉行スル能ク
 大宰相不才ナラン歟過誤アラシク則チ之ヲ黜ク宰相政治
 上ノ罪科アラシク歟則チ之ヲ彈劾ス宰相ノ意見國王ヲ採納
 セラレザラン歟或ハ國會ニ否決セラレン歟則チ職ヲ辭ス
 此ノ如ク一切ノ責任ヲ負擔スルノ宰相アリ則チ國王過惡
 ヲ爲ス能クサレバ往時ハ帝ヲアリテ一家ノ王ハ過度ニ其
 特權ヲ擴張シタルガ爲メ反テ敗亡ヲ取ルコト回キ及テ
 國王自カラ政務ヲ執リ躬其施行ノ責ニ任シタリシガハ
 二王按チヤリハ頭ヲ以テ其罪科ヲ償ヒ一王按シエリハ王
 二王按シエリハ王

謝罪
 國王

ハノーヴル家
 ノ諸王

位ヲ以テ其償ニ供セリ而シテ其子孫終ニ王統ヲ失ハザル
 ヲ得ルニ至レリ今云然ラズ特權ヲ範圍外ニ張ントモ其
 其罪ヲ歸スル所ニ宰相ニ在リテ國王ヨアラズ人民若シ政
 府ニ反對スルアラシク歟古ヘハ之ニ因テ革命ヲ致セシモ今
 ハ内閣ヲ交迭ニ止マル古ヘハ國王ト國會トノ間ニ危險ヲ
 爭抗アリシガ今ハ國會ヲ多數ヲ占ントスル政黨爭議トナ
 リテ制捷ノ黨ハ國家ノ全權ヲ把持ス故ニ政治ノ責任ヲ悉
 ク内閣諸相ノ上ニ歸シタリ内閣諸相ハ國王ノ辛勞危險ヲ
 移シテ之ヲ自家ノ身上ニ擔ヒ之ト同時ニ其威權ヲ大分チ
 割ケリ故ニ白ク國王ハ統治ニ宰相ハ施治ニトスルニ至リ
 功名ヲ貪ルノ國王ニシテ此ノ如キ憲法政治ノ自然ノ結果
 ニ遭ハシタハ恐ラシク其意ニ滿ザル者アラントス然ルニ

其即位ノ後初メテ國會ニ臨ムル演說草案中ニ王手ツカレ
人心ヲ得ヘキ一語ヲ記スル曰ク生テ此國ヲ得テ教
育ヲ此國ニ受ク朕ハ英人ノ名ヲ有スルノ榮譽アリ此
時
至テ前ニ英國ニ君臨セシジョージムスノ子孫タルスナ
トナレシ人々ハレ逃テ業既ニ外人トナレシトナル家ハ
入テ大統ヲ承ケテ英王トナリ且新王ノ國ニ臨ムヤ政
治ノ分裂ヲ合セ黨派ノ一致ヲ爲スル好機會トナレリ
少數
ノ頑固ナル守舊黨アリテ蘇格蘭ニ遺留シ外國ニ入ルカ且
立憲ノ王統ニ臣節ヲ致スルヲ肯セザル然レ雖モ其他
臣
民ハ新王ノ異心ヲ恐ル者ナク千七百四十五年
外
叛逆以後沈淪シテ再興ノ望ナキニ至リテ統心ヲ寄ス
ル者ハ此ニ至リテ幾ハ絶タリ而シテ民權黨ノ團結ハ既

ジョージ三世
ノ教育

解テアルシミナラズピット氏ハ力ヲ尽シテ王權黨ト調和
シ策ヲ立テ久シク王國カ困難ヲ受タル爭抗ヲ杜絶シタリ
此ノ如クニシテ今ハ滿廷不快ノ色ヲ見バズ者ナクシテ民
權黨ヤ王權黨ヤ守舊黨ヤ皆セントジョージムスノ王宮ニ參朝
シ互ニ勤王愛君ノ意ヲ表スルニ力メタリ
ジョージ王ハ性功名ヲ好ミ自カラ實權ヲ攬ルヲ喜ビタル
ガ上ニ其受タル教育ハ他ノ諸事ニ於テ得タル者ナシト雖
モ獨リ國家ノ政務ニ關シテ國王自身ノ權利ヲ把持シ敢テ
之ヲ他人ニ委テザルヲ習得シタリ初メ太子タリシ時千
七百五十二年ノ頃ニ在テ諸臣ノ中守舊黨ノ教師等太子ノ
左右ニ在テ常ニ擅制主義ヲ教授スルノ不可ナルヲ議ス
ル者アリキ此時ニ當テハ人此議ヲ以テ反對黨ノ讒毀ナリ

務ノ重事ヲ處理シ宰臣ノ政略ヲ指揮シテ躬王家ノ恩典ヲ
 頒與セント企テ其志ヲ所ハ唯統御スルノ志ヲ
 自カラ施治セントスルニ在リ蓋シ王ノ人トシテ志向鞏
 固ニシテ確乎動かズ其勇氣逞マシテ計策完成スノ才能
 富メリ其即位ノ初メヨリ國王ノ職務ヲ張ルノ志ヲ決シ在
 位多年ノ間毫モ此目的ヲ變セザリキ
 ボーリントン公嘗テ愛國ノ王ト題セル文ヲ著ハシ
 愛國ノ王アリテ万機ヲ親裁スル如キ政体ヲ説キテヨリ
 即チ所謂愛國ノ王トハ施治ノ實權ヲ執リ自家ノ施治ニ
 主義ヲ同フスル所ノ人ヲ擧テ政務ニ參セシメ其國ヲ治ム
 ルカ爲メ更ニ適切ニ之ヲ言ハ諸種ノ政黨ヲ壓服スルカ
 爲メニ身ヲ其人民ノ最上位ニ置キ以テ萬機ヲ親裁スルモ

ボーリントン
グ
ルークノ政論

...

王ノ即位ノ時
ノ宰相

ラ云ヘリボーリントン公ノ説此クノ如シ然リ
 雖モ國王ニ於テ妄リニ寵臣ヲ重用シ爲メニ王ト高才忠愛
 相臣トノ中間ヲ絶タシムルカ如キボーリントン公
 之公ト雖モ決意テ之ヲ愛國ノ王ト稱セサルナリ然ルニ
 中世ノ計畫セシ所ハ實ニ寵臣重用ノ主義ニテアリ
 其(按)ボーリントン公ノ政論ハ王ヲシテ万機ヲ親裁セ
 キハ妨シト云フ然レモ寵臣ヲシテ賢臣ト並立シ
 其功ヲ妨シヘト云ハ本文ハ蓋シヨリ三世ガビユ
 一ト公ノ如キ寵臣ニ任シテピットノ如キ名臣ヲ疎斥セシ
 ナレトナリ
 シヨリ三世ガ王位ニ即クニ當リテ執權者タルシ内閣
 ニヨリガツナル公及ヒピット氏ノ聯合シテ組織セルノ内閣
 ナリニヨリガツナル公ハ民權黨中一大團結ノ首領ト久ク認
 メテビタル人ニシテ大ニ國會ノ望ミヲ得ピット氏ハ其雄

...

王ノ秘密ノ助
言者

辯ト政治ノ才能トヨリ國民中最モ人望アリ勢力大ナル
 人ナリ此内閣ニハ民權黨ノカレンザル派及ビベロフスル
 派ヲモ併有セリ此内閣ガ國會ニ對スルハ勢力強大ナル
 若若干年間幾ト反對ノ聲ヲ聞カザルニ至リ故ニ此内閣
 ニシテ一致ヲ爲シテ分裂セズンハ其牢固ナル決シテ之ヲ
 犯カ能ハズルナリ然レドモ本國ノ政黨ニ對シテハ其
 此ノ如ク内閣ノ強固ナルヲ物ヲ云フニ一切ノ政權ヲ其掌
 中ヨリ取テ躬行シ之ヲ行ハシテ決心シ此目的ヲ達センカ
 爲タセシメテ及ヒ其他ノ秘密ヲ參畫者ヲ諸黨中ヨリ
 舉テ以テ己ノ以テ幫助トナシタリ此中王權黨最モ多クシテ
 其國王ノ特權ヲ擴メシムル意見ニ至テハ全ク持舊黨ヲ
 持スル所ノ説ニ同一ナリトスホレトスルボトク之ヲ評

曰ク此等ノ徒ハ其古王ニ臣從スルノ意ヲ絶シタリト雖其
 持スル所ノ主義ハ依然トシ舊時ノ主義ナリト云フトハ統
 諸王ガ持シタル擅制主義ヲ云フト蓋シ王ノ意ハ其黨ヲ去
 リテ之ニ代ルニ他黨ヲ以テスルニ止マラスシテ王ニ忠實
 ノ心ヲ懷キ王ノ所欲ヲ遵奉シ王ノ政略ヲ施行シ王ノ志向
 ニ服從スル人々ヲ以テ新黨ニシテ黨ヲ組織セントモ此黨
 派ハ幾時オラスシテ國王ノ徒國王ノ朋友ト指名セラレタ
 リ而シテ王ハ其責任内閣ノ謀議ニ依頼スルヲ廢シテ此
 内廷ノ集會ニ圖議セシメタリ王ノ即位以來第一回國會
 ニ臨ム時ノ演説スラ内閣ヲ付シテ之ヲ議セシメテ王
 ニ下ト公ト共ニ之ヲ起草シセシト氏其語中ニ但書ヲ加シ
 下ト言テ進以シニ王ノ痛クセシト氏ノ議ニ抗シタリ蓋シ

是ヨリ前内閣諸相カ事ヲ處スルニ當リ常ニ國王ノ贊助ヲ得ルヲ定例トシタリシニ此時ニ至リ内閣諸相ノ意見ハ常ニ國王ノ意見ヲ爲メニ反對セラレ且ツ内閣諸相カ其掌中ニアリト信シタル恩典ハ轉シテ王ノ寵臣并ニ其黨與ノ手ニ歸スルニ至レリ此ノ如國王ノ背後ニ立テ隱然政事ヲ左右スル寵臣ノ所爲ハ當時政治家ノ領袖タルクレンゾル氏チヤタム公ロツキンガム公ヘドスル公ボルク氏等ノ痛擧スル所トナレリ或ハ此ノ如ク背後ニ立テ政事ヲ左右スル秘密會議ノ存セシトナシト回護スル者ナキニアラスト雖モ其秘密會議ノ存セシトハ覆フヘカラサルノ事實ニシテ諸政黨ノ史家其性質ヲ論スルノ意見ニ異同アリト雖モ寵臣會議ノ勢力アリシト認ムルニ至リテハ則チ一ナリ

憲法上國王其宰相ニ對スルノ關係○王ノ志政黨ヲ破壊セントスルニアル

蓋シ當時之ニ抗論シテ攻撃ヲ爲ス者ノ激烈ナリシハ政治上ノ競争心ト國王カ民望ナキ黨派ヨリ人ヲ擧テ其親臣トナシタル由之カ大原因ナリト云フト雖馬夫ノ憲法ニ條理ニ考フルモ亦王ノ政畧ハ決シテ之ヲ辯護スル能ハサル者ナリキニ當リテハ諸相其政略ヲ廢棄スルニアラサレハ其憲法政治ニ於テハ總テ國家ノ要議ニ關シテ王ニ歸スルニ重大ノ權力ヲ以テセリ内閣諸相ヲ撰ミ又之ヲ退ル者ハ國王ナリ而シテ之ヲ擧行スルニ當リ王其意見ヲ謀議ノ臣ニ詢ハザラントセハ獨意ヲ以テ之ヲ爲スモ亦能ハザル所ニアラズ外交内治ノ要件ニ關スル諸相ノ決議ハ國王ノ批准ヲ請ハサル可ラス其批准ヲ得スシテ以テ諸相ノ意見行ハレサルニ當リテハ諸相其政略ヲ廢棄スルニアラサレハ其

憲法ニ對スル
責任ヲ負フ
官職ヲ辭セサルハ
憲法ニ對スル
責任ヲ負フ

官職ヲ辭セサルハ一方向テハ國王ニ對スル責任ヲ負ヒ一方ニ向テハ國會ニ對スル責任ヲ負フ者ニシテ其國事ヲ處スルヤ國王ヲ意ヲ満足セシメテ以テ其信任ヲ保持セサル可ラス又國會ニ辯明シテ其是認メ得ルニ足ル所ヲ主義ト行爲トヲ執ラサル可ラサルナリ是ノ如クニ憲法後ニ國王ノ權力ニ至當ニ疆界定マシ國王ハ其責任ヲ宰相ヲ用ヒテ施治スル者ナリ故ニ宰相カ責任ヲ所シ責任ヲ認メサル可ラス宰相ハ唯國王ノ政臣ノミニアラス又自由國公衆ニ使役者ナリ憲法政治ノ體此ノ如ク然ルニ國事ヲ指揮スル國王ノ權力此ノ如キ制限ヲ受ル所以テ其責任ヲ負フ主ノ功名心ヲ満足セシムルヲ能ハス王意ヲ迎ズルニ寵臣等乃チ進言シテ云フ王公王權ヨリ強クナル政黨

王ノ政署ノ危
險ナルヲ

爲メニ束縛セシメタリ故ニ其昔日有シタル特權ヲ恢復セシメ爲メニ政黨ヲ聯合シテ截斷セサル可ラズ而シテ此言ヲ實行スルニキハ果シテ如何ノ效果ヲ現シ得ヘキ歟必只ヤ左ノ如クナラサル可ラス即チ國王ハ自カラ内閣諸相ノ職務ヲ執ルヘシ其諸相ヲ撰ムル其人國會ニ國民性ノ信用ヲ得ルカ爲メニ之ヲ撰ムルニアラスシテ國王ノ意ニ適シ國王ノ政署ヲ施行シ惟命是レ奉スルガ故ニ之ヲ撰ムト云フニ至ラザルニ王ノ本志實ニ此ニ在リ故ニ王ノ自カラ撰ムル相臣位ニ居ルトキニ王其内臣朋友ト連結シテ之ヲ廢黜シ既ニ其内臣朋友ニ位ヲ與ルニ及バズハ之ヲ強制シテ自家ノ政署ヲ施行セシメントシテ王ノ特權ヲ奪フ國王ノ特權ヲ擴張スルノ政署ハ王位ニ對スルモノ人民カ憲法

上有スル所ノ自由ニ對スルモ其大ナル危險ヲ與フル者
 ニシテ固ヨリ之ヲ斥ケサル可ラスト雖モ王ノ性行ニ至テ
 ハ一概ニ非トス可クサル者アリ然レモ世論其政策ヲ非難
 スルノ情ニ蔽ハレテ往々批評ニ苛酷ニ過ルモノナキ能ハ
 ス蓋シ憲法國ノ君主タルニハ王ノ性功名權力ヲ貪ルコト度
 ニ過キタルハ是レ蔽ラ可ラサル事實ナリ其鄙劣ナル狡計
 ヲ運ラシ國若タルノ品質ニ適セサルコトハ是レ王ノ才能ヲ
 贊美スル人ト雖モ肯セサルヲ得サルノ事實ナリ然レモ王
 ヲ全ク國家ニ君主タルノ徳ヲキニアラズ誠心アリ勇氣ア
 リ不拔ノ氣象アリ愛國ノ精神アリ其智識狹隘ニシテ偏見
 執拗ナリト雖モ國ニ善政ヲ布シカ爲メニ誠意力ヲ此ニ盡
 スルコト亦其權力ヲ貪ルシ其難モ勞苦ヲ見捨テ之ヲ避ケル

ナシ實權ヲ把持シテ人民ヲ駕馭スル外君主タルニ其欲
 欲ヲリシト雖モ自カラ國事ヲ處辨シテ局ニ當リ其煩勞ヲ
 耐ルコトハ却テ諸相臣ノ上ニ出タリ王其權力ヲ握ルニ汲々
 タリシト雖モ亦國民ノ名譽光榮ニ汲々タリシト更ニ其權
 力ニ熱心ナルニ劣ラス若シ王ノ性質才能如何ヲ觀察シテ
 正鵠ヲ誤ラサレハ王ノ政畧ヨリ憲法上ニ發現シタル傾向
 及ヒ結果ヲ判スルニ於テ當テ得ルニ庶幾ランカ
 革命以後責任内閣ノ勢漸ヤ成ルノ時ニ及ンテ卒然トシ
 テ國王政權ヲ實施シ内閣諸相ハ王命ヲ宣奉スルノ政制ニ
 回サシトスルハ憲法政治ノ主義ニ對シ實ニ危險ナル退歩
 ノ政畧ト云ハサル可ラス政權ヲ實施スル者内閣諸相ニア
 ラスシテ王自カラ之ヲ爲ストセン歟如何シ國王過テ爲ス

能ハスト云フヲ得ン如何ノ内閣諸相責任ヲ負擔スル云
 マズ得ルニ假設ヒ諸相ニシテ實權有セサルニ尚甘クシ
 而責任ヲ負擔スルニ於テ其國王尙ホ過譽ヲ尤過烈分受セ
 ル能ハズ其ノ實權ニ於テカ立君政治ノ堅壁崩壞スルニ危
 險ヲ免ズルニ能ハズ然リト雖人民自由ノ危険ノ之ヲ國
 君ノ危険ニ比スルニ更ニ甚シキ者アリ國王ノ一身ヨリ出
 テ又其自カラ行フ所ノ權力ハ自由政治上相容レサル者
 以是ノ實ニ擅制政治上憲法政治ノ相分ル所ノ疆界ナリ
 蓋シ善良ニシテ獻明ナル君主ニ雖而上ニ立テ政治ヲ實施
 スルニ於テ然ハ躬カ好ク所以政界ヲ以テ之ヲ其臣民ヲ強
 施セントスルヲ勢ノ免ルニ能ハサル所ナリ夫レ王ノ自家
 ノ一身ニ便利ナルノ故ヲ以テ諸相ヲ撰任シ王躬カラ其行

爲ヲ指揮シ其使隸トシテ之カ位置ヲ保タシメ而シテ諸相
 ノ非難攻撃スル者アレハ王躬カラ非難攻撃ヲ受ケルノ感
 ナシ發シ諸相ヲシテ事務ヲ掌管セシメ又飽クマテ之ヲ實行
 センコトハ勉メ如之其人ヲ觀物ヲ察スルニ至テモ人民ノ利
 益情感ト歸趣ヲ同ラセシメテ内廷ノ高處ヨリ觀察ノ度ヲ
 定ム其此ノ如シ如何ノ民權ト調和ヲ相爲スル政ヲ施ス
 コトヲ得ンヤ
 三
 世カ即位ノ初メニ當リテ行ハレタル政治ノ組
 織ハ今ヨリ之ヲ回顧スルキハ實ニ不完全ナル者ナリ即チ
 内閣諸臣ヲ經テ施行セシ王權ハ憲法上民權ヲ制スルノ勢
 カアリ貴族ノ威力甚ク熾ニシテ國會ノ如キモ人民ヲ充分
 ニ代理スルコトナク又輿論ヲ制セラルルコトナクシテ内閣諸

相ニ屈從スルヲ常トセリ然リト雖モ此等諸般ノ缺點アルニ拘ラス國會ハ尙ホ人民ヲ代表スルノ機關タルヲ失ハサリキ國會ハ人民ノ自由ニ撰出シタル代議士ヨリ成ルニアラスト雖モ其人尙ホ社會各種ノ族ヨリ出テ各種族ノ利益感情ト其歸嚮ヲ一ニセリ才能ト勢力トニヨリテ國會ノ信任ヲ得ルニ足ルノ政治家ハ内閣諸相ノ位ヲ占ムヘシ故ヲ以テ實權ハ上ヨリ發セヌシテ下ヨリ出タリ國君ノ寵臣國政ヲ執ラスシテ政治ニ老練ナル賢士之ガ柄ヲ把リ國會正當ノ權力ハ公認セラレタリ此ノ如クナルヲ以テ國會未ダ完美ナラスシテ改良ヲ要スルアルノ一点ヲ除クノ外憲法政治ノ理論ニ照スモ其制度ニモ缺點ナキモノ、如シ然ルニシヨリシハ此制度ヲ脱ハスシテ之ヲ蹂躪セント決心シ

國會ノ改撰王
威ヲ助ケタル

タリ王ハ内閣諸相カ其實權ヲ己レニ取ラスシテ國會ニ取ルヲ快トセス又王權ヲ制限スル國會ノ制度ヲ快トセス而シテ王カ執リシ所ノ政略一之ニ因テ生出シタル結果トハ王位ニ關スル沿革史中最モ危険ナル者ニ係レリ
王即位ノ後幾時ナラスシテ國會ヲ解散シタルノ一事ハ王權黨ノ權力ヲ國會ニ振ハシムルノ機會ヲ與ヘタリ是ヨリ前王ハ寵臣ビニート公ト共ニ王權黨ノ議員トナルヘキ候補ノ名簿ヲ調製シ之ヲシテ當撰セシメシカ爲メニ盡力至ラサル所ナク此等ノ準備成ルニ至テ國會ヲ解散シ議員ノ改撰ヲ命シタリ而シテ政府カ特權ヲ許可セル城邑ヲシテ現任内閣諸相ノ黨ヲ撰マシメスシテ以テ王權黨ヲ擧ケシメントシタルノミナス之ヲシテ王ト意見ノ相合ハサル諸相

ニ反對セシムル手段ヲ盡シタリ
 新撰國會ヲ開クノ前夜國王ノ演說草案ノ朗讀ヲ聽キ議長
 撰舉ノ協議ヲ爲スカ爲メニウエスミンストルノ樞密員集會
 室ニ於テ集會ヲ爲シタリシニ民權黨及ヒ現任內閣ヲ支持
 スルノ黨派ノミナラス王權黨ノ如キモ相結ビテ內閣ノ招
 待ナキニ此會ニ臨ミタリ(按是レ蓋シ王及ヒビュート等カ竊
 ニ臨マシメ而シテビュート公カ撰舉シテ議長ニ充ントシタ
 ルハソルヲヨシカストト云ヘル某地方ノ紳士ニシテ王權
 黨ノ一人ナリキ)

內閣ヲ破壞ス
 ヘキノ方略

然ルニ王權擴張ノ新政畧ノ謀主タルビュート公ハ其人ト爲
 リ此政畧ヲ成就スヘキ能力ナキ者ナリ彼レハ政治上ニ大
 勢力ヲ有スル豪族勢家ニ縁故ナキ人ナリ彼レハ議院ノ討

論家ニアラサルナリ其風采行爲人望ヲ博スヘキ者ニアラ
 サルナリ彼レハ政治家ニアラスシテ內廷陪從ノ侍臣タル
 ヘキ人ナリ王ノ母ト親密ナル交際アルハ世人ノ誹議ヲ免
 レサル所ナリ加之彼レハ蘇格蘭ノ人ナリ英國人民外國人
 ナ嫉ムノ情ヲ以テ往日ハハノーブル人ヲ忌ミタルニ今ハ
 其方向ヲ轉シテ蘇格蘭人ヲ忌ムニ至レリ蓋革命後引續キ
 タル內亂ニ際シ蘇人ジョージムスヲ援ケテ英人ノ非難ヲ被リ
 タレハナリ抑王權ヲ擴張スルノ計畫ニシテ王ノ寵臣ノ胸
 臆ニ發スル自然ノ情勢ナリト雖モ之ヲ成就スルハ固シ
 其才能ノ耐ル能ハサル所ナリビュート公ノ內廷ニ在ル時既
 ニ世人其權勢ノ赫灼ナルヲ嫉視シ又其蘇人タルニ屬目シ
 テ不快ノ念ヲ懷ク者アリテ彼レノ公然國政ニ與ルニ先チ

テ民情既ニ之ニ反對スルノ狀アリシガ王ノ即位ノ後彼レハ直チニ命セラレテ樞密議會ノ員トナリ席チ内閣ニ列スルコトヲ得タリ又幾時ヲ經サル中ニホルダトチス公ニ年金ヲ與ヘ陽ニ優遇ノ狀ヲ示シテ之ヲ内閣ヨリ除クノ計ヲ爲シビット公ヲ其後任トナシ以テ某省ノ卿ニ任セリ内廷ノ政畧ハ現任ノ内閣ヲ破壊シ王權党ノ人ヲ擧テ之ニ代ヲシムルノ一途ニアリ若シ内閣一致シテ其領袖ノ間互ニ相信任スルニ於テハ之ヲ破ルノ術ヲ施スヲ甚々難シト雖モ當時既ニ内閣諸相ノ間ニ意見ノ合ハサル者アリケレハ内廷ハ此機ヲ失ハヌシテ之ヲ離間シタリ是ニ於テ忽チ最モ勢力アリ民望アルビット氏ト同僚トノ間ニ罅隙ヲ生シタリ此時ニ當リ英國ハ佛國ト兵ヲ構ヘテ互ニ攻戰シタ

ピット氏ニ年
金ヲ與ヘシ

リシニ西班牙ハ佛國ト同盟ノ秘約ヲ締ヒタルカ故ニピット氏ハ不意ニ乘シテ西班牙ヲ擧タント欲シタリピット氏ハ陸軍卿タリシト雖モ内閣員皆此意見ヲ非トシテ之ニ反對シ僅カニ之ヲ贊成シタリシ者ハテムブル公一人アリシイミピット氏ハ同僚ノ反對ニ逢フト雖モ自カラ其事ノ長計タルコトヲ信シ傲然トシテ内閣ニ公言シテ曰ク余ハ人民多數ノ意ニヨリテ内閣ノ員ニ列シタル者ナリ予ハ己レノ信スル所ヲ曲ケテ人ニ從フノ政略ニ對シテ責任ヲ負フ能ハサルナリト然レモ他ノ諸員モ亦同等ノ氣勢ヲ張テ之ニ抗論シタルカ故ニピット氏ハ遂ニ辭職ヲ爲サルヲ得サルニ至レリ王ハ此機ニ乘シピット氏ニ遇スルニ愛敬ヲ以テシテ之ヲ

金と與へり
ビニート公ノ
威權

屈セシメシトシ乃チ其妻ヲ爵スルニチヤタムノ「パロニ」ヲ
以テシ(案)「パロニ」ハ氏ノ子孫三世ノ間年金三千「ポンド」ヲ
與ラルノ命ヲ下セリ抑氏ノ英國ニ功勞アルヤ此恩賞アル
ハ當然ノ事ナルヲ以テ氏ハ敢テ辞セシテ之ヲ受タリシ
コノカ爲メニ名望頓ニ衰フルニ至レリ蓋氏ノ勢力民望甚
ク熾ナリシヲ以テ王ハ其反對ヲ受シテ恐レ之ト和シテ
其攻撃ヲ避ケ之ヲ惠ミテ民望ヲ殺カントノ狡計ヲ施シ
リシニ計果シテ其圖ニ當リシナリ左レハ氏ノ退職ヲ報道
スルノ新聞紙ハ同時ニ其貴族ノ爵位ヲ受ケ年金ノ恩典ヲ
得タルヲ報道シ是マテ氏ニ向テ民望ヲ表シタルノ聲ハ
變シテ之ヲ非難スルニ至リタリ
ビニート氏ノ位ヲ去ルヤビニート公ハ内閣中ニ勢力ヲ占メ威

首領
千七百六十二

焰頓ニ諸員ヲ上ニ出タリ彼レ内閣ニ於テ政務ノ樞軸ヲ執
ル上院ハ全權ヲ左右セント企テタリ彼レモグレモシト公シ
ヨシグレシテ諸事ヲ決行セリ而シテ老功ノ宰相ニ「カッスル」
公ハビニート公ノ擅威ヲ憤ルニ至レリ蓋シ是ヨリ先キ國王
ノ恩典ヲ與フルハ「カッスル」公之ヲ專掌セシメ今ハ毫モ
公ニ協議スルヲナク王躬カラ七人ノ貴族ヲ新設シ公嘗テ之
ヲ與カリ聽クコトナクビニート公ハ官職年金ヲ其朋友ニ頒與
シ公ヲ賛成スルト否トニ關セス事情此ノ如クナリケレハ
「カッスル」公ハ内閣ニ於テ屢々異議ヲ立テ幾回カ抵抗ヲ
受テ後遂ニ千七百六十二年五月ニ及テ職ヲ辭スル
至リ

千七百六十二年
ビニート公
首相トナル

是に於テ内廷ノ目的初メテ達スルヲ得テビニート公直ニ
大藏事務長官トナリ内閣ノ事ヲ總裁セリ此ノ寵由ニ昇進
實ニ駿速ナリト云フヘシ初メ寢殿侍從ノ長トナリシヨリ
樞密會ノ議員トナリリチモンド公園ノ監督トナリ卿トナ
リ首相トナルニ至ル迄纔カニ十三ヶ月間ノミ而シテ之ニ
繼テ王弟ウカリアムニナイト、オズ、ガーターノ爵位ヲ授ル
ト同時ニビニート公ニモ亦同爵ヲ與ヘタリビニート公ノ駿速
ニ高官尊爵ヲ得タルハ英國ノ政事家カ勞苦ヲ經歷シ歲月
ヲ積テ漸次ニ之ヲ致セルノ例ニ似テ殆ト士爾其ノ如
キ東國ノ宰相カ一飛シテ其爵位ヲ取ル者ノ如シ然リト雖
王寵ノ此ノ如ク厚キカ爲メニ彼レガ原來受タルノ嫉惡ハ
愈々加ハリ彼レ民權党ト相容レサル益々甚シク人民ノ誹

王及ビ新任宰
相ノ擅制

難ク受クル倍々大ナルニ至レリ或ハ云フ心竊カニビニート
公ヲ敵視スル者彼ヲシテ早ク勢力ヲ失ハシメンカ爲メニ
故サラニ其昇進ヲ勸メタリト想フニ若シ彼レヲシテ官爵
ヲ貪ルト此ニ至ラス下位ニ甘ンシテ實權ヲ占メシメハ其
抱持シタル一種ノ政畧ヲ安然遂行シテ其目的ヲ成就セン
ナラシムルニ至ルベシト云フニ其意ハ如何ナルヤ
國王ト首相トハ強制手段ヲ以テ百事ヲ實行セんと決心シ
反對者ヲ壓倒シテ其膽氣ヲ沮喪セシトスル擅斷ノ計畫ハ
王權ヲ擴充セントスル專横ノ意見ヲ露出スルニ至レリ佛
國ト平和ノ條約ヲ爲サントシテ其準備ノ約ヲ承諾シタル
ニ國民ハ一般ニ之ヲ不可トスルノ意ヲ現セシカハ王之ヲ
憤リテ此政畧ニ異見ヲ立テ、反對シタル者ニ向ヒ其憤情

又泄ラシタリ
 デボンシャー公ハ此和約ヲ決議スヘキ會ニ召サレタレト
 モ辭シテ出席セサリケレハ王ノ辱シムル所トナリテ式部
 長官ノ職ヲ辭シタリ而シテ公ノ辭職ノ後數日ニシテ王自
 カラ筆ヲ探テ樞密議員ノ名簿ヨリ公ノ姓名ヲ削除セリ此
 ノ如キ苛酷ノ待遇ヲ受テ前王ノ世ニ於テハ公シヨ
 トマサクヅ^トル公ノ二人アリシ^トミソルポール氏此二公
 ノ樞密議員ヲ罷メラレシ故テ説テ曰クハ公ハ公然トノ
 惡意アル反對ヲ爲シサグヅ^トル公ハヨシクテシノ戰爭後破
 廉耻ノ刑ヲ受ケタルニヨレリト二公ノ名ヲ削ラレタリ
 此等ノ事故アリシニヨレリ然ルニデボンシャー公ハ故ナ
 クシテ此苛酷ノ處分ニ逢ヒタルニヨリロッキンガム公ハ之

王
 以
 上
 之
 事

以上ノ事

ヲ聞ク直チニ謁見ヲ王ニ求メ從來國家ニ勢力アリ功勞
 アル人々ハ今ニ至テ政府ノ範圍外ニ驅逐セラレ而シテ其
 勢力ト功勞トハ國王ノ悅フ所トナラスシテ却テ其不快ノ
 事故トホリタル旨ヲ陳述シテ直チニ其宮廷^ニ職ヲ辭シタ
 リ
 之ニ繼テ民權黨ノ貴族ハ一般ニ驅出スル所トナリ
 ツル公然ラフトン公ロッキンガム公ハ上院ノ議員トシテ佛
 國ト和約ヲ爲スノ議ヲ敢テ非難セシテ以テ各々其州^ノロ
 小^トリ^トテナシト^ト見^トタリ^トヲ罷メラレタリテホソ
 公ハ其交友ト進退ヲ共ニシ且罷免ノ凌辱ヲ避ケンカ
 爲メ其州^ノヲ辭セリ
 此^ノ如ク王權黨ガ復讐ノ舉ニ出テタルハ唯民權黨之領袖

按註上ニ見ヘタリ

以上ノ所爲ヨ

止マラス佛國和約ノ議ニ對シテ否議セシ官吏ハ悉ク之
 シテ罷免シ其朋友若クハ庇蔭ヲ受タル者ハ小官ト雖モ亦
 驅逐セラレ書記吏ノ如キ卑官小吏收稅事務ノ如キ區々々
 ル職ヲ執ル者ニ至ル迄其職ヲ斥ケラルニ至レリ其此ニ至
 ルハ何レ罪ガアルト云フニ唯王及ヒ其寵臣ニ不快ヲ與ヘ
 タル民權黨ノ人々カ之ヲ撰任セシトシ事アルノミ王權
 黨ハ一方ニハ恩賞ヲ濫與シ之ヲ賄賂トシ其黨ノ政畧ヲ贊
 成スル者ヲ募リ一方ニハ此苛酷ナル罷免ノ待遇ヲ爲シテ
 反對ノ氣焰ヲ挫折セシトセリ故ニ貴族ハ從順ホラサルヲ
 得テ政黨ヲ壓倒セラレサルヲ得テ國會ノ權勢ハ微弱ナラ
 サルヲ得サツケリ
 佛國平和ノ議此ニ至リテ國會ノ贊成ヲ得タリテ王權

リ政黨上ニ生
セシ効果

母リテハ内廷ヲ提テ祝フ曰ク我兒ハ今英國ヲ
 眞王タルコトヲ得タリト然ルニウエールス妃ノ此祝賀ハ尙ホ
 早クシテ忽チ其勢ヲ變シタリ原來責任内閣ノ時ニ於テハ
 上等社會ニ屹立スル政黨ノ間ニ權力ヲ争フコトナリシニ國
 王ノ特權ヲ擴張スルニ至リ是レマテ小異同ヲ立テタル政
 黨ハ一致ヲ奏ヲ顯ハシ合シテ一體ノ民權黨ヲナシテ反對
 ノ位置ヲ取レリ蓋シ此等ノ民權黨ハハノリザル家ノ王位
 ニ即キシヨリ以來内閣ニ在テ王家ヲ輔弼シ來リシガ今ハ
 内閣ヲ去テ人民ヲ自由ニ確定シ王權ヲ放縱ヲ制スルヲ以
 テ其任下ナセリ事情此ノ如クナルヲ以テシヨリ三世カ
 國王一身ノ威權ヲ擴張シテ革命以前ノ舊態ニ復セシト欲
 セタルノ一舉ハ以テ王權ヲ張ルノ結果トナラスシテ却テ

民權ヲ振起スルノ津梁トナリ從來國王ノ一方ニ立テ輔弼
 ノ職ニ任シ以テ自家ノ主義ヲ伸張セントセシ有力者ヲ驅
 テ民間ニ出シタルカ故ニ人民自由ノ爲メニハ屈強ナル領
 袖ヲ與ヘ國王カ特權ヲ主張シタルハ恰モ人民ヲシテ新
 ニ權利ト自由トヲ確定セシムルノ媒トナレリ
 王ノ寵臣ビート公ハ其官位ノ登進極メテ速カナリシニ雖
 モ忽チ失敗シテ其職ヲ失フニ至リシハ其登進ニ比スレバ
 更ニ速ナリキ蓋シ公内ニ在テハ内閣同僚ノ間ニ協合ニ
 致チ得テ又自黨ノ應援ハ之ヲ必期スル能ハス外ニ在テ
 ハ世上ヨリ強敵ノ攻撃ヲ受ケ反對黨ノ公ヲ怨恨スルコト愈
 々深キヲ加ヘ公ヲ譏毀スルノ言語ハ新聞紙上ニ滿チ著ル
 シク民望ヲ失ヒ其地位困難ニシ又支持ス可ラス是ヲ以テ

ビエート公ノ
失職

結果

其地位困難ニシ

公ハ自カラ明言セシ如ク自家ノ敗亡ヲ招クノミナラス併
 セテ主君ヲ連累ノ禍ニ陷レシヲ恐レ終ニ其職ヲ辭セサ
 ルヲ得サルニ至レリ公カ初メ其職ヲ得シヨリ纔カニ十一
 ヲ月ヲ出テオシテ事茲ニ至リシヲ以テ各政黨ハ更ナリ王
 卜雖モ公カ今回辭職ノ急遽ナルニ驚ケリ然レモ公在職ノ
 間ニ於テ王ヲシテ制御ヲ愛スルノ情ヲ恣ニセシメ主位ニ
 立テ自カラ政務ヲ指揮セント欲スル王ノ宿志ヲ益々獎勵
 シタリ
 且ツビエート公其職ヲ去ルト雖モ決シテ其職ト共ニ其實權
 ヲ放棄スルノ意ニアラサリキ彼レ、シヨ、シ、グ、レン、ツ、ル、氏
 ヲシテ内閣首相ノ位ヲ嗣ガシメシメテ密約シ又グレンツ
 ル氏ト相謀リテ内閣ニ舉ク人々ヲ定メ然シテ後其身

ビエート公隱
然尙ホ王意ヲ
左右ス

ハ退テ内廷ニ入レリ蓋シ公ガ内廷ニ在テ廷議ヲ隨意ニ左
 右シ得ルコトハ外部ノ内閣ニ首相タル時ニ比スレハ更ニ甚
 キ者アリ而テグレンヅル氏カ組織セル新内閣ハ恰モ王ノ
 平生ノ計畫ニ適シ王及ヒ寵臣ノ機關トナリテ唯命維奉ス
 ルノ内閣ナルヘシト豫期セラレタリ而シテ當初ニ在テハ
 グレンヅル氏ハ果シテ内廷ノ代理者タルニ過キサリキチ
 時スターラド公曰ク世人ハ尙ホ帷幕ヲ隔テ、内ニ坐スル
 ソビエト公ニ着目セリ而テ其帷幕タル甚ク透明ニシテ内
 部ノ有様ヲ蔽フニ足ラズト然レモグレンヅル氏ハ竟ニ權
 カノ外觀ノミチ以テ満足スルノ人ニアラサルナリ彼レビ
 ニト公ノ威焰赫々トシテ遙カニ自家ノ權勢ニ超ユル者ア
 ルヲ憎ミ私カニ王カ其信用ヲ宰相ニ置カサルコトヲ王ニ怨

日十

王ビユーリ公
 ナシテピット
 氏ト協議セシム

訴セリ彼レ權カヲ愛スルノ情ハ王ニ讓ラス其志氣豪壯ニ
 シテ頗ル驕傲ナリ飽クマテモ宰相タル自家ノ權利ヲ固守
 シ且ツ自家ノ才能ト權勢トニ乏シカラサルヲ自信シ而シ
 テ其權カノ出所ハ王ニアラスシテ寧ロ國會ニアリトナシ
 其眼ヲ國會ニ矚スルニ至レリ
 王ハ其平生ニ計畫セル政畧ニ宰相ノ反對スルヲ發見シ宰
 相カ王ト意見ヲ異ニシ且其氣質ノ驕傲ナルヲ忌ミ唯機ヲ
 俟テ其職ヲ奪ハント欲セリ故ニエグレモント公ノ死ス
 ルヤ王ハピット公ヲ使トシテ新内閣ヲ組織スル爲ニ公然
 ピット氏ト協議セシメタリ而シテ今ヤ王ハ先キニ施シタ
 ル政畧ノ惡果ヲ實驗セサル可ラサルニ至レリ蓋シ王ハ先
 キニ民權黨ノ領袖ヲ悉ク政府ヨリ放逐シ且ツ先代ヨリ宰

相ノ地位ヲ点メ來リテ王ヲ束縛セント試ミタル諸臣ノ如キハ苟モ王ガ位ニ在リテ笏ヲ握ル間ハ如何ナル時會ニ際スルモ決シテ再ヒ舉ケテ政治ヲ彌ケシメサル可シト決心シタリキ然ルニ今ヤピット氏カ舉用シテ以テ内閣ヲ組織セント欲スル所ノ人々ハ即チ王カ先キニ決シテ舉用セサルヘシト決心シタル人々ナリキ殊ニ奇ト謂フヘキハピット氏カ首相ニ推舉シ王ヲシテ信任セシト欲スルノ人ハテムプル公ニシテ公ハ曾テウルクス（按）政府カ佛國ト和議セシノルスブリトヲ庇護セシノ故ヲ以テ痛ク王ノ忿怒ニ觸レタルノ人ナリ是ヲ以テ王ハ俄カニ其心ヲ變ヘシテ此ノ如ク嫌忌スヘキ約款ニ甘從スルヲ肯ヘンセシテ斷然之ヲ拒ミタリ王ノ言ニ曰ク此事ハ朕ノ名譽ニ關スル所ニ

王自カラ政治
ヲ行フニカム

シテ朕ハ我名譽ヲ保護セサル可ラスト蓋シ王ニ取リテハグレンヅ（非）ルノ内閣ヲ心ニ快シトスルニアラスト雖其常ニ蛇蝎視セル民權黨ノ内閣ニ比スレハ少シク忍ヒ易キモノアリ是ヲ以テ王ハ止ムヲ得スシテグレンヅ（非）ルノ内閣ヲ保續セサル可ラサルニ至レリ而シテグレンヅ（非）ル氏ハ氏ヲ排斥センカ爲メニ周旋セシ内廷寵臣ノ專横ヲ痛撃スルヲ倍々甚シカリシヲ以テ王ハ約スルニ内閣諸相ニ信ヲ置カントナリテシ終ニピット公ヲシテ内廷ヲ去ラシメタリ王及ヒグレンヅ（非）ル氏ハ互ヒニ各自ノ權力ヲ争ヒタリト雖其政略ノ主義トスル所ニ至テハ則チ一ニシテ共ニ擅制ヲ好ミ他ノ攻撃ヲ容ルルノ量ナク專ラ權勢ヲ張ラントニ銳意セリグレンヅ（非）ルノ内閣ノ施政中著明ノ事件ト稱スヘ

王ノ專横議院ノ特權ヲ蹂躪ス

キモノハウイリクスニ向テ專横ナル處置ヲ施シタルト始メテ亞米利加ノ殖民ニ租稅ヲ課シタルトノ二事ニアリ而シテ前者ハ大ニ王ノ獎勵贊助セシ所ニシテ後者ハ王ノ自カテ發言セシ所ナリト云フ反對黨ヲ威服スルニ至テハ王ノ處置ハ内閣諸相ヨリモ更ニ嚴ナルモノアリテムアル公ハウイルクスト交際アリテ之ヲ庇護セシヲ以テ樞密會院ノ名籍ヨリ其姓名ヲ削除セラレ且ツ其州ノ「ロードリユーテナンジー」ノ職ヲ剝奪セラレタリゼテラル、コンウエー、コロネルバリー、コロチル、アッコートノ諸氏ハ議院ニ於テ王ノ意ニ反スル起立ヲ爲シタルヲ以テ其武官ノ職ヲ失ヒシユルボルン公ハ王ノ傳令官タルノ職ヲ免セラレタリ

又議院ノ特權ト雖モ王ノ忿怒ヲ防クニ足ラサルナリ蓋シ

國王ノ專横ナル干渉ヲ防カンカ爲メニ議院内ニ在テハ演說ノ自由ノ行ハル、ト茲ニ數百年ニ及ヘリ故ニ議院内討論ノ報告ハ國王之ヲ耳ニス可カラス如何ナル議員ト雖モ議場ノ論說ノ爲メニ罪ヲ獲ヘカラスト云フハ憲法上ノ定則ナリト公認セラル、所ナリ又「ハノーブル」家ノ諸王ハ會テ立法院ノ討論ニ出席セシ「アラサリ」シナリ然ルニ王ハ下院ニ於テウイリクスニ對スルノ處置ヲ議スルノ際常ニ「グレンゾ」氏ヲシテ議場ノ景況ヲ報セシメ討論ノ模様及ヒ起立ノ數ニ注目シ各議員ノ意見及ヒ投票ヲ視察シ若シ政府ノ意見ニ與ミセザルモノアレハ是等ノ議員ニ向テ自カラ怨怒ノ言ヲ發セリゼテラル、コンウエーノ文武ノ職ヲ奪ハント「最初」ニ發言セシモノハ則チ王ナリ「フィツヘル」

ト氏ヲ商務局ヨリ擯斥センコトヲ主張シタル者ハ則チ王ナ
 リ議院ノ特權ニ關シテ朝廷ト意見ヲ異ニセル官吏チ一切
 免職セシメント欲シタル者ハ則チ王ナリグレンゾル氏ハ
 王ノ處置ノ嚴刻ニ失スルヲ矯メンカ爲メニウイルクスノ事件
 ナ終結スルニ至ル迄右等ノ處置ヲ延期センコトヲ望ミ而シ
 テコンウエー氏ト相通信シ以テ氏ノ廢黜ヲ避ケシコトカヲ
 蓋セリ然レモグレンゾル氏ノ盡力モ其効ナク終ニコンウエー
 氏ハ一擧ノ下ニ其寢殿侍從長ノ職ヲ失ヒ併セテ其飛龍隊
 (按)騎歩兩用ニ供將官ノ職ヲモ失ヒタリ又カルクラフト氏
 ノ如キモ副監軍ノ職ヲ奪ハレタリ
 夫ノジュームス一世ガツル、エドウィン、サンデーヌチ處シタル
 ノ爲ニ倣ヒ又ハチャールス一世ガセルデン及ヒ其他ノ重モ

ナル國會議員チ處シタルノ爲ニ倣ヒテ今ゼチラルコンウ
 一若クハコロチルバリイヲ牢獄ニ投セントスルカ如キハ
 到底當時ニ於テ爲シ能ハサル所ナリ又チャールス一世カ夫
 ノ五名ノ國會議員ニ施シタル不祥ノ處置ノ如キモ當時ニ
 於テ之チ再ヒスル能ハサルナリ然レモ王カ立憲政治ノ定
 則ヲ犯セシコトハ以上暴虐ナル諸王ト毫モ異ナル所ナキナ
 リ蓋シ王ハ其力ノ及フヘキ限りハ王ノ忿怒ニ觸レタルモ
 ノチ責罰シ議院内ノ事ト雖モ之チ憚ラス又特權上若クハ
 國法上ニ於テ正當ニ與ヘサル可ラサルノ保護ト雖モ一ト
 タヒ王ノ意ニ觸レシ者ヘハ之チ與ヘサリキ而シテ下院ニ
 於テハ如此シ其自由ヲ害セラル、ニモ拘ラス殆ント默從
 シテ敢テ抗言ノ色ヲ發スル者ナカリシ

公衆ノ不平

當時暴民四方ニ嘯集シ不平ノ聲民間ニ囂々タルヲ聞カハ以テ王ヲシテ其政畧ノ奏功セサリシヲ覺知セシムルニ十分ナラサル可ラス王ハ濫リニ權力ヲ吝愛シタルカ爲メニ既ニ民望ヲ失ヘリ然ルニ王ハ尙ホ悟ラス立法ノ事タル行政ノ事タル恩典ノ事タルヲ問ハス躬カラ一切ノ政務ヲ直轄シ又宰相ヲシテ議院ノ實況ヲ報セシメ以テ陰ニ國會ノ討論ニ參預セリ

王トグレンヅ
キルノ内閣ト
ノ異議

一千七百六十五年ニ至リ王トグレンヅノ内閣トノ間ニ再ヒ異議ヲ生セリ抑内閣ハ攝政條例ノ事ニ關シテ王ヲ怒ヲ招キタリ恩典及ヒ歳出ノ事ニ關シテ王ニ抗爭シタリ内裏ニ於テ長議論ヲ爲シ王ヲ困倦セシメタリ是ヲ以テ王ハ五月ニ至リ内閣ヲ解散セントスルノ意ヲ告ケカムベル

ランド公ヲシテピット氏ト協議セシメ新内閣ヲ組織セントシタレト事成ラサリシヲ以テ止ムヲ得スシテ再ヒグレンヅノ内閣ヲ保續セリ而シテ内閣諸相ハ其議ノ王ト協ハサル所以ノモノハピット公カ陰ニ勢ヲ擅ニシテ王ト内閣トヲ間絶スルカ爲メナリトナシ王カ内閣諸臣ヲ罷免セントシタルカ如キモ全ク之ヲピット公ノ隱謀ニ歸セリ故ヲ以テ今内閣ヲ保續スルニシキ諸相カ求メシ所ノ約款ノ第一ハ如何ナル方法ヲ以テスルモ決メテピット公ヲノ陛下ノ評議ニ預ラシム可ラスト云フニアリ王ハ自カラ此約ヲ確守セシメトテ保証セリ而シテ王ハ爾後尙ホ秘密ニピット公ト信ヲ通シタリトノ疑ヲ入ル者ナキニアラスト雖王ノ固ク此約ヲ履行シタルナルヘシト信スヘキ理

由ナキニアラヌ蓋シ王ハ既ニ自カラ政務ヲ管理スルノ力量ニ乏シカラサルヲ以テ最早ヤ寵臣ノ助言ヲ要セサルナリ王ノ能力既ニ自カラ任スルニ足レリ其要スル所ハ助言者ニアラスシテ機關ニアリ又王ト内閣トノ約款ノ第二ハビュート公ノ弟スチュアート、マッケンズビーヨリ蘇格蘭ノ御璽官タルノ職ヲ奪ヒ之ヲソ蘇格蘭ヲ統理スルノ權ヲ失ハシムルニアリ王ハ初メマッケンズビーニ約スルニ終身其官ニ在ラシムルヲ以テシタルカ故ニ今内閣ト此約ヲ結フハ王ノ本意ニアラスト雖モ止ムヲ得スシテ是ニ從ヘリ然レモ王ト内閣トノ分裂ハ益々甚クシキヲ加ヘタリ抑内閣カ王ニ強迫シタルハ勢ノ止ムヘカラサル者ト謂フヘシ何トナレハ内閣諸相ハ王カ内閣ヲ覆ヘサントソ隱謀ヲ企ツルヲ知

民權黨トノ協
議

ルカ故ニ自家ノ權勢ヲ殺カンカ爲メノ隱謀ニ對シテハ勉メテ激論痛議セサルヲ得サル者アレハナリヘドフアルド公ノ如キハ王ヲ諫メテ曰ク願クハ王ノ權方ト恩愛トヲ併行セシメ、ト而シテ王ノ黨中ニ於テハ此等ノ諍議ヲ以テ暴慢無禮ナリトナシ宰相ハ王ヲ奴隸ヲシメ、トヲ欲スル者ナリト囂呼シ以テ宰相ノ非ヲ鳴ラセリ而シテ王ハ内閣ヲ解ク爲メニハ如何ナル讓與ヲ爲スモ敢テ願ヒサルベシト決心シタリ

王ノ叔父カムベルランド公ハ王ノ爲メニ新内閣ヲ組織セシカ爲メニ再ヒ協議ヲ開ケリ公ハ前キニ蘇格蘭人ニ對シテ殘酷ノ處置ヲ施シ爲メニ屠人ノ綽名ヲ附セラレタルノ人ニシテ英人カピット公及ヒ蘇格蘭人ヲ憎ムノ甚クシキ

一千七百六十
五年ロッキン
ガム公ノ内閣

ヨリ公カ先キノ殘酷シ處置ハ今ニ至リ却テ人望ヲ得ルノ
 助ケトナレリ蓋シ蘇格蘭ノ叛民ハ既ニ罰セラレ而シテ公
 ハ則チ是ヲ責罰シタルノ人ナルヲ以テ公ヲシテ朝廷ニア
 ラシムルモ決シテ蘇格蘭人ノ要求ヲ容ル、ノ患アラサレ
 ハナリ此協議ハ七週間ニ延續シ其間殆ト政府ナキノ有様
 ナリキ而シテピット氏ヲシテ内閣ヲ組織セシムルハ到底
 又行フヘカラサル所ナリグレンツルノ内閣ヲ保續スルハ
 最早ヤ忍フヘカラサル所ナリ是ヲ以テ王ハ終ニ其曾テ恐
 恨セシ所ノ人々ヲ以テ再ビ其身ヲ圍マシムルヲ止ム可カ
 ラストスルニ至レリ

北
 ロッキンガム公ハ王ノ嫌惡セル民權黨貴族ノ領袖ニシテ
 先キニ其リニテナンシノ職ヲ奪ハレタルノ政治家ナリ

而シテ今ヤ王ハ公ヲ内閣首相ノ位ニ擧ケサル可ラサルニ
 至レリセテラル、コンウエーハ王ガ先キニ其武官ノ職ヲ奪ヒ
 タルノ人ナリ而シテ今ヤ擧ケラレテ一省ノ長官トナリ氏
 ハ又下院政黨ノ領袖トナレリ故ニ王ガ是レ迄ニ施シ來リ
 タル復讐ノ政畧ハ爲メニ一變シテ大ニ非認セラル、所ト
 ナレリ初メカムベルランド公カ内閣ヲ組織セシメラビッ
 氏ニ謀ルヤピット氏ハ其約款ノ一トシテ政治上ノ意見
 ヲ異ニシタルカ爲メニ官位ヲ失ヒタル者ヲ悉ク舊ニ復セ
 シメテ求メタリ而シテ王ニ於テモ此要求ヲ豫期シ之ヲ諾
 スルノ心算ナリキロッキンガムノ内閣モ亦同一ノ要求ヲ
 爲セリ而シテホルン氏ノ言ニ據レバロッキンガムノ内閣
 ハ夫ノ議院内ノ投票ハ爲メニ武官ノ職ヲ奪フヲ以テ危険

ロッキンガム
内閣ノ要請

ノ事ニシテ且憲法ニ背違スルノ非擧ナリトシテ之ヲ排斥
セリト云フボルク氏且曰ク如此キ非擧ノ永ク廢止セラレ
ンコトハ吾人ノ希望スル所ナリト
民權黨ノ新内閣ニ於テモビュート公ノ權勢ヲ憎ムコトハ敢テ
前内閣ニ讓ラサルナリ故ニ初メ其地位ヲ占ムルニ先ダテ
強請シテ曰クマッケンズー氏ヲ再勤セシメント欲スル如キ
情念ハ全ク之ヲ擲棄シ又ビュート公ノ親友ノ官職ヲ奪ヒ以
テビュート公ハ公然ト陰然トチ問ハス直接ト間接トヲ論セ
ス毫モ公務ニ干渉シテ政治ヲ左右スルカ如キコトナキナ世
ニ証セサル可カラスト即チ如此キノ約款ヲ立テ然シテ後
チ始メテ組織シタルノ内閣ナルカ故ニ決シテ内廷ノ權勢
ノ行ハル、カ如キコトアラサルヘキナリ然ルニ新内閣ハ幾

時ナラスシテ内廷ノ權勢ニ屈服セリトノ非評ヲ世上ヨリ
受クルニ至レリビツト氏曰ク余ハ内閣ヲ支配スル所ノ一
種ノ權勢ノ行ハレタル形跡ヲ明カニ發見シタタリト信ス
ルナリト抑ビツト氏ハビュート公ノ生國ナル蘇格蘭ニ對シ
テ憎惡ノ私心ヲ有スルカ如キコトアラサルハ氏ノ自カラ公
言セル所ナリ然ルニ氏ノ言ニ曰ク蘇格蘭ノ人民ハ智慮ニ
乏シク其執ル所ノ主義ハ自由ト兩立ス可ラサル者ナリト
然レ政府ニ在テハセテラル、コンウエーハ決シテ此ノ如ク内
廷ノ權勢ニ支配セラル、コトナキヲ辨シテ曰ク余ハ曾テ如
此キコトヲ感セサルナリ余ハ余ノ一身ニ關シテハ此事ヲ拒
否セサルヲ得ス而シテ余ノ觀察ノ及ラ所ヲ以テスレハ他
ノ諸相ニ於テモ如此キコトアラサルナリト

當時ビ一ト公カ内廷ニ於テ多少ノ勢力ヲ有セシヤ否ヤハ世ノ之ヲ評スルモノ一ナラスシテ久シク物議ノ集マル所トナリタリキ世人ハ更ナリ公ト同時代ニ在テ世事ニ通セル者ト雖モ多クハ公カ勢力ヲ有セシヲ信セリ然ルニ數年後ニ至リ公ハ最モ明白ニ此事ナキヲ辨解シタルヲ以テ此事ニ就テハ又餘疑ナキモノ、如シ然レモ王ニ與ミスル所ノ黨派ハ益々其員數ヲ増加シ且其事務ニ應スルノ方法モ亦鍛鍊セル規律ニヨリテ動クモノ、如シ王黨中或ルモノハ政府若クハ内廷ニ職ヲ奉スルト雖モ此等ノ人々ハ宰相ノ指揮ニ従ハスシテ一ニ王ノ命ニ從ヘリ又王若クハ其他衆多ノ王族ヨリ惠與ヲ受ケ卑官ナリト雖モ大利アル職ヲ有スル者アリテ此等ノ輩ハ朝廷ノ内命ニ從テ國會ニ可

否ノ決テ爲セリ然レモ王黨中ノ多數ハ獨立ナル國會議員ヨリ成ル者ニシテ此等ノ人々ハ種々ノ情念ニ刺勵セラレテ王黨ニ左袒セシ者ナリ就中多クハ國王ノ特權ヲ尊崇スルカ爲メ勤王心ニ厚キカ爲メ王ノ果斷ニシテ且正直ナルヲ信スルカ爲メ王ト一身上ノ親交アルカ爲メニシテ其他恩典ニ浴ビ官位登進ノ利ヲ得ントスルカ如キ目的ヲ以テ王黨ニ左袒セシ者モ亦少シトセス以上ノ人々ハ相合シテ一体ノ黨派ヲ組織シ通常黨派心ヲ發セシムル所ノ原因ト同一ノ原因ニヨリ相固結シテ分離ス可カラサルニ至レリ抑々此黨派ノ主義トスル所ハ立憲政体ト兩立ス可カラサル者ニシテ今ヤ此黨派ハ單ニ助言若クハ隱謀ヲ以テ王ヲ援クルニ止マラス固結シテ一体ヲ成シ以テ議院ノ討論ヲ

王ノ權勢議院ニ行ハル

動カニ至レリ而シテ如此キ目的ヲ以テ一體ノ黨派ヲ組織セシヲ見レム内廷政界ノ憲法ニ背違スルコト更ニ一階ノ甚タシキヲ加ヘタルヲ知ルコト足レリ

王ハ躬カラ諸宰相ノ事務ヲ指揮スルコト從前ノ如クニシテ亞米利加ノ殖民ニ對スルノ處置ニ至テハ殊ニ然リトス是レ主カ亞米利加ノ殖民ニ對スルノ處置ハ直チニ一身ノ權利下名譽トニ關スル者ナリト思惟シタレバナリ諸宰相ハ亞米利加人民ト歎和センカ爲メニハ夫ノ印紙稅條例ヲ廢止スルヲ必要ナリト主張シタリト雖モ王ハ斷シテ此議ニ反對セリ王ハ先ツ内閣ニ於テ此議ニ反對シタリト雖モ諸宰相ハ敢テ此議ヲ實行セントシタルヲ以テ王與一ハ國王タルノ名稱ヲ威權ヲ賴ミ一ハ多數ノ國會議員ガ王ニ服ス

ルヲ頼ミ議院ニ於テ再ヒ此議ニ抗セントセリ然レモ王ハ恰モ宰相ノ議ニ一致シ敢テ自家ノ名ヲ以テ其議ニ抗スルヲ欲セサルカ如クニ外觀ヲ裝ヒタリハ一コソルト公人ヲシテ自説テ王ニ進奏セシメテ曰ク陛下ハ其本意ヲ告知スヘシ然ルモハ宰相ニ於テ印紙稅條例廢止ノ議案ヲ決行セントスルモ或ハ之ヲ妨クルヲ得ント然ルニ王ハ此事ヲ欲セサルカ如クニシテ且曰ク朕ハ議院内ノ討論ニ於テ人民ノ意見ヲ動スヲ欲セス朕ハ既ニ宰相ノ議ニ一致スルコトヲ約セリト如此ク王ハ自家ノ名ヲ以テ此議案ニ抗スルヲ欲セサルカ如クニ外觀ヲ裝ヒタリト雖モ王ニ黨スルノ諸議員ハ公然王ノ名ヲ以テ此議案ニ抗シタルハ争フ可カラサルノ事實ナリ又王ハ此事ノ憲法ニ背違スルヲ認メタリト

雖モシンスワイール公ノ如キハ之ヲ可トセリ公ハ王ト此
 事ヲ議スルノ際言テ曰ク陛下ノ名ヲ以テ議案ヲ國會ニ通
 過セシメントスルハ憲法ニ背違スルノ處置ナリト雖モ王
 ト議院カ互ニ其權利ヲ確定シテ之ヲ維持セントスル場合
 ニ在テハ其權利ヲ保護センカ爲メニ陛下ノ意見ヲ通知ス
 ルハ適當ノナリト信スルナリト而シテロッキンガム公ハ
 斯カル秘密ノ勢力ノ行ハル、ヲ制センカ爲メニ王ニ詰フ
 テ此議案ニ一致スル旨ノ證書ヲ得タリ
 内閣諸相ハ内廷ノ政畧ヨリ起リタル他ノ困難ニ當ラサル
 可カラサル者アリ蓋シ内閣ハ王黨ニ與ニスル所ノ獨立ナ
 ル國會議員ノ爲メニ攻撃ヲ受クルノミナラス内閣カ常ニ
 賛助ヲ期スル所ノ官位ヲ有セル國會議員ノ如キモ亦内閣

王黨ノ舉動

ニ抗争セリ此等ノ議員ハ内閣ニ反對スルノ説ヲ主張シテ
 カラ依然トシテ官吏ノ地位ヲ保テタリ王ハ先キニ自ラ可
 トスル所ノ議ニ抗スル者ハ必ス之ヲ嚴罰スルノ主義ヲ執
 リシカ今ヤ其方畧ノ外觀ヲ變シ王ノ非トスル所ノ内閣ノ
 議案ニ抗スル者ヲ助ケテ大ニ其位地ヲ鞏固ニシ其氣勢ヲ
 鼓舞セリ内閣ハ此等官吏ノ所爲ノ非ナルヲ極論スルト雖
 モ其効ナク王ハ是レニ應スルニ辯解ト約束トヲ以テセリ
 而シテ王ノ精兵タル此等ノ一隊ノ官吏ハ終ニ政府ノ忌諱
 ニ觸ル、ヲ免ル、ヲ得タリ且ツヤ此等ノ王黨カ内閣ニ抗
 スルハ獨リ印紙稅條例ヲ廢止スルノ一事ニ止ラスシテ(若
 シ其反對ヲシテ此一事ニ止ラシメハ本心之ヲ非ナリト信
 シテ反對スルノ外觀ヲ裝フヲ得シナラン)一般ノ施政ニ對

シテ痛ク之ヲ攻撃セリホルク氏カ如此ク奇怪ナル性質ヲ有スル所ノ攻撃ヲ形容シテ官吏及ヒ年金家ノ攻撃ナリト云ヒシハ當テ得タリト云フヘシロッキンガハ公ハ其官ニ在ルヤ口ヲ極メテ斯カル政畧ノ非ナルヲ争ヒ其官ヲ去ルヤ一日王ニ告ケテ曰ク臣カ嘗テ陛下ノ爲メニ宰相タルノ榮ヲ辱メセシトキ相結ンテ一隊ヲ成ス所ノ官吏輩ノ爲メニ大ニ施政ノ事務ヲ障害セラレタリ臣ハ此事ノ悉ク陛下ノ意ニアラサランコトヲ信シ此事ノ臣カ陛下ニ報ニル所以ノ施政ニ大害アリシコト夫他日陛下ニ奏上セント思ヒ敢テ自カラ慰メタルト而シテ斯カル政畧ハホルク氏ノ語ヲ以テ之ヲ云ヘハ自由政体ニ固有セル安固ヲモ生セス又專制政体ニ固有セル氣力ヲモ生セサル者ナリ按自由政体ノ利トスル所ハ人民ノ權

利自由ヲ安固ナラシムルニアリ專制政体ノ利トスル所ハ施政ノ滯滞セサルコト然ルニヨリ三世ノ政畧ハ自由政体ノ利ヲモ生セス又專制政治ノ利ヲモ生セサルヲ云フナリ然ルニ王ハ此際ニ於テ万事自家ノ意ニ合ハサル所ノロッキンガムノ内閣ヲ覆ヒサント計畫セリ王ハ内閣ノ改進主義ヲ非トセリ王ハ内閣ニ與ミセル黨派ノ強大ナルヲ憎ミ之ヲ破ラントセリ就中王ハ内閣諸相ノ獨立ナルヲ憤レリ蓋シ王ハ宰相サント自家ノ意見ヲ施行セシメントチ欲スト雖也現時ノ内閣及ヒ是レニ與ミスルノ黨派ハ王ヲシテ其宿志ヲ遂ゲシムルニ於テ一大障害ナレバナリ終ニ一千七百六十六年七月ニ至リ内閣ヲ解散セリ而シテ王ハビッー氏ニ依リ自家ノ意見ト政略トニ合ヒタル新内閣ヲ組織セシトシ望メリ蓋シビッー氏ハ一世ノ雄傑タル

一千七百六十
六年グラフト
ン公ノ内閣

チ以テ斯カル困難ノ事ヲ處スルハ氏ニ如クモノアヲサレ
 ハナリ且ヤピット氏ヲシテ一身上ニ於テ王ニ親近シ易カ
 ラシムヘキ他ノ事情アリ氏ハ上院若クハ同位ノ人々ノ間
 ニ在テハ極メテ驕傲ナリト雖ニ國王ニ接スルヤ謙遜ニシ
 テ且諂媚ノ風アリホルン氏曾テピット氏ヲ嘲譏シテ曰ク
 彼レ纔カニ内裏ヲ覘フモ爲メニ彼レヲ醉ハシトルニ足レ
 リ而シテ彼レ終身之レヲ忘ル、能ハサルナリトホルン氏
 ノ此語ハ著明ニシテ當時ノ人々ハ皆其証ヒサルヲ許ルセ
 リ而シテ如此ク廷臣タルノ性質ヲ有スルノ人ハ假令ヒ之
 ナシテ外觀ノミニ止マラシムルモ前内閣ト痛ク軋轢シタ
 ル王ニ取リテハ多少安ンヌヘキ者アリ故ニ今ヤピット氏
 ハ御璽官ノ職ヲ占メテホルン公ノ爵ヲ以テ上院ニ列シグラ

王政黨ノ解散
 ニ勉ム

トト公ヲ戴テ首相トシ以テ新内閣ヲ組織セテト企テ
 又テホルン公ヲシテ王ニ親近シ易カラシムヘキ他ノ理由
 リ王ハ政黨ヲ破ルチ目的トシ焦慮シテ此目的ヲ遂ケント
 セリ而シテホルン公モ種々ノ原因ニヨリ齊シク政黨ヲ破
 碎スルハ政畧ヲ持スルカ故ニ此點ニ於テハ王ノ説ト公ノ
 説ト相符合セリ一千七百六十六年七月王ハホルン公ニ書
 チ贈リテ曰ク政黨ヲ撲滅シ夫ノ貴重スヘキ自由ノ幸福ヲ
 シテ放逸ニ流レサランメンガ爲メニ政府ニ服従スルハ風
 チ恢復スルノ政畧ニ至テハ朕ハ汝ヲホルン公カ奮テ之ヲ贊
 助スヘキヲ確信スルナリト又同年十二月二日王ハ公ニ書
 チ與ヘテ曰ク現今ノ如ク各政黨ノ固結シテ相樹立スルモ

ノヲ敗ラシムハ其不當ノ要求ヲ排除シ人望アル有力ナル
 人々ヲ壓下スルノ外ニ手段アルナシ但シ私交上ノ結合ニ
 至テハ其欲スル所ニ任ズヘキノミト又一千七百六十七年
 六月二十五日王ハ公ニ書ヲ與人テ曰ク朕ハ黨派ニ唯伏セ
 ス之ヲ制服セシメ爲メニ如何ナル困難ヲモ顧ミサルヘシ
 止決心セリト云フ
 蓋シ王ハ此政略ニヨリ自家ノ一身ノ權勢ヲ張ラシムル
 ノ宿志ヲ達セシムル欲スルモノナリ而シテ民權黨ヲ壓倒ス
 ルハ則チビョーリト公ノ黨派及ヒ其他廷臣ヲ王命ヲシテ維レ
 奉スル者ヲ官ニ擧ケンカ爲メナリ然ルニチヤム公カ政黨
 撲滅ノ主義ヲ持スルモノハ全ク王ト其目的ヲ異ニセリ彼
 レ外觀ニ於テハ一箇ノ廷臣タルニ似タリト雖モ原ト憲法

王ノ一身上ノ
權勢

政治ヲ主張スルノ政治家ニシテ王ノ特權及ヒ内廷權勢ノ
 政治ヲ非トスル者ナリ彼レ一生ノ進路ハ全ク自家ノ才智
 ニ依ルモノニシテ政黨ノ應援ヲ要セス獨立獨行優カニ政
 黨ノ上ニ出テ彼レ自家ノ能辯ニシテ政略ニ長シ人望ニ富
 メルヲ自信セリ然リ而シテ彼レ各政黨ヲ破ラント欲スル
 モハ之ヲ破リテ以テ自カラ其上ニ立ダント欲スルハナ
 リ然レモ公ハ毫モ其目的ヲ達スルコト能ハサリキ其政略ニ
 ヨリ民權黨ノ激怒ヲ挑起シ願ミテ一身ノ位置ヲ見レハ王
 黨及ヒ他ノ不調和ナル元素ヨリ組織セル政府ノ上ニ立ツ
 コ過キスシテ王黨ノ爲メニハ絶ヘス施政ヲ妨ケラレ他ノ
 不調和ナル元素ニ對シテハ全ク其權力ヲ施スコト能ハサリ
 キ公ハ終ニ王ノ智慮却テ公ニ優ルモノアリテ公ノ勢力及

ヒ黨與ハ全ク破レ而シテ内廷ノ黨派ハ爲メニ非常ノ勢力
 ナ得タルヲ發見セリ然レモ公ノ之ヲ發見スルヤ既ニ後レ
 タリト云フヘシ故ニ各政黨ハ撲滅セラレテ而シテ王黨遂
 ニ全捷ヲ得タリ各政黨ノ領袖ハ悉ク其名望ヲ失ヒ王ノ自
 家ノ意見ニ從ヒ公衆ノ自由ヲ危カラシムル所ノ主義ニ據
 テ政務ヲ指揮セリボルク氏曰クチタル公カ其施政ノ主義
 ナ完成シタルノ時ハ彼レ最早ヤ宰相タルノ實力ヲ有セサ
 リキト而シテタル公ハ後チ其自カラ作爲セル禍ヲ救ハ
 ンカ爲メニ其會テ政府ニ在リシ時ニ相分離シ所シ政黨
 ニ再ヒ加入センコトヲ求メタリ公ノ言ニ曰ク決要點ヲ爭
 及ソテハ往時ノ小異同ヲ棄テサル可カラズト云フ然レモ
 然ルニ此時ニ當リ王ノ權勢ヲ加フヘキ他ノ事情ヨリ起リ

タシキタル公ハ貴族ノ爵位ヲ受ケタルヲ爲メニ大ニ其人
 望ヲ失ヘリ又公ハ下院ニ在テ非常ノ權力ヲ有シタリ一雖
 一トクビ公ノ下院ヲ去ルヤ大ニ其權力ヲ失ヘリ且ヤ公
 ノ位置タル僅カニ御璽官ノ職ヲ占ムルニ過キサルヲ以テ
 更ニ公ハ宰相タルノ權力ヲ減シタリ而シテ公ハ其政界
 行ハレサルガ爲メニ鬱々トシテ樂マサリシヲ以テ其施政
 軟弱ニシテ加フルニ政府内ノ結合ヲ失ヒリ蓋シ公ハ内閣
 中卓出ノ大傑ナリト雖モ數月間少シモ政治ニ預ル能ハス
 シテ首相クラフトン公及ヒ王ユリ公ハ協議以ヘキヲ委任
 受テタルコンウェー氏下面晤スルコトヲモ辭セテ左レ職公
 ノ事務ヲ執ラサルガ爲メニグラフトン公ハ政治ノ各部署
 悉ク活氣ヲ失ヒタルヲ歎シタルハ亦怪ムニ足ラサルナリ

然ルニ王ハ一千七百六十八年二月二十三日書ヲチタム公ニ與ヘ平ノ其職ヲ辭セサラントテ望ミ且曰ク汝ノ身ハ朕ノ私宅ニ閉居スルト雖モ汝ノ名ハ以テ朕ノ政治ヲ運轉セシムルニ足レリト然レモ公ハ必身衰弱ヲ極ハタ終ニ同年十月ニ至リ其職ヲ辭シテ内閣ヲ去レリ

チタム公去リ内閣其精神ヲ失ヒタルヲ以テ王ハ自家ノ權勢ヲ擅ニシテ國家ノ政務ヲ直轄シ毫モ制セラル所アラサルナリ若シチタム公ヲシテ内閣ニ在ラシタム内閣ハ一種獨立ノ政略ヲ有セシナル可シト雖モ今ヤ内閣ハ一定ノ主義ヲ有セサルナリグラフトン公及ヒノルス公ノ如キムニハ傾情ナルカ爲メニハ從順ナルカ爲メニ唯默シテ王ノ制御ニ服從セリ

一千七百七十
年ノルス公ノ
内閣

王ニ在テハ各政黨ヲ破碎シ以テ其勢ニ乘セリ國會議員ハ主義ト領袖トヲ失ヒタルヲ以テ直接ニ王ノ權力ニ制御セラレタリホレノスワルボルノ言ニ曰ク何人タルヲ問ハス總テ朝廷ニ嚮ヒ何事タルヲ問ハス朝廷ノ命スル所ニ從テ起立ヲ爲セリト王ハ如此クニシテ政黨ヲ破碎スルノ大目的ヲ達スルヲ得タリ

後グラフトン公ノ職ヲ去ルヤノルス公是ニ繼テ國家ノ柄ヲ握リシヲ以テ王ノ權力愈々内閣ニ行ハル所トナレリ抑公ハ王權黨ノ主義ヲ持シ國王ヲ特權ヲ主張シ人ト爲ルニ傾情從順ニシテ且一身上ニ於テ王ト相親シキヲ以テ自家ノ意見ヲ放棄シ數年ノ間王命維奉スルニ機關タルヲ甘シシタリキウルクスヲ嚴刑ニ處シ國會ノ特權ヲ強張シテ

亞米利加人民ヲ壓制セシガ如キハ皆内廷ノ政略ヨリ發シ
 タルノ惡結果ナリナルス公ノ施政中王ハ自家一身ノ信用
 ナ公ノ政治ノ成廢ニ賭シ宰相攻撃ヲ受クレバ自家ニ攻撃
 ナ受ケタルヲ思ヒヲナシ宰相ニ於テ失敗ヲ取ルコアレバ
 自家ニ凌辱ヲ受ケタルノ思ヒヲナセリ
 一千七百七十年ナタム公ハ議院ニ於テ明言シテ曰ク今王
 ノ即位以來未ダ會テ獨立ナル宰相アリシヲ見テ而シテ此
 一時期ノ政治上ノ各事件ニ就キ王カ悉ク是ニ干涉シタル
 ノ實証ハ之ヲ枚舉スルニ遑アラズト
 反對説ノ爲メニ下院ノウイルクスニ對スル處置ヲ覆審セシ
 トシ而シテナタム公カ將ニ議院解散ヲ要求スルノ議ヲ起
 サントスルノ際ニ在テ王ノ忿怒限リナク王ハゼチラルコ

王自カラ政治
 ナ指揮ス

ソウエー卜ノ會話ニ於テ如此キ要求ヲ諾セシヨリハ寧ロ王
 位ヲ退クヘシト公言セリ王ハ其劍ヲ握リ曰ク朕ハ議院解
 散ノ要求ニ應セシヨリハ直チニ實力ニ訴ントスト當時或
 ハ流傳シテ曰ク王ハ其自カラ認メテ王權ヲ蠶食スルト思
 惟スル事ニ抗センカ爲メニ現ニ兵カヲ準備セリト
 一千七百七十二年二月二十六日上院ニ於テ王族婚姻條例
 ヲ議スルノ際王ハノルス公ニ書ヲ與ヘテ曰ク朕ハ此議案
 ナ通過セシメンカ爲メニ全力ヲ尽サンコトヲ期望スルナリ
 此事ヤ政治ニ關スル者ニアラスシテ朕ノ一身ニ關スル所
 ナリ故ニ苟モ朕ノ臣下タル者ニ對シテハ誠實ニ之ヲ贊助
 センコトヲ期望スルノ權アリ若シ之ヲ奉セサルモノアレバ
 朕ハ必ス之ヲ記シテ忘レサルヘシト又同年三月十四日王

公書ヲソルルス公ニ與テ曰ク朕ハ委員會ニ於テ可否決テ
 取ルニ際シテ場外ニ去リシ者ト場内ニ止リシ者トシ姓名
 簿ヲ得ンコトヲ欲スルナリ朕ハ此姓名簿ヲ以テ翌朝接客所
 ニ於テ諸議員ヲ待スルノ標準トナス可シト（按當時英國議
 テ上院ニテ可否決テ取ルノ際議案ヲ可トスル者ハ場外ニ
 去リ之ヲ非トスル者ハ場内ニ止マリ各々其數ヲ算シテ以
 ト之ヲ否ト決スルノ法アリ本文王ノ語ハ議案ヲ可トセシ者
 否トセシ者トシテ其姓簿ヲ得諸議員ノ議案ヲ贊セシ者
 ニスヘシト云フノ意ナリ又王ハ他ノ一書ニ於テ曰ク朕ハ
 昨夜チヤトルスツクスガ汝ノルルヲシテ強ヒテ彼レノ説
 ニ一致セシメント豫期シタルコトヲ聞キ甚ク忿怒ニ堪ヘサ
 ル者アリ汝ハ彼レカ汝ニ對スルノ所爲ニ感觸ナキコアラ
 サル旨ヲ彼レニ通センコトヲ朕ハ望ムナリト而シテ王カ自
 家ノ權勢ヲ以テ議院ノ討論ヲ動カシ得ヘキヲ信シタルコ

ハ左ノ一書ヲ見ルモ亦之ヲ証スルニ足ルヘキナリ一千七
 百七十四年六月二十六日王カノルズ公ニ與ヘタル書ニ曰ク
 朕ハ上院タルト下院タルトナ問ハス國王タルモノハ常ニ
 自カラ議場ノ議案ヲ廢棄スルヲ得ンコトヲ望ムナリ而シテ
 國王ハ如何ナル時會ニ於テモ議案ニ反對スルノ權利ヲ實
 用スル能ハスト確定セシムル如キ言語ヲ用ユルニ至テハ
 朕ハ是ニ同意スルコト能ハスト
 王ハ常ニ議員ノ演説及ヒ可否ノ決ニ注意シ又議員ノ可否
 ノ決ヲ表シタルト否ヤトニ注意スルノミナラス王カ發言
 大可シト豫期シタル議員ニシテ果シテ發言スルヤ否ヤヲ
 モ視察セリ故ニ緊急ノ時ニ迫リ議員ノ可否決ヲ動カシ於
 テ王ノ權勢ノ銳利ニシテ且勢力ニ富ムコトハ大藏省ヨリ出

大ス所ノ黨派整理者(按緊要ナリ問題ノ決議ニ際シ自黨ノ
 ヲ掌ル者各黨ニ之ヲ大藏省ヨリ出ス所ノ黨派整理者
 ハ在官黨ノ整理者ヲ指ス英國ノ制ニ於テ首相ハ大藏長官
 ナリト雖モ是ニ及ハサルナリ而シテ王ハ又常ニ反對者
 ノ出席セサルノ機ニ乗セントセリ故ニフックス氏カ巴里
 ニ遊ブヲ聞クヤ王ハ一千七百七十六年十一月十五日書ヲ
 ノルス公ニ與ヘテ曰ク閉場前ニ汝ノ出タシ得ヘキ丈ノ議
 案ヲ出ダス可シ何トナレハ議員ノ夫ノ喧器ナル激論ノ爲
 ノニ耳ヲ奪ハレサル時ニ非ラサレハ誠實ニ真正ノ事務ヲ
 考察スルヲ能ハサレハナリト
 又武官ノ如キモ尙ホ王ノ忿怒ニ觸ル、ノ恐ナキ能ハサル
 ナリコロネルバライ及ヒソル、ヒューウリアムスハ共ニ不屈
 ノ議員ナリシニ一千七百七十三年此二氏ハ其官位登進ニ

官吏ノ罷免

預ルヲ得サリキ而シテコロ子ルバライハ王ノ處置ヲ不正
 ナリトスルノ意ヲ示サンカ爲ニ自ラ其官ヲ辭セリ然レモ
 王ト雖モ議院内ノ起立ノ爲ニ武官ノ職ヲ奪フハ王ノ正當
 ナル權利ニ非サルヲ悟リシ者ノ如シ一千七百七十九年三
 月五日王ハノルス公ニ書ヲ與テ曰ク其説ノ政府ニ合フカ
 爲ニ國會ヲ經由シテ政府ニ移リタル一般ノ官吏ハ若シ政
 府ノ意見ニ反對スルヲアレハ其職ヲ失ハサル可ラサルハ
 朕ノ固ク信スル所ナリ然リト雖モ此等ノ場合ハ武官ノ職
 ヲ奪フノ場合ト甚ク異ナルモノアリト又同年三月九日ノ
 書ニ曰ク朕ハ政府ノ意見ニ反對セル諸議員中官位ヲ有ス
 ル者ト武官ノ職ヲ有スル者トノ姓名簿ヲ得ノコトヲ望ムト
 王及ヒ宰相ハ久シク議院ノ反對者ヲ抑壓シ得タリト雖モ

此間無論ニ誹謗ヲ受ケ人望ヲ失スルコト甚シカリキ而シテ
 千七百七十八年ニ至リ政府ノ政畧全ク失敗シ亞米利加ノ
 騷亂激發シ加ルニ佛國ト兵端ヲ開カサル可ラサルノ機ニ
 迫ルタルヲ以テ王及ヒ内閣諸相ハチタム公及ヒ其他二三
 ノ反對黨ノ領袖ヲ内閣ニ入レンカ爲メニチタム公ト協議
 ヲ開カサル可カラサルニ至レリ王ハ此等諸氏ノ弼助ヲ要
 スルト雖モ諸氏ノ政畧ニ從フテアラサルニシテ決心セリ
 王ハ諸氏ヲ自家ノ意ヲ奉スルノ機關ヲラシムルヲ欲ス
 ト雖モ責任宰相ヲラシムルヲ欲セサルナリサレバ若シ諸
 氏ノ説ニ行ハル、コアラハ王ハ自カラ屈抑ノ耻辱ニ甘
 シセサルヲ得サル可ナリ
 一千七百七十八年三月十五日王ノノルス公ニ與ヘタル書

ニ曰ク朕ハ彼輩ノ束縛ヲ受ケテ王位ヲ保タンヨリハ寧ロ
 頭ニ戴クノ王冕ヲ脱センコトヲ欲スルナリト又同年三月十
 七日ノ書ニ曰ク朕ハ現時ノ宰相ヲ補助セント欲シテ内閣
 ニ來ル者ハ幾人タリトモ之ヲ許スヘシ然レモ苟モ全國中
 十人ノ朕ニ黨スルモノアル間ハ決シテ朕ハ奴隸ノ境遇ニ
 陷ルヲ肯ンセサル可シ親愛ナル公ヨ朕ハ自カフ一身ノ耻
 辱ナリトスル所ニ甘ンセンヨリハ朕ノ王冕ヲ脱スルニ如
 カス我國民ニシテ朕ニ黨ヒサルニ至ルカ如キハ必無ノ事
 ナリ我國民ニシテ若シ朕ニ黨セサラン歟我國民ハ他ノ國
 王ヲ戴カサル可カラス如何トナレハ朕ハ終身朕ヲ不幸ナ
 ラシムル者ニハ手ヲ置クヲ欲セサレハナリト又翌十八日
 ノ書ニ曰ク若シ我國民ニシテ朕ニ黨セサラン歟朕ハ彼ノ

自暴自棄ナル人々ノ束縛ヲ受クルヲ欲セサルナリ耻辱ヲ
 忍ンテ王位ヲ有センヨリハ寧ロ新政体ノ此島國ニ創起セ
 ラレテ王位ヲ失フニ至ルノ愈レルニ如カサルナリト然ル
 ニ内閣組織ノ協議成ラヌヲ公モ亦繼テ死シタルヲ以
 テ不幸ナルノルス公ノ内閣交迭ナリシテ繼續シタリ
 是ニ於テウエースマウス公ヲ領袖トシテ新内閣ヲ組織セシ
 一チ民權黨ノ領袖ニ謀レリ然ルニ民權黨ノ領袖ニ於テ之
 ヲ拒ミタルハ蓋シ策ノ得タル者ト謂フ可カラズ而シテ爾
 後王ハ王ノ意ヲ奉スルノ保証ヲナスモノニ非サレハ何人
 タリトモ内閣ニ入レサルヘシト決心セリ左ノハ一千七百
 七十九年二月四日王カノルス公ニ與ヘタル書ニ曰ク汝ハ
 ハウ公ヲ薦メタリト雖モ朕ハ彼レヲ海軍卿ノ職ニ任スル

王自家ノ政略
 ヲ斷行ス

王自家ノ政略

先チ彼レヲシテ地球上各國ト戰ヲ爲スノ政略ニ同意
 スル旨ヲ誓ヒシメサル可ラスト又同年六月二十二日ノ書
 ニ曰ク朕ハ何人ガ官位ヲ欲スルカヲ聞クニ先チ其人ヲ
 殺テ我王國ヲ無欲ニ維持シ一兵ヲモ米國ヨリ引揚ケサル
 ヘク又決シテ其獨立ヲ許サハルヘキ旨ヲ誓ハシメ且自家
 ノ手ヲ以テ此誓書ニ調印セシメサル可カラスト是ニ因テ
 之ヲ見ルニ此悲ム可キ戰爭ヲ稱シテ王ノ戰爭ト云フニ至
 リタルモ亦理ナキニアラサルナリ
 此時ニ當リシヨシヨシキルメネン公ノ如キハ下院ニ於テ
 明言シテ曰ク王ハ則チ自家ノ宰相ト立テフツクス氏歎シ
 テ曰ク陛下ハ則チ自家ノ爲メニ他ヨリ助言ヲ受ケ世ヲ治
 宰相トシテ而シテ内閣ノ首相ト雖モ王ノ意ニ抗スル能ハ

王已ムテ得ス

事ヲ自カテ非ナリトシテ所シ政界ヲ執行シ改國會ヲシ
 テ任ツ不詳ナル政略ヲ贊助セシ見レハ王カ他ツ政治家
 世向テ其從順ヲラシテ期望シテモ亦怪ムニ足ラザルヤ
 物蓋シタルス公ハ亞米利加戰爭ヲ延續シテヨリテ
 以意見ヲ覆クニ能ハサリキソルス公ハ亞米利加戰爭ノ結
 果ハ王ト國家トヲ衰替スルニ終ルヘシトシテ説ヲ持スル所
 ノコリウエル公ソ辭職ヲ王ニ告ケ且日ク余ハ議論ニ於テハ
 一大不利アリ何レナレハ余ハ過クル三年間心中ニ於テ
 常ニ言ヒウエル公ト同説ナレハナリト然ルニ公ト説此ノ如
 シケルニ拘ハラス王ソ執拗不變ナル意思ニ抗スル能ハズ
 シテ其命ニ從ヒタリキ

王カ再ヒ反對黨ト協議セサル可カラサルニ至リタリ

シテ反對黨ト
 協議ノ端ヲ開

王カ再ヒ反對黨ト
 協議セサル可カラサルニ至リタリ

非等和更送以爲メニ自家ノ意見ヲ變セサルヘシトシテ決心
 ハ尙斷斷乎ナシテ動カスヘカラサル者アリキ一千七百七
 十九年十二月三日王カ反對黨ノ領袖ト協議ヲ開クノ權ヲ
 サルヨシ公ニ與ル且公言シテ日ク愛國誠忠才能ニ富ムル
 人士ニシテ現時ノ内閣ト合体シ更ニ一大内閣ヲ組織セシ
 ム欲スル者アレハ是ニ信ヲ置キ之ヲシテ政治ヲ彌ケシム
 ヘシ但シ我王國ヲ無缺ニ維持シ我現時ノ公正允當ナル亞
 米利加戰爭ハ其支派ノ戰爭ト共ニ飽クマテモ最大ノ勇氣
 ヲ張テ之極行シ我過去ノ政界ハ皆適當ニ之ヲ遵奉スル可
 ナ豫メ約セシメサル可カラスト然ルニ王ハ容易ニ獨立ナ
 ル政治家ヲ自家ノ意ニ服セシムル能ハスシテ其豫期セシ
 所ニ違ヒタルヲ發見シ即十二月十八日書ヲサルロウ公

一千七百七十
九年及同八十
年議院ニ於テ
王權增長ノ非
論ヲ激論スル
間

此與ヘテ曰ク反對黨カ朕ヲ輕蔑スルヲ如此ク甚シキヲ見
レバ若シ彼輩ヲ舉用スルニ於テハ如何ナル冷待ヲ受クヘ
キカハ豫メ想フヘキノミ彼輩ヲシテ朕ヲ輔弼セシメント
モ朕ノ身體朕ノ主義朕ノ權勢ヲ舉ケテ彼輩ノ手ニ托セ
ル可カラズト即チ他語以テ之ヲ言ヘハ王ハ政治ノ責任
ニ當リ自ラ獨立シ意見ヲ行ハシテ欲スル者ハ之ヲ内閣
ニ舉クルヲ恐レシキリ
主ノ權勢愈々擴張シ王ハ躬カラ其特權ヲ實行セシテ以テ
今ヤ此事大ニ人民及ヒ國會ノ注視スル所トナレリ一千七
百七十九年十一月廿五日議院開會ノ時王ノ勅語ニ對スル
ヲ討論ニ於テフックス氏起テ曰ク余ハ政府カ立テ、以テ
其政治ノ方針トナシ爾後政治ノ各部局ニ於テ常ニ遂行ス

ル所ノ者ハ當治世ノ初年ニ於テ早ク既ニ之ヲ看破セリ王
ハ即チ自家ノ宰相タルヲハ唯一道路ノ流傳ニ止マラサル
ナリ危險ナル此實説ハ明徴ノ蔽ヲ可カラザル者アリ而シ
テ亞米利加及ヒ西印度ニ對スル戰爭ノ事情ヲ見ルニ一ト
シテ此説ノ事實タルヲ証セサル者ナシト内閣諸宰相ハ此
事ヲ否拒シタリト雖モ後年ニ至リ當時ノ人民ノ知り得ヘ
カラサル實証ノ露顯セル者アリテフックス氏ノ説ノ果シ
テ違ハサルヲ示セリ
翌年ニ至リ初春ヨリ各地ニ種々ノ集會ヲ開キ結社ヲ爲シ
或ハ財政改革ノ請願ヲ爲シ或ハ王權ヲ過大ニシテ之ヲ維
持センカ爲メニ恩曲ト賄賂トノ如キ卑劣ナル手段ニ出テ
タルヲ裏訴スルモノ多カリキホルン氏カ夫ノ有名ナル財

政改革策ヲ按出シタルハ則チ此等ノ弊害ヲ救ハシガ爲メ
ナリ彼レ明言シテ曰ク余カ此策ノ主トスル所ハ夫ノ腐敗
セル權勢ヲ制セントスルニ在リ此權勢ハ濫費ト紛乱ト
泉源ニシテ吾人ヲシテ數百萬磅ノ負債ニ沈マシメタル者ハ
則チ此權勢ナリ吾人ノ武器ヨリ勇氣ヲ奪ヒタル者ハ則チ
此權勢ナリ吾人ノ評議會ヨリ賢才ヲ除キタル者ハ則チ
權勢ナリ吾人ノ政體ノ最モ尊重スベキ部分ヲシテ權カト
信用トシテ虛影ヲモ有セザラシムルニ至リタルハ亦此權勢
ノ然ラシムル所ナリト

千七百八十年
ダンニンング氏
ノ勳議

四月六日ダンニンング氏ハ閣院委員會(按閣院委員會トハ特選委員會ト區別シテ議員ヲシテ委員タラシムル者ニシテ通常ノ議會ト異ナル所ハ議長其席ヲ下リ委員長之ニ代リ發議ノ式等總テ簡便ルノ法アリ)ニ於テ右等ノ請願ニ關セルノ議ヲ起シ其第

一ハ王ノ權力ハ既ニ大ニ増加シ今尙ホ増加スルノ勢ナリ
故ニ之ヲ制セザル可カラスト云フニアリテ此議ハ政治歷
史上ニ著明ナル一事ナリトストアドヴケイトダンダスハ其
語氣ヲ弱ハメンガ爲メニ此一條ニ加ラルニト云ハサルヲ
得スノ數語ヲ以テセンコトヲ主張セリ然ルコトヲ以テダン
政府反對黨ニ代リ直チニ此修整說ニ一致セリ(按語氣ノ強事實ノ決議ヲ得ンカ爲メニ反對黨ナルフツクハ氏而シテニシテダンニンング氏ノ議ヲ贊成シタルナルヘシ)
右第一ハ十八名ノ多數ヲ以テ可決セラレタリ第二ハ王室
定額金及ヒ其他各種ノ歲費ノ濫用ヲ匡正スベキ下院ノ權
利ヲ確定スル者ニテ起立ノ決メ取ルヲ待テ可決ス
ラントリ第三ハ下院ニ出タリタル諸請願書中其哀訴スル
所ノ弊害ニ對シ成ルヘク速カニ有効ナル救治法ヲ立ツル

歳費ニ關スル
シエホルン公
ノ動議

○下院ノ議務ナリ云フニ在テ是レ亦異議ナク可決セラ
レタリ如此ク政府反對黨ハ多慾ナルヲ以テ其成功ノ速
ナラシムラ欲シ毫モ猶豫スルヲ許ルガス委員會ニ於テ議決
セシ條件ハ直ニ之ヲ下院ニ報告シ以テ其可決ヲ得タリ
此討論中議長シレツヤノルトン氏カ王ノ權力ノ既ニ大
ニ増加シタルノミナラス今尙ホ漸次ニ増加セルヲ証シ
以テ政府ヲ攻撃スルノ演説ヲ爲シタルハ最モ著明ナリト
スル所ナリ四月十一日王ハ此等ノ嫉惡スヘキ決議ニ關シ
書ヲノルス公ニ與ヘテ曰ク朕ハ此等ノ決議ハ果シテ何人
ヲ攻撃スル者タルカヲ感ゼサリシヲ望ムナリト
此開期中ニ於テ上院ニテモ亦同事件ヲ議セリ翌年二月八
日シエホルン公ノ提出セシ所ノ歳費ノ實況ヲ調査スヘ

シトノ動議ヲ討論スル際王ノ權力ノ擴張セシコトニツキ更
ニ數ヶ條ノ實証ヲ得タリ就中其著明ナルハロッキンガム公
ノ証言モシ所ニシテ公ノ言ニ曰ク王ノ即位以來法律ノ外
觀ヲ裝ヒ國王ノ實權ヲ以テ我國ヲ支配セントスルハ一定
不變ノ政略ナリ故ニ内外ヲ問ハス内閣タルト議院タルト
其他ノ場所タルトヲ問ハス萬事万物悉ク此政略ノ印章ヲ
呈セサルナシ又行政全體ノ制度ヨリ其學藝ニ關スルト議
事ニ關スルト事務ニ關スルトノ區別ナク諸種行政ノ各部
局ニ至ルマテ一トシテ此政略ノ印章ヲ呈セザルナシ著
書小冊子新聞紙等ニ於テ政府ヲ辯護スル者ハ公然此政略
ヲ唱ヘカヲ極メテ之ヲ辯護セリ陛下カ其内閣ニ列セシメ
ント欲スル者ハ其何人タルニ拘ラス獨リ王ノ權勢ハニシテ

以テ之ヲ支持スルニ足レハト云フニ當代ニ在テ朝廷ノ格言トスル所ナリ而シテ之ヲ事實ニ徴スルニ此事ヲ果シテ然ルヲ示セリ如何トナレズ斯ク組織シタル政府ニ於テ其適當ナリト思考スル所ニ其何人タルト其如何ナル處置タルトナ問ハズ王ノ威力ニヨリ必ク是レニ多數ヲ得タレバナリト下ニテ之ヲ爲シタル事ニ其意ニ對シテ其意ニ對シテ然ルニ王ニシテホル公ノ動議ヲ爲メニ激怒シ擅制ニシテ惡ムニキ方法ヲ以テ王ノ特權ヲ濫用シ以テ貴族ノ可否決ヲ動カシ併セテ反對黨ヲ威服セント試ミタリカルマドセシ公及メシテローシ公ハ朝廷ニ官職ヲ有セシガ獨立以可否決ヲ爲サシカ爲メニ之ヲ辭セリ而シテカカルマドセシ公ハ未ダ其發言ヲ爲サ、ルニ既ニヨリ公州内イーストラ

王權貴族ヲ強
歴ス

不ギンクノロドリニテナシトシテ職ヲ免スルトシ通知ヲ得タリ又ペンブローク公ハ其可否決ノ議院ノ記録ニ記セラルニヤ否ヤ直チニウルトシヤノロドリニテナシトシ「職ヲ免セラレリ此職ニ數百年ノ間世々公ノ家門ニ傳承セシ所ナリシニ茲ニ至テ之ヲ免セラレタリ王カ其特權ヲ濫用スルヲ如此シ豈國會ノ注視ヲ免カレ得ヤ」三月六日シエルホルン公ハ議ヲ起シテ曰ク王カ議院内ヲ行爲メ爲メニ此等ノ貴族ノ職ヲ奪ヒタルハ果シテ助言ヲ受ケテ然ル乎若シ然リトモ何人カ助言ヲ受ケテ爾手ヲ主院ニ告知セシトテ王ニ要求スルニ「此動議ヲ多數イ否決スル所トナリシト雖モ王カ憲法ニ背違セルノ處置ハ討論中大ニ之ヲ痛撃セリ又王ノ權カノ過大ナルヲ非議ヲ殊ト

業
一
十
百
十

一千七百八十一年王權過強ノ非難

陸軍及ヒ民兵ニ關スルノ施政ニ對シテ最モ之ヲ極論シ
一千七百八十一年十一月二十七日議院ニ開會シ上下兩院
共ニ王ノ演說ニ對スルノ答詞ヲ討議セシ此際王ノ權力
ノ過大ニシテ施政ニ一定ノ法規ナク且責任ノ歸スル所ナ
キヲ激論セシモノアリキリチモンド公曰ク各宰相公皆各
自ノ專務ノミヲ守ルコト恰モ一書記吏ノ如シ而シテ我國ハ
此等書記吏ノ爲メニ支配セラレタリ是ヲ以テ責任ナク
協同ノ意見ナク一致ノ舉動ナク唯不和ト軟弱ト腐敗トモ
見ルノミト又公言シテ曰ク内廷ノ秘密内閣ハ國家ヲ亡ボ
ス者ナリトロッキンガム公ハ今王即位以來ニ施シ來タレル
政治ノ組織ヲ形容シテ幻影ノ制度ナリ（按宰相政ヲ執ルノ
外觀スリト雖實權

一千七百八十二年ノルズ公ノ内閣終ニ破ル

ハ此外觀ト異ナル寵臣ト國王ト之ヲ把持寵臣ト隱勢ト制
スルヲ以テ此外觀ヲ幻影ト評スルナリ
度下院ト云ヘリラッソンス氏ハ亞米利加戰爭ノ敗軍及ヒ是
ヨ發生スル各種ノ惡結果ヲニ國王威權ノ罪ニ歸セリ
王ニ在リテスガル敗軍ト不幸トヲ受ルモ尙ホ飽シマテモ
亞米利加戰爭ヲ遂行セシトスルヲ決心ヲ變セサリキ然レ
前今ヤ下院ニ於テハ全ク平和主義ニ決セシヲ以テ王ト國
會ト間ニ劇烈ナル軋轢ヲ生シ是カ爲メニ宰相ノ命運定マ
リ終ニ國會ノ勢力ヲ以テ王ヲ頑固ナル意志ヲ屈セシムル
至リテ一千八百七十三年三月二十二日セネラルコンウ
外亞米利加戰爭ヲ終局セシコトヲ要求スルノ議ヲ起シタリ
ト雖モ僅カニ一名ノ多數ヲ以テ此動議ハ廢棄セラレタリ
然ルモ氏等二十七日ニ至リ同一ノ議ヲ起セシコトヲルズ公

然一時ヲ猶豫ヲ請ヒテ雖モ延期ノ議ハ十九名ノ多數
 ヲ以テ廢棄セラレタリテ以テコングレグ氏ノ議案ハ起立ヲ
 待テズルニ通過セリ
 王ニ答辯ヲ受クル旨及ヒセシメラルコングレグ氏更ニ議ヲ發
 シテ曰ク下院ニ於テ公夫ノ叛逆セル殖民地ヲ鎮定スルニ
 腕力ヲ以テセンカ爲メニ惡ムヘキ戰爭ヲ遂行セシムテ助
 言ヤ若クハ之ヲ遂行セシムル者ハ凡テ王及ヒ國家所
 對スル罪人ナリト見做スコニ決議ス可シト然ルニソル
 ス公ハ此議ニ對シ余カ終始執ル所ノ主義今下院ニ敗レタ
 リ是ニ至リテ余ハ直チニ職ヲ辭スベシト云ハスニテ却
 テ下院ノ議ヲ實行セシムルニ勉ムヘシト答ヘ以テ下院ヲ
 テ氏ノ發言ニ驚カシメタリフックス氏ハ直チニ起テ自家

内閣ヲ
 二年八月
 二十日

ノ意見ニ逆ラセ反對ノ政畧ヲ行ハシカ爲メニ宰相ノ職ヲ
 勸續スルハ理ニ於テ不可ナルコトヲ極論セリ而シテコング
 レグ氏多動議ハ通過セリ然レヒノルス公ハ其平和說ヲ固守
 シ且公言シテ曰ク陛下ニ於テ余ノ職ヲ免スルカ下院ニ於
 テ明白ニ余ノ辭職セサル可カラサルノ理由ヲ余ニ示スニ
 莫ラサレハ余ハ決シテ職ヲ去ラサル可シト因テ下院ニ於
 テハ直チニ此ノ第二ノ方法ニ因リ公ヲ辭職セシメントセ
 リ三月八日ヨシカウエンヨス公ハ戰爭ノ不幸ヲ以テ宰相
 ノ不能ニ歸シ以テ宰相ヲ非難スルノ議ヲ起シタレヒ十名
 ノ多數ヲ以テ廢棄セラレタリ同月十五日ゼーロウズ氏ハ
 下院ノ現時ノ宰相ヲ信スル能ハサルノ故ヲ以テ宰相ヲ退
 クルノ議ヲ起シタリト雖モ此動議モ九名ノ多數ヲ以テ廢

三月八日
 十五日

ノルス公ノ敗
レタル事ニ就
キ王ト公トノ
係關

棄セテシテ同月二十日更ニ宰相ヲ攻撃セシトスル際
ヲ謂テ公ニ卒然其職ヲ辭セリ
王ニ此等論ヲ以テ自家ノ一身ニ關スルモノトナシ深以心
ヲ痛クシテ曰クウラ氏ガ其勳議ヲ提出シタル後三月十
七日ヨリ於テ王ハ書ヲノルス公ニ與テ曰ク朕ハ如何ナル
場合ニ追ルモ朕ノ一身ヲ反對黨ノ手中ニ投セザル可シト
決心セリ而シテ勢ヲ傾ク所ナシテ現今ノ有様ハ如クナラシ
メ朕ハ朕ノ良心ト名譽ガ朕ノ出クヘキ唯一ノ策ナリト
指揮スル所ヲ覺悟セサル可カラズト加テ王ハ一般ノ快艇
ヲ準備セシメテ去命シ最早ヤハシトフルニ退隱スルノ外一
策ナキカ如ク云ヘリ而シテ王ハ宰相ト云ハノヨリハ寧
ロ親友トシテ交リテ所ヲ信任セル宰相ヲ其職ニ保持スル

ノルス公宰相
タルノ間ニ於
テ王ノ權勢

ヲ能ハサルニ至レリ蓋シノル公ハ王ノ強請ニ由リ自家
ノ希望ニ以テ敢テ宰相ノ職ヲ保テ銳意シテ自家ノ非トス
ル所ノ政畧ヲ施行セリ而テ其政畧ヲ擲棄シタルノ後ト雖
モ公ハ王ガ自家ノ一身ノ敵ナリト思惟セル人々ノ侵入ヲ
制シ以テ王ヲ護ラシカ爲メニ依然トシテ其職ヲ保テリ然
ルニ今ヤ公ハ其職ヲ去ラサル可カラサルニ至リシヲ以テ
王ハ公ガ一身止ニ於テ王ニ忠愛ナリシヲ感シ金匣ヲ開テ
寛大ナル惠與ヲナシ以テ公ノ熱心ヲ誠實トシ報ヒタリ
王ガ此ノ公ト相通信スル所ヲ見ハ余輩ヲシテ王ト宰相
及ヒ政府トノ間ニ如何ナル關係ヲ存セシカヲ知ラシムル
ニ足ル者ナリ王ハ内治止及ヒ外交上ノ緊要ナル事件ニ關
スルニ悉ク自カヲ宰相ヲ指揮セシメテ議院内ニ討

論ニ關スル以處置シ臣等相與指揮シ如何ナル勳議以起
 如何ナル勳議ニ反對シ如何ナル議案ヲ可決スル決カト云
 シニ至ルマテ凡テ自カラ之ヲ指揮セリ王ハ恩典ヲ崩ス
 權ハ獨リ躬カシ之ヲ握リ行政全部ノ組織ヲ整ヘ諸宰相司
 法官内廷官吏ノ相互以格式及ヒ權限ヲ裁シ英蘭及ヒ蘇格
 蘭ノ判事ヲ任命陟黜シ僧正ヲ任命轉移シ權僧正ヲ任命シ
 其他宗教上ニ關スル職位ノ任命ヲ司トレリ又王ハ軍政ヲ
 統理ス軍隊及ヒ武官ヲ支配シ自カラ兵士ヲ指揮セリ又爵
 位榮職年金ヲ授否ノ如キモノ王以意ヲ決セリ而シテ王
 人命セテ所ハ確シテ動かカス可カラサル者ニソルテ大王
 按佛王ハイ十ニ下雖也其王權ノ使用是ニ超ユル能ハサル
 四世云云ナリ蓋シ王ハ權力ノ知覺ヲ樂ニ自家ノ全身每寸渾テ王法

王ノ政略ノ結果

力感シタリキ米國ニ國會議員ニシテ
 如此テ政略ノ行テル意ヲ三十年ニ及ビシガ必シカ爲メ果
 ツ如何ナル結果ヲ生セシ乎蓋シ國王ニ身ハ權力過大ナル
 事ハ民間ニ於テ最モ激烈ナル騷亂ト不平ヲ喚起シ政府
 政略ニ於テ最モ著大ナル失敗ヲ招キ國家ニ對シテ最モ
 慘然ト死不幸ヲ來スニ勢ノ常ナリ然リ而シテ王ノ長久ト
 ル一治世間ニ常ニ英國ノ凶日ト稱スル者ニシテ此世
 シキテヒ事ト公ケルソシテ公トシテ公トシテ公トシテ公ト
 相シタル時ニ在リテ諸氏ノ名共ニ次ニ胸臆ニ鏗刻シテ
 忘ル可カラサシナリ且ヤ王ノ命令ハ宰相之間行ハル由
 ヲ得テリ雖國家ノ政治上ニ行ハルハテ得サル者ニシテ
 王ハ議院ノ爲メニ擱阻セラシ輕侮セラシ又暴民魁首ニ爲

メニ誹謗セラレタリ王ハ自家ノ特權ニ於ルト同様ニ國會
 ノ特權ヲ強張セズトセシメテアリタレヒウルクス及印刷者
 ノ抗爭ヲ受ケ遂ニ爲メニ壓倒セラレタリ王ハ出版ノ自由
 ヲ抑制セントシタレヒ爲メニ人民ノ狂怒ヲ挑撥シ一激シ
 テ放縱ヲ來タスニ至リ而テ又王ハ其領國ノ最モ良美ナ
 ル地方ヲ割讓セサル可ラサルニ至レリ〔按米國ノ殖民地ヲ
 失ヒシト云フ〕
 シルズ公ノ職ヲ去ルヤ王ハ恥辱ヲ忍ビ再ヒロッキンガム
 内閣ヲ容レタリ王ハ已レニ與ニスル者ノ爲メニ官位ヲ與
 フルヲ得タリト雖ヒ新内閣ヲ組織セル諸宰相中ニハ王ハ
 一身上ニ於テ快シトセサル所ノモノアルノ事ヲ云フ内閣
 以テ政略ハ決シテ王ノ意ニ適セサルナリ蓋シ内閣ノ第一
 主義トスル所ハ米國ノ獨立ヲ許容スルニアリテ王ノ久シ

一千七百八十
 二年ロギンガ
 ム公ノ内閣

果
 王ノ親政ニ時

ク抗論シタル以テ政零ナリ又内閣ノ第三ノ主義トスル所ハ
 冗官ヲ汰シ政府ノ請負人ヲ議院ヨリ逐除シ取稅官ノ議員
 撰舉權ヲ奪ヒ以テ王權ヲ制スルニヌリ新内閣組織後ア
 クス氏ハ直チニ書ヲフテバトリッシ氏ニ贈リテ曰ク余輩
 シテ若シ適當ニ王權ヲ制シ得ルヤ内閣ニ止マルヲ得セ
 ンヤ然ル後ハ何時内閣ヲ去ルモ敢テ意ホスルコ足ラサ
 ルヘシト信スルナリト抑新内閣ハ親和ス可ラサル諸元素
 ヲ組織セル者ニシテ一方ニ在テハ前内閣ヲ支持セシ王
 黨ノ人々ト一方ニ在テハ政府反對黨ノ領袖トシテ二種ノ元
 素ヨリ成レリフックス氏曰ク此内閣ハ一ハ王ニ屬シ一ハ
 人民ニ屬スル所ノ二種ノ部分ヨリ組成セリト如此キノ内
 閣ガレハ固ヨリ是ニ向テ協同ニ致シ舉動ヲ期シ得ガラス

内閣が王の信用を恢復し且王が自家の權勢をヨリ國家
 を支配セント決心シ強固ナル反對黨を結合シ對シ其内
 閣ヲ維持セント勉メタリホレトスワルボトク氏ノ言ニ據
 レハシシボルン公ハ自家ノ一身ヲ王ニ托シ王ノ權勢ニ依
 テ自家ヲ支シシタリト云ヘリ而シテ當時政黨ノ有様
 ナ見レハ實ニ公ハ王ノ外地ニ頼ルベキモノアラサルナリ
 公ハ王ノ權勢ヲ逞フスルコトヲ公言シ民權黨ノ諸大家ヲ非
 難シ恰モ王黨タルノ精神ヲ以テ巧ニ王權ヲ保護セリ公
 曰ク余ハ英國ノ王ヲシテマールラツタ按印度中央諸州ヲ王
 タラシムルヲ欲セサルナリ何トナレハマールラツタ人ノ習慣
 ニ據レハ數名ノ大貴族ノ協議ヲ以テベイシワ按マラタ
 ナ選立スル者コノ斯ク大貴族ノ選立セシメ所ノベイシワ宰相ノ稱

王ニ反對スル
 政黨ノ結合聯
 立政黨

手ニ大權ヲ掌握シ王ハ玉座ノ一偶像タルニ過キサレバナ
 リト
 王ハ政黨ヲ破壊シ以テ王權ヲ獨立ヲ保護シ自家ノ權勢ヲ
 張ラシトセリ然レモ王ハ其豫期セサリシ所ノ結果ヲ生シ
 タルニ驚ケリ歐ヲ離間シテ自家ノ權勢ヲ張ルハ王ノ
 政畧ニシテ此政畧ハ幾分か其實効ヲ奏セサルニアラス蓋
 シ政黨ヲ分裂セシムルモ其政府ヲ攻撃スルノ勢ヲ折リ
 ヲ以テナリ然ルニ今ヤ政黨ハ俄然因結シテ王ハ政略ヲ壓
 倒セリ米國トノ平和ノ假條約ヲ議院ニ下附セシキル
 公ノ黨トフツクス氏ノ黨ハ嘗テ相抵抗シ最モ激烈ナル軋
 轢ニヨリ互ヒニ怨恨ヲ積ミシニモ拘ラス聯立協同シテ一
 体トナリ以テ下院ニ於テ政府黨ヲ制シタリ如此ク多勢ノ

反對黨ノ爲メ三覆歴セラレ宰相ハ終ニ其職を辭シタリ
 王ハ獨リ立テ強固ナル反對黨ニ當レリ而シテ是以前ヨリ獲
 得シ所ノ爭論ハ我近代ノ憲法史中最ニ危險ナル爭論ノ一
 因リトホテ一方ニ於テハ王權ヲ擴張シ一方ニ於テハ議院ノ
 權力ヲ擴張シテ當時如ク甚ニ激烈ナル革命以後未ダ曾
 テ見ザル所ナリ然レモ其爭論ノ結果ニ至テハ王ノ權力ノ
 最ニ強大ニシテ侵ス所ガラザルヲ証スヘキハミレドモ蓋
 夫ノ聯立協同ニシテ政黨ノ領袖ハ前宰相ヲ辭職セシテ以テ
 續テ内閣ニ入ラントス期シタリ然ルニ王ニ在テハ其之要
 求ヲ拒メントス決心ビシタリ氏ヲ新内閣ヲ組織セシメ
 シトシタリ氏ニシテ相タラシニハ聯立協同ノ政黨ニ對峙
 スルコト蓋シ難キニテラズ然レモ氏ハ鋭敏ノ政治家

立憲黨
 立憲黨ノ諸君
 王ニ對峙スル

ナリ尙ホ其十有四ニ超ハス能ク政黨ノ有様興論
 之大勢ヲ明察シ未ダ身ヲ以テ戰爭ノ正面ニ當ルコト時
 味サル者知ル所ナリ故ニ王ヲ弭メヘキ好機ヲ到ルヲ俟テ又カ
 爲固辭シテ王ノ強請ヲ朋友ヲ助言トテ諷セサリキ是ヲ
 以テ王閣聯立政黨ヲ分裂セシメシテ汝爲メニ之ヲシル公
 ニ謀ルニ事成ラズ之ヲホルトシテ公ニ謀ルニ又成ラズ
 到底新々ト固結セテ聯立政黨ノ勢力ハ之ヲ分裂シテムル
 前能ハクシテ今王ハ反對黨ヲ手中ニ投電シテ其力ヲ
 置ニ陷レリ然レモ王ヲ容易ニ是ニ服セシムルナリ王ハ其
 難ヲ公ニ書テ與テ反對黨ヲ壓制ヨリ王ヲ救出シテ依
 賴也王又公ニ語テ曰朕ハ反對黨ニ服セシムルコト欲ス
 然レモ公ニ語テ曰朕ハ反對黨ニ服セシムルコト欲ス

致セシメタリ」然レモ王公ナル公之粗魯ナル助言ニ從
 此決心ヲ變セシ者ト見タリ。然レモ王公王ニ説テ曰ク
 陛下ハ彼處ニ行テ得ハシ彼處ニ行カ如ク容易ナルヨリ
 之ヲ決ルナリ然レモ陛下若シ彼ノ地ニ倦ミテ再至我國ハ
 歸ラントスルモ我國ニ歸ルニ彼處ニ行カ如ク容易ナラ
 ズ。然レモ而シテ王公終ニ聯立政黨ノ内閣ヲ組織スル
 事ヲノルズ公ノ策ヲ容ルハニ至リマシ迄ニ既ニ十七日ヲ經
 過シ其間實ニ政府ヲ守リシナリ然レモ茲ニ至リテ再々
 困難ヲ生シ而シテ終ニ下院ノ干涉スル所ナレリ下院ニ
 於テハ數回ノ討論ヲ開キ其討論ノ一節於テフオウス氏ハ
 王ノ秘密ナル黨派カ中間ニ立テ協議ヲ遮斷スルヲ非難
 セリ然レモ後ニ下院ハ人民ノ信用スル所ニシテ内閣ヲ組織

一千七百八十
 三年聯立内閣

聯立内閣ニ於
 テ王權ヲ制セ
 ントスルヲ

セシメテ王ニ奏請セリ此奏請ニ對シテ應諾ノ答辭アリシ
 雖モ然レモ尙モ内閣ハ組織セラレザリ而シテ王公再
 度セツト氏ニ迫ルニ内閣ノ首相タルヲ以テシタリト雖
 モ氏ハ固ク之ヲ拒ミタリ終ニ二月廿四日ヨリ四月二日ニ至
 ルマテ三月七ケ日ヲ長時日ヲ經過シ始メテ首相タルヲ
 公ヲ首相トシテ聯立政黨ノ内閣ヲ組織スルニ至リシ
 ヲ。然レモ公ニ數年間王公爲メニ從順諸媚ナル宰相タルヲ
 モ拘ラズ今ヤ王公最モ恐懼スル所ノ敵ニシテ又先キ自
 家ノ敵タリシ故ニシテ氏其人ト相携ヘテ共ニ内閣ニ入ラ
 シ。下モリ鳴呼政治止シ生涯ノ變遷極マリナキヲ如此キカ
 而シテ王公尙モ新宰相ヲ侵入ヲ防カントスルニ際シ二氏
 既ニ將來王公ノ權力ヲ制限スルヲ議案ヲ協議セリ蓋シ容

易ニ王命未服セシメノ事公ノ如キ甚シク議未ク是レ亦
 ラサリテオ世然ルコト命ヤ公ハフツシク氏ト共ニ王權ヲ制
 限スルノ議案也協議スル云マ余輩之ヲ見テ笑滌流也
 得スツク氏曰ク王夫シテ自カテ自家ニ宰相閣ヲ立
 可カラストノ事公是ニ答ヘテ曰ク汝ノ意ヲ汝各別
 立ノ政治ヲ非オ世ト云フニアラズ余等全ク是レニ同
 意ス余等各部別立ノ政治ヲ以テ有害ノ制度ナリト信
 ス蓋シ政治ハ一人若クハ一内閣ノ万機ヲ統理シ各事件ヲ
 指揮スルモノナランハアテ可カラズ各部別立政治ハ余等
 創起セマ所ニテラスシテ余等内閣ニ入ルヤ既ニ斯カル制
 度ヲ行ハルハヲ發見シ而シテ余等之ヲ廢止セシムルニ勇氣
 ト決斷トニ乏シカランニテ英國王ニ接スルニハ尊崇ト忠愛

一 王命未服
 一 立内閣ニ
 一 各部別立
 一 王命未服

王ト内閣トノ
 抗爭

トヲ以テシ勉メテ之ヲ禮待セサル可カラズト雖ヒ抑我國
 以君王カ當ヤニ有リ得ヘキ者ハ單ニ權力ヲ外觀ニ止ル可
 キンニ我政府ノ組織ニ何レノ時ヲ問ハス部局制度ヲ考サ
 ル所ナシト雖ヒ政治ノ全體ニ至テハ僅ニ二三ノ場合ヲ除
 シ外ハ必ス宰相ニ於テ之ヲ總括セサルコトナシト三事ハ
 然レモ王ノ將來ノ權限ニ關シ諸宰相ニ於テ如何ナリ意見
 ヲ有スルモ王ニ在テハ會テ宰相ニ服スルコト意テラカキ
 王ハ強迫セラレテ止ムヲ得ス舉用スル所ニ宰相ヲ嫌忌ス
 所ノ心ヲ蔽ハシトスルヲ爲サ却テ王ハ強迫ヲ受タレ
 所公言シ且ツ王ヲ保護スル期スルカヲサレ旨ヲ内閣ト通シ
 又宰相ニ於テ英國ノ貴族タルノ爵位ヲ何人ニ賦與セシ
 所求ルモ決シテ是レニ應セサルヘ旨ヲ内閣ト通シ

王素ヲムブル公ニ告ケテ曰ク朕ハ如此キ内閣ニ向テハ毫
 毛當用ヲ置ク能ハズ唯々竝立シテ之ヲ排黜スルノ機ヲ
 俟ツルニ又此聯立政黨ノ内閣ハ十分ニ公衆ノ人望ヲ
 得ル能ハズ而シテ王黨ニ與ニスル者ハ内閣ヲ益々不
 望ナラズメント勉メ其勞苦ヲ惜マサリキ然ルニ王ハ常ニ
 内閣ノ處置ヲ熟察シ苟モ之ヲ妨ケ得ヘキ時ハ勉メテ之ヲ
 妨ケ又内閣ノ政略ヲ非評シ公然内閣ニ反對スルノ姿ヲ現
 ハセリツツス氏ハ職ヲ内閣ニ占テ一千七百八十三年八
 月佛國ト平和ノ條約ヲ締盟セントスル際王ハ氏ニ書ヲ與
 ヘテ曰ク朕ハ佛國カ我望ム所ニ應ジ速ニ本條約ニ最後ニ
 批准ヲ爲サハルヲ見テ敢テ驚ク能ハサルナリ何トナレハ
 我國於テ遂ニ一千七百八十二年二月ノ末ヨリ今日ニ至ル

並年

王ノ内閣

一千七百八十
 三年ヲオツク
 ス氏ノ印度條
 例ノ議案

迄絶ヘズ平和ヲ切望スルノ意ヲ表シ加フルニ軍備ノ設ケ
 ナキヲ以テ佛國ヲシテ斯カル脆弱ナル政略ノ爲メニ恐懼
 ヲ感セシムルヲ能ハサレハナリト
 王ヲシテ内閣ニ向テ更ニ活潑ナル抵抗ヲ試ミシムルノ機
 會起レリ蓋シフツクス氏ハ其印度條例ノ議案ヲ下院ニ提
 出シ最モ激烈ナル攻撃ヲ受ケタリト雖モ非常ノ多數ヲ得
 テ速ニ通過スル所トナレリ反對者ハ此議案ヲ以テ憲法ニ
 背違ムル者トナシ國王ノ特權ヲ侵蝕スルモノトナシ之ヲ
 痛撃シタリト雖モ其通過ヲ妨クル手段ヲ得ルヲ能ハサ
 リキ是ニ於テ王ハ自黨ノ諸臣ト相商議シ此議案ヲ廢棄シ
 テ内閣ヲ覆ヘサンヲ爲メニ一箇ノ策略ヲ計畫セリ即チ王
 ハ其特權ノ存スル所ニ從ヒ議案ヲ廢棄セシメ若クハ修正

王ノ名ヲ用ヒ
テ内閣ノ議案
ニ反對ス

ヲ命フルヲ爲サスシテ公然王ノ名ヲ以テ自家ノ宰相ノ議
案ヲ攻撃セシトシ策ニシテ此策ハ右議案ノ上院ニ達セシ
日ヨリ八日前ニ於テ既ニ一決セシト雖モ極メテ之ヲ秘密
ニシタリ蓋下院ニ於テ此議案ノ通過ヲ妨ケントスルハ到
底望ム可カラサルノミナラス爲メニ議員ノ怨恨ヲ招クソ
危険アリ故ニ上院ニ於テ之ヲ攻撃スルコトニ決セリ是レ上
院ニ於テハ攻撃ニ多量ノ効驗アリテ危険ヲ招クコト少ナゲ
レハナリテムプル公ハサルロウ公ト共ニ此策ヲ起シタル
ノ人ニシテ之ヲ實行スルノ任モ亦テムプル公ノ托セラル
、所ナリ公ハ王ニ謁見シタル後チ王ノ名ヲ以テ此議案ヲ
攻撃スルノ委任ヲ受ケタルヲ公言セリ而シテ此委任ノ事
ニ關シ疑惑ヲ避ケンカ爲メニ一葉ノ紙牌ニ左ノ數語ヲ記

セリ

陛下ハテムプル公ヲシテ何人タリトモ印度條例ノ議案
ヲ賛成スル者ハ陛下ノ友ニアラスシテ陛下ニ於テハ此
輩ノ人々ヲ陛下ノ敵ナリト見做スヘシト公言セシムル
ノ委任ヲ爲セリ若シ以上ノ言語ニシテ尙ホ十分ナル勢
力ヲ有スルニ足ラサルキハテムプル公ハ自カラ其目的
ヲ達スルニ適當ナリト思惟セル如何ナル言語ヲモ用ユ
ルヲ得ヘキ者ナリト

テムプル公ハ此委任証書ヲ携ヘ議員ヲ説カンカ爲メニ進
テ上院ニ入レリ此策ノ如何ナル實効ヲ奏セシヤハ速ニ之
ヲ見ルヲ得ヘシ而シテ公ハ第一議會ニ於テサルロウ公及
ヒリヤモンド公ノ賛成ヲ以テ議案攻撃ノ相圖ヲナセリ諸

議員ハ恐嚇ノ狀ヲ裝ヒ而シテ十二月十五日延期ノ議問ニ
 關シ内閣黨ハ少數ナリキ王黨ノ人々ハ王ノ意見ヲ表明セ
 シト欲シ敢テ蔽フ所ナク公然王ノ名ヲ以テ議案ヲ攻撃シ
 ポルトランド公リチモンド公フイツウ井リアム公ノ如キハ王
 ノ名ヲ用井ルコトハ如何アルヘキトノ注意ヲ與ヘタレトモ
 テムプル公ハ之ヲ用井シコト敢テ拒否セサリキ
 十二月十五日フイツパトリック氏ハチスソリー公ニ書ヲ
 贈リテ曰ク王黨ニ與ミセル者ノ代人ハ今ヤ續々來リテ此議
 案ヲ攻撃セリ世人ハ如此ク憲法ニ背違ノ議院ノ議事ニ干涉
 スルノ無道無謀ナルニ驚ケリ如此キソ處置ハ夫ノ一千六
 百四十一年チャールス一世カ施シタル處置ニ比スヘキ者ニ
 シテ如何ナル結果ヲ生スヘキカハ何人ト雖モ之ヲ豫知ス

ルコト能ハサルナリト

千八百八十三年十二月十七日王ノ名ヲ用井ルコトヲ非ナリトスル下院ノ議

下院ニ於テハ朝廷ノ策略ノ實効ヲ奏スルニ先チ早ク之ヲ
 妨ケント勉メタリ十二月十七日ベーカー氏ハ責任宰相ノ
 意見ニ反シテ秘密ニ朝廷ニ助言シ王ノ名ヲ以テ國會ノ議
 事ニ干涉スルノ非ナルヲ論難シ且議ヲ立テ、曰ク上院若
 クハ下院内ニ於テ行ハル、所ノ議案及ヒ其他ノ議事ハ其
 如何ナル者タルヲ問ハス是ニ對シテ直ニ陛下ノ意見ヲ報
 告シ又ハ陛下ノ意見ナリト公言スル所ノ說ヲ報告シ以テ
 議員ノ決ヲ制セントスルカ如キハ一箇ノ重罪ニシテ國王
 ノ名譽ヲ穢スヘキ過失ナリ又國會ノ根本ノ特權ヲ破壞シ
 憲法ヲ顛覆スルモノト公言セサルヲ得サルナリト
 ビント氏ハ下院カ世上ノ流傳ニ拘泥スルノ非ナルヲ論シ

且國王世襲ノ助言者ハ常ニ國王ニ助言スルノ權アルコトヲ
 説キタリト雖ヒ斯カル議論ハ其効力アルコトヲクフツクス
 氏カ是ニ答辯セルノ演説ハ憲法ニ根據スルノ議論ヲ以テ
 充滿ニ雄辯ヲ以テ痛激ノ非難ヲ加ヘタリ是ニ於テベールカ
 一氏ノ議ハ七十三名ノ多數ヲ以テ可決セラレ且下院ハ國
 民ノ實情ヲ查察セシカ爲メニ委員會ヲ開クコトニ決セリ然
 レモ是レノミニテハ未ダ以テ足レリトス可ラサルナリ蓋
 シ王ニ於テ内閣ヲ更迭セシメントニ決心シタルハ明ニソ
 下院ハ王カ不意ニ議院解散ヲ命シテ不屈ナル多數ノ議員
 ヲ一撃ノ下ニ全敗セシメントヲ恐レエルズキン氏ノ説ヲ
 採リ英領東印度ノ政治ノ弊害ヲ匡救センカ爲メニ適當ノ
 方法ヲ討究スルノ必要ナルヲ確定スル所ノ決議ヲナシ且

印土條例ノ議
 案否認セラレ
 内閣諸相罷免
 セラル

公言シテ曰ク下院ハ何人タリモ此至緊ノ義務ヲ尽スナク妨
 害シ若クハ之ヲ遮斷センコトヲ陛下ニ助言セル者ハ以テ英
 國ノ公敵ナリト見做ス可シト然リ而シテ下院ニ於テ王ノ
 秘密ナル助言者ノ無道ナル行爲ヲ非議スルハ固ヨリ其權
 利ノ存スル所ナリト雖ヒ此際内閣諸相ノ位置ニ至テハ甚
 タ奇異ナル者アリ蓋シ直キニ王ノ一身ニ對シテ非難ヲ容
 ルハ内閣諸相ノ得テ爲ス可カラサル所ナリ故ニ内閣諸
 相ハテムブル公ヲ彈劾スルカ然ラサレハ王名ノ濫用ヲ責
 メテ自カラ内閣ヲ退クノ外一策ナカルヘキナリ
 然ルニ王ニ在テハ自家ノ宰相ニ對シテ隱謀ヲ企テ又宰相
 ニ在テハ其君主ニ對シテ誹謗ヲ逞シ下院ハ宰相ニ黨シテ
 王ヲ非責シ王ハ上院議員ト相合シ自家ノ權勢ヲ頼ミ以テ

宰相及ヒ下院ヲ挑ミタリ豈異狀ノ演劇ナリト云ハサルヲ
 得シヤ然レ王ノ軍略終ニ勝ヲ占メタリ下院ニテ王ノ干涉
 ニ對シ以上ノ激烈ナル攻撃ヲ議決シタルト同日ニ於テ王
 ノ軍略ハ十分ニ其効ヲ奏シタリ夫ノ印度條例ノ議案ハ上
 院ノ否決スル所トナリ王ハ此機ニ乘シ翌日直チニ其内閣
 ヲ解散セリ而シテ王ハ此解散ニヨリ諸相ヲ辱メンカ爲メ
 ニソルス公及ヒフックス氏ニ告ケシメテ曰ク陛下ハ二人
 ト相見ルヲ快シトセサルカ故ニ各々其書記官ヲ印綬ヲ
 奉還セシムヘシトテムブル公ハ王ノ爲メニ此大功ヲ奏シ
 タルノ人ナルヲ以テ他ノ諸相ヲ免職セシムルノ委任ヲ受
 ケタリ即チ公ハ内閣ヲ覆ヘスニ於テ王ノ爲メニ與リテ最
 モ力アリシ人ニシテ再ヒ此最後ノ恥辱ヲ諸相ニ蒙ラシム

一千七百八十
 三年ピット氏
 ノ内閣

ルノ任ニ選ハレタル者ナリ
 然レモ戦争尙ホ未タ王ノ全勝利ヲ遂ダリト云フ可カラズ
 王ハ下院多數ノ議員カ内閣ヲ翼助セシニモ拘ラス其内
 閣ヲ破壊スルヲ得タリ然レモ今ヤ王ハ此多數議員ノ攻撃
 ニ對シテ自家ノ選拔セル内閣ヲ維持スルヲ勉メサル可
 カラス此時ニ當リピット氏ハ王ガ與ヘタル信任ト危険ノ
 地位トヲ占ムルヲ躊躇セサキ今ヤ氏ノ爲メニ時到レリト
 謂フヘシ而シテ氏ハ彼ノ才能ニ富ミ經歷ヲ積ミタル領袖
 ノ旗下ニ在テ先キニ憲法ニ背違セル無道ナル手段ノ爲メ
 ニ敗ラレ不平ト忿怒ヲ以テ狂騒スル所ノ下院多數ノ議員
 ト相抗爭セシメテ決心セリ氏ハ大藏長官及ヒ出納局長ノ
 職ヲ占メ又王ノ爲メニ誠忠ナル黨友タルサルロウ公ハ再

大法官ノ職ヲ占メタリテムブル公ハ王ノ爲メニ熱心務
 メタル人ニシテ危急ノ場合ニ際シテハ最モ用ユヘキノ
 人タルヲ以テピット氏ハ公ノ補翼ヲ得ンヲ求メタリ然
 レモ公ハ先回ノ舉動ノ爲メニ世ノ非責ヲ受クルヲ避ケン
 ト欲シ其職ヲ得シヨリ僅カニ數日ニシテ之ヲ辭セリ
 今ヤ此若年ナル首相カ目カラ當ラサル可カラサル所ノ爭
 論ハ最モ苦難ナルモノニシテ「バノーブル」家ノ英國ニ君臨
 セシ以來如何ナル宰相ト雖モ氏ノ如ク激烈ナル攻撃ヲ受
 ケシモノアラサリキ氏ニ抗スル所ノ下院議員ハ極メテ多
 數ニシテ是ニ向テ有効ナル爭抗ヲ試ミンコトハ殆ント望ミ
 ナキニ似タリ氏ノ反對黨ハ初メヨリ全勝ヲ必期シ氏カアッ
 プレシ一區ノ爲メニ補缺議員招集ノ命令狀ヲ發スルノ議

下院ノ反對

案ヲ提出セシト嘲笑ノ聲議場ノ四方ニ喧シガリキ如此ク
 下院ニ於テハ此若年ナル首相ノ自ラ信スルノ厚キヲ嘲リ
 シト同時ニ又氏ヲシテ其職ヲ失ハシメ以テ朝廷ヲ恐懼セ
 シメンカ爲メニ強猛ナル手段ニ出テタリ是ニ於テピット
 氏ノ助言者中多クハ當期ノ議院ニ於テ其目的ヲ達スルノ
 望ミヲ失ヒ直チニ議院ヲ解散センコトヲ主張セリ然レモピ
 ット氏ノ決斷ト前見ハ既ニ完熟シ氏ハ數月前ニ在テハ此
 決斷ト前見トニヨリ未タ機ノ到ラサルヲ察シ敢テ官ニ就
 クヲ拒ミ今又氏ハ此決斷ト前見トニヨリ氏カ人民ニ訴テ
 是非ノ判斷ヲ請フニ先チ第一ニ輿論ヲ一變シテ己レニ歸
 セシメサル可カラスト固信シテ動カス此時ニ當リ氏ハ下
 院ニ於テ一内閣宰相ノ賛助ヲ受クルコトナク全ク孤立ノ姿

下院ニ於テ議院解散ヲ避ケントスルコト

ナリシト雖モ氏ハ如何ナル不利ヲモ顧ミテ獨力以テ其反對者ノ攻撃ニ當ラント決心セリ而シテ氏ノ才能ト氏ノ勇氣及ヒ智識トヲ以テ終ニ勝ヲ制シタリ

反對黨ハ現ニ多數ヲ占メ自黨勢力ノ固キヲ信スルヲ以テ其第一ノ目的トスル所ハ當サニ墮落シ來ルヘシト信シタル夫ノ議院解散ノ一令ヲ避ケントスルニ在リ抑反對黨ニ在テハ租稅ヲ拒ムノ權アリ宰相ノ非ヲ鳴シテ以テ王ニ迫ルノ權アリ又王ニ在テハ其憲法上ノ助言者即チ内閣宰相ヲ任命スヘキ疑フ可カラサルノ特權アリ議院ノ解散ヲ命スルノ特權アリ然レモ王及ヒ下院カ共ニ最後ニ訴フヘキハ人民ニ在リ而シテ下院ハ王ヲシテ人民ニ訴フルナカラシメント勉メタリ前内閣解散ノ翌日反對黨ハ地稅議案

ノ第三讀會ヲ二日間延期セシコトヲ主張セリ其故ハラフコトヲスル氏ノ公言セシ所ニ據レバ反對黨ニ於テ議院解散ヨリ生スヘキ弊害ヲ豫防スルノ策ヲ決スル迄ハ此議案ヲ他ニ渡スヲ欲セサリケレハナリ十二月廿二日下院ニテハ國民ノ實情ヲ查察セシカ爲メニ委員會ヲ開キタリシニエルスギン氏ハ左ノ件々ヲ陛下ニ奏請セシコトヲ動議セリ曰ク政府ニ於テ議院ヲ解散セシメシコトヲ謀ルトノ驚クヘキ說ヲ世ニ流傳セリ曰ク現今ノ如ク事情ノ危急ニ迫リタル場合ニ於テ議院ヲ延期シ若クハ解散スルカ如キハ最モ不便ニシテ且危險ナリ曰ク陛下ハ其忠誠ナル下院ヲシテ當期内ノ事務ヲ舉行セシメヨ蓋シ此等ノ事務ヲ舉行スルハ公衆ノ幸福ニ取リテ極テ緊切ナルヲ以テナリ陛下冀クハ陛下

ノ忠誠ナル下院ノ助言ヲ聽取スヘシ彼ノ二三ノ人々ノ秘
 密ナル助言ヲ探ルヲ勿レ彼輩ハ陛下及ヒ人民ノ真正ノ利
 益ト相反スル所ノ自家ノ私利ヲ逞フセント欲スレハナリ
 トビット氏ハ固ヨリ議院ヲ解散セント欲スルノ意ナク若
 シ他ヨリ之ヲ助言スル者アルモ氏ハ必ス是レニ抗スヘシ
 ト明言シタルニ下院ニ於テハ此明言アルニ拘ラス以上ノ
 動議ヲ可決シ全會ノ名ヲ以テ之ヲ王ニ奏セリ王ハ是ニ答
 ヘテ王カ其特權ヲ行ヒ議院ヲ延期シ若シハ解散シ以テ議
 院ノ會合ヲ妨クルヲアラサルヘキヲ保證セリ然レモ此保
 證ハ「クリスマス」大祭日(即チ十二月廿五日)ノ休會後ノミニ
 係ルモノナレハ未ダ反對黨ノ恐懼ヲ除クニ足ラサリキ而
 ノ十二月廿四日下院ハ爾來大藏省ニテハ印度ヨリ振宛テ

千七百八十四
 年一月十二日

タル手形ハ下院ニ於テ其仕拂ニ應スヘキ十分ノ資金アル
 ナ認ムル迄ハ一切之カ引受ケテ爲ス可ラサル旨ヲ決議セ
 リ
 此等ノ手強キ處置ハビット氏ノ議場ニ出席セサリシ時ニ
 決議セシモノナリ而シテ「クリスマス」大祭日後ビット氏ノ
 議場ニ出ツルヤ反對黨ハ再ヒ勇氣ヲ鼓シテ攻撃ヲ逞フセ
 リ「フックス」氏ノ如キハビット氏ヲシテ王ノ達旨ヲ通セシ
 ムルヲ拒ムニ至レリ而シテ「フックス」氏ハ下院ノ已レニ黨
 スルヲ知ルカ故ニ直チニ國民ノ實情ヲ查察センカ爲メニ
 委員會ヲ開クノ議ヲ起セリ之レニ次ク所ノ討論中ニ於テ
 反對黨ハビット氏ヲ議院ヲ解散センメサルヲ明約セシ
 メントシテ然レモビット氏曰ク余ハ王ノ特權ヲ讓與シ

議院ニ於テ支
途ヲ定メサル
金額ノ支出ニ
反對スル發議

之ヲ下院ニ賣リテ自家ヲ利セサルヘシト此討論中最モ人
ノ耳目ヲ驚カセシムルハセネラル、ロツスカ余ハ某待從ヨリ達旨
ヲ受タリ乃チ十一月十二日ニ於テ新内閣ニ反對スルノ起立
ヲ爲スルハ王ノ敵ナリト見做スヘキ旨ヲ通セラレタリ
ト公言セシニアリ反對黨ハ宰相ヨリ保障ヲ得ルヲ能ハサ
リシヲ以テ直ニ進テ解散ヲ避クヘキ有効ナル方法ヲ討議
セント欲シ下院ハ翌朝二時半國民ノ實情ヲ查察センカ爲
メニ委員會ヲ開キフツクス氏ハ議院ノ延期若クハ解散ヲ
命シタル後ハ金額ノ多少ヲ問ハズ議院ノ議決ヲ經スシテ
之ヲ支出スルハ重大ナル罪過ナリト確定ス可シトノ議ヲ
起セシニ可否決ヲ取ルヲ待スシテ同意ヲ得タリ次ニ氏ハ
議ヲ起シテ曰ク當開期中ニ於テ決議セシ所ノ諸種ノ公費

ニ供用センカ爲メニ一千七百八十三年十二月十六日ヨリ
一千七百八十四年一月十四日ニ至ル迄ノ間ニ支出シ若ク
ハ支出スヘシト定メラレタル諸金額中國會ノ條例ニ於テ
其費途ヲ指定セシ者ヲ除キ其殘餘ノ金額ニ關スル計算ノ
報告ヲ求ムヘシト氏ハ更ニ是ニ加フルニ此計算ノ報告ヲ
得シヨリ三日後ニ至ル迄ハ公費ニ供用センカ爲メニ一切
ノ金ヲ支出セシム可カラスト云フヲ以テセリ然レド此議
ノ不便ナルヲ論スル者アリテ氏ハ自カラ之ヲ廢棄セリ氏
ハ又二月廿三日マデ管軍條例ノ議案ヲ延期セシムルヲ得
タリ蓋シ前年ノ管軍條例廢止ノ期限ニ達スル前ニ尙ホ之
ヲ議決スヘキノ餘日アレハナリ(按)管軍條例トハ國王軍政
ヲ整フルニ必要ナル條例
ニシテ年々國會ニ於テ議定スル所ナリ是ハ權利ノ議案ト
稱スル法律ヲテヨリ以來平和ノ時ニ於テ常備軍ヲ置クハ

サルリー公ノ
動議

國會ノ承諾ナカル可ラストノ議定マリシヲ以テ管軍條例
モ年々之ヲ議セサル可ラサルコトナリシナリ
此等ノ決議ニ次キサルリー公ハ議ヲ起シテ曰ク陛下ノ願
國ノ現今ノ如キ形勢ニ於テハ議院及ヒ人民ノ信用ヲ有ス
ル所ノ内閣ヲ組織スルコト殊ニ必要ナリト此議可決セラレ
シヲ以テ公ハ更ニ他ノ議ヲ起シテ曰ク陛下ノ内閣ノ
更迭前ニ憲法ニ背キ議院内ノ討論ニ關シテ陛下ノ神聖ナ
ル名ヲ濫用セリトノ危險ナル風説ニ般ニ行レタリキ而シ
テ新宰相ノ任命際新奇ニシテ異常ナル事情アリテ到底如
此キ宰相ハ下院ノ信用ヲ得ルコト能ハスト而シテ以上委員
會ノ諸議決ハ直ニ之ヲ下院ニ報告シテ之ヲ可決セリ此時
下院ハ午前七時半マテ退會セサリキ
是ヨリ二日後下院ハ再ヒ内閣ヲ攻撃シ委員會ニ於テ左ノ

千七百八十四

年一月十四日
内閣ヲ信任ス
ルヲ得スト云
フノ動議

議ヲ可決セリ曰ク現時ノ宰相チシテ最モ肝要ニシテ最モ
責任アル信任ノ地位ニ永續セシムルハ憲法ノ主義ニ背キ
陛下及ヒ人民ノ利益ニ有害ナリト而シテ反對党ハ夫ノ革
命前下院ハ常ニ國王ト意見ヲ異ニスルト雖モ國王ニ在テ
ハ毫モ下院ノ激論ニ注意セサリシ時ノ混亂ナル有様ヲ再
演スル者ナリトシテ痛クビツト氏ヲ非難セリ然レトモヒ
ツト氏ハ毫モ之ヲ意ニ介セス其印度條例ノ議案ヲ提出シ
タルニ第二議會ノ後廢棄セラレタリ氏ハ再ヒ議院ノ解散
ニ關シテ氏ノ意見ヲ告クベシトノ強請ヲ受ケタリト雖モ
氏ハ黙ク答ヘサリシヲ以テ大ニ反對党ノ忿怒ヲ加ヘタリ
終ニ一月二十六日ニ至リ氏ハ現今ノ有様ニ於テハ余ハ解
散ヲ助言セサルヘシト公言シタリ又氏ハ宰相ノ任免ハ下

院ノ權内ニアラサルヲ説キ且曰ク余ハ余ノ辭職ヲ以テ公務ニ有害ナリト信スルニツキ余ハ尙ホ職ヲ保ツノ意ナリト下院ハ又議院ヲ延期シ若クハ解散シテ以テ東印度商會ノ事件ヲ議スルヲ妨ケサルヘシトノ王ノ保證ヲ信スル旨ヲ確定スルノ決議ヲ爲セリ

諸黨ヲ調和協同スルノ策

千七百八十四年二月二日

然ルニ數名ノ有力ナル議員ハ相争フ所ノ政黨ヲ調和協同シテ以テ此危險ナル爭論ヲ終ヘシメンコトヲ勉メタリ即チ此目的ヲ以テ此等ノ議員ハシントアルハンノ客館ニ於テ會合ヲ開ケリ而シテ王モ亦更ニ廣大ナル區域ニ人ヲ取リテ以テ内閣ノ組織ヲ改ムルノ協議ニ一致セリ又此協同ノ策ヲ行ハンカ爲ニゼネラルグロスウエノルハ議ヲ起シテ曰ク現今政治上ノ事務極メテ困難ニシテ危急ニ迫リタルヲ以

上院王ヲ助ル

テ人民ノ信用ヲ得ルニ足リ又國家ノ不幸ナル分裂ト不和トヲ救治スルニ足ル所ノ確乎堅牢ニシテ多數協同セル一内閣ヲ組織セサル可カラスト此議ハ可決セラレ次キニコークヲフノルフォルジ氏議ヲ起シテ曰ク現時ノ内閣ヲシテ其職ニ續任セシムルハ下院ノ信用ヲ得ルニ足ル如キ新内閣ノ組織ヲ障害スルモノナリト此議ニ就テハ異議ヲ爲スモノアリシト雖トモ終ニ多數ヲ得テ可決セラレタリ蓋シ此議ハ直接ニピット氏一身ノ退職ヲ強ユル者ニシテ却テ協議ヲ害セリ而シテ以上ノ諸決議ノ如キモ前回ノ諸決議ト同ク毫モピット氏ノ決心ヲ挫折スルノ効ナキヲ以テ下院ハ此等ノ諸決議ヲ翌日陛下へ奏上スルコトニ決シタリ此時上院ハ王及ヒ宰相ヲ保護セリ二月四日上院ハエツライ

ンガム公ノ勳議ニヨリニケノ決議ヲ爲セリ第一ハ夫ノ印
 度ヨリ振宛テタル手形ノ引受ケヲ爲ス可カラストノ下院
 ノ決議ニ關スルモシテ其決議ニ曰ク國會ノ條例ヲ以
 テ何人ヲ問ハス其人カ便利ナリト思惟スルニ從ヒ隨意ニ
 之レヲ行フヲ許可セシ所ノ權利ヲ僅カニ國會ノ一分子ノ
 獨斷ヲ以テ左右シ爲メニ法律ノ實行ヲ停止セシムルカ如
 キハ憲法ニ背違セルモノナリト第二ノ決議ニ曰ク政府行
 政部ノ大官高職ヲ任命スルノ權ハ獨リ陛下ノ手中ニ存ス
 ルコト疑フ可カラス而シテ上院ハ此特權ヲ施行スルニ於テ
 陛下聖意ノ過失ナキヲ確信セサル可カラスト是ニ次キ上
 院ハ王ニ奏上シテ曰ク陛下カ其疑フ可カラサルノ特權ヲ
 施行スルコトニ就キ上院ハ飽ク迄モ陛下ヲ保護スヘシ且陛

下院ノ駁議

下カ其宰相ヲ任命スルニ於テ上院ハ一ニ聖意ノ過失ナキ
 ナ確信スヘシト此奏上ニ對シ王ハ答ヘテ曰ク朕ハ宰相ヲ
 任命スルニ於テ唯ク國會及ヒ一般公衆ノ信用ヲ博スルニ
 足ル所ノ人ヲ舉ケテ朕ヲ輔翼セシムルノ外他ノ目的ヲ有
 セスト
 此等ノ處置ニ對シ下院ハ非難スヘキ上院ノ決議ヲ搜索セ
 ンカ爲メニ上院ノ記録簿ヲ檢査シ議院習慣ノ先例ヲ探リ
 終ニ公言シテ曰ク下院ハ專斷ヲ以テ法律ノ實行ヲ停止セ
 シメシ者ニアラスト又曰ク下院ハ人々カ隨意ニ行フヘキ
 部内ノ何等ノ權利タルヲ問ハス之ニ關シテ意見ヲ述フル
 ヲ得向シ其事ノ公金ニ關スル者ニ至テハ特ニ然リトス
 下院ハ其前回ノ決議ヲ正ナリトシ國會ノ他ノ二局部（按國）

王ト上院ニ固有セル權利ヲ蠶食セサル限リハ下院ニ固有セル特權ニ至テハ飽ク迄モ之ヲ維持スルノ決心ナルコトヲ公言セリ

租税ノ議定ヲ延期スルコト

又下院カ先キニ王ニ奏上セル諸決議ニ對シテハ王ハ是ニ回答セザリキ因テ下院ニ於テ此事ニ論及シタリト雖モビット氏又タ默シテ答ヘス終ニ二月十日委員ヨリ大砲費ノ豫算ヲ報告スルニ當リフオックス氏曰ク下院ハ前回ノ決議ニ對シテ王ノ回答如何ヲ知ルヲ得ル迄ハ租税ノ供給ヲ議定スルコト能ハストビット氏ハ約スルニ陛下カ如何ナル處置ニ出クント欲スルカヲ下院ニ知ラシム可キヲ以テセリ而シテ右ノ報告ハ可決セラレスシテ再ヒ之ヲ委員ニ附セリ十八日ビット氏ハ下院ニ告ケテ曰ク陛下ハ尙ホ下院ノ

重子テ王ニ奏議ヲ呈ス

決議ニ一致シテ現時ノ諸宰相ヲ免職セシメサル可ラストノ意見ヲ有セス又宰相ニ於テモ其職ヲ辭セザリキト下院ハ此告知ヲ以テ下院ヲ輕侮スル者トナシ政府反對黨ノ領袖ニ於テハ租税ノ供給ヲ拒ムノ意ナキヲ表シタルニモ拘ハラズ下院ハ更ニ三日間其供給ノ決議ヲ延期シタリキニ十日下院ハ更ニ決議シテ曰ク陛下ノ賢明ナル必ス下院カ必要ナリト思考スル如キ新内閣ノ組織ヲ障害スル所ノモノヲ排除セラルヘキヲ信スルナリト此決議ハ全會ノ名ヲ以テ之ヲ奏上セリ王ハ是ニ答ヘテ曰ク朕ハ堅牢ニシテ固結セル内閣ヲ熱望スル者ナリ然レモ現時ノ内閣ニ向テ未ク何等ノ非責ヲモ加ヘタル者ナシ且ツ我臣下ノ多數ハ前回内閣ノ更迭ニツキ満足ノ狀ヲ表セリ下院ハ其冀望スル

所ノ協和ノ策ヲ實行スルニ至ル迄ハ一時タリ行政部ノ
 職位ヲ空シカラシムルヲ期スヘカヲサルナリト而下
 院ハ三月二日マテ閉會セシテ以テ同日ハ他ノ議事ヲ入ラ
 スシテ直チニ王ノ回答ヲ議セゾトヲ定メ而シテ如此ク
 シテ更ニ租稅供給ノ議決ヲ延期セリ此時下院ハフックス
 氏ノ動議ニヨリ更ニ王ニ奏請シテ曰ク人民ノ代議士ハ信
 用ヲ有セサル所ハ内閣ヲ維持スルハ公務ニ取リテ有害ナ
 ラサルヲ得ス故ニ其内閣ヲ罷免セソトヲ望ムナリトフッ
 クス氏ハ宰相ガ下院ノ冀望ニ反シテ其職位ヲ有スルガ如
 キハ未タ其先例ヲ見スト主張セリピット氏直チニ之ヲ辯
 シテ曰ク未タ其如何ナル政略ニ出ツルカヲ試ミス故ナク
 シテ宰相ヲ退ケントスルガ如キハ我國ノ歴史ニ於テ未ダ

其例ヲ見サレ所ナリト王モ亦同一ノ根據ヲ取リ其宰相ニ
 向テ未タ何等ノ非責ヲ加ヘシモノナキヲ公言シ以テ之ヲ
 罷免スルヲ拒ミダリ如此ク王及ヒ宰相ハ陣チ一方ニ占
 下院ハ他ノ一方ニ立チ各々其憲法上ノ特權ニ據リ互ヒニ
 相敵視シ下院ハ爭論ノ主位ヲ取リテ攻撃ノ地位ニ立チ王
 及宰相ハ忍ンテ敵チ一撃ノ下ニ破ルヘキ好機ヲ俟テ
 下院ニ於テハ更ニ數日間管軍條例ノ議案ヲ延期セリ何ト
 ナレハ若シ之ヲ議了スルニ於テハ直チニ解散ヲ命セラル
 ルヲ知レハナリ而シテ下院ハ更ニ又宰相ヲ退ケント勉
 タリ三月八日下院ハフックス氏ノ議ヲ採リ下院ノ前回
 要求ニ對シテ王ノ回答ヲ得テ下院ハ大ニ其不當ナルニ驚
 愕セル旨ヲ奏上スル所ノ要求書ヲ王ニ呈セリ此要求書中

宰相ノ勝利

下院カ是迄ニ奏上セル要求ノ件々ヲ記シ現時ノ諸宰相ノ所爲及ヒ主義ハ彼ノ不幸ナル「スチア」家ノ時代ノ宰相ト相比スヘキヲ示シ下院ノ請求スル所ニ諸宰相ヲ罰スヘシト云フニアラスメテ單ニ之ヲ罷免スヘシト云フニ過キサレハ下院カ別ニ諸宰相過失ノ實證ヲ舉ケスシテ敢テ之ヲ非トセシモ決シテ不可ナラサルヲ辨シ且下院カ忍シテ租稅ノ供給ヲ拒マサルシハ下院ノ誇ルヘキ所タルヲ説キタリ是レ實ニ反對黨ノ最後ノ抗爭ナリトス蓋シ反對黨カ始メテ宰相黨ト相抗爭セシ時ニ當リテハ反對黨ノ員數ハ殆シト宰相黨ニ倍シタリキ而シテ反對黨ハ一時非常ノ多數ヲ占有シタリト雖ヒ其數漸ク減シ一月十二日ハ僅ニ五十四名ノ多數ヲ有シ二月二十日ハ更ニ減シテ

議院内ノ爭論
議院外ニ波及
セン

二十名トナリ三月一日ハ十二名トナリ同月五日ハ九名ノ多數ヲ有スルニ過キサリキ而シテ今ヤ最後抗爭ノ時ニ於テハ唯タ一名ノ多數ヲ有セシノミナルヲ以テ議院ノ論争モ茲ニ終局ニ皈シ王及ヒ宰相ハ勝ヲ制シ議院ヲ解散シテ人民ニ訴フヘキノ時ニ會セリ夫ノ管軍條例ハ通過シ又巨額ナル租稅ノ供給ヲ可決セリ然レモ此等ノ租稅ハ其總額ヲ議定セシノミニシテ未タ其費途ヲ指定セザリキ而シテ三月二十四日ニ至リ議院ヲ延期シ翌日直チニ之ヲ解散セリ

議院内ニ於テ如此キ爭論ノ行ハレシヲ以テ各自ノ政黨ハ議院外ニ於テモ亦之ヲ坐視傍觀スルヲ爲サ、リキ王ハ非常ノ勇膽ヲ以テ此等ノ爭論ニ當リタリト雖ヒ議院ニ於テ

斯ナル激論ヲ受ルハ其豫期セサリシ所ナリ而シテ王ノ
 選拔セル宰相ニシテ一旦其權力ヲ失フカ如キコアレハ王
 ハ俯伏シテ聯立政黨ニ從ハサルヲ得サリシナラシ當初ニ
 在テハ此危險ハ旦夕ニ迫リ王ハ耻ヲ忍テ其時ヲ俟ツノ外
 ナカリキ萬一此論争ニ敗ヲ取ルカ如キコアレハ是レ則チ
 王ニ取テ恥辱ノ極メテ甚クシキ者ナリ王ハ最早ヤ一身ノ
 國家ニ益ナク久シク英國ニ在ルハ榮譽ヲ保ツノ道ニ於テ
 サルヲ信シ自カラ認メテ王權ヲ害セラルハ者ナリ思惟
 スル所ニ甘ンセソヨリハ寧ロハノ一ブルニ退隱セントシ
 決心ヲ示セシコ敷回ナリキ然レモ爾後反對黨ノ勢次第ニ
 減シ自黨ノ勢力及ヒ人望ハ益々増加セシヲ以テ始メテ斯
 カル極端ノ處置ニ出ツルヲ免レタリキ又聯立政黨ハ諸黨

派結合ノ勢ニ由リ議院内ニ於テハ大勢力ヲ有シグリト雖
 モ決シテ國民ノ人望ヲ得タリト謂フヘカラサルナリ蓋シ
 此聯立政黨ハ其權力ヲ握リテ内閣ニアルヤ常ニ世人ノ誹
 毀ヲ受ケ其内閣ヲ去ルヤ世人ノ誹毀ヲ受ルコ益々甚クシ
 キニ至レリ新内閣及ヒ王黨ハ世人ノ聯立政黨ニ對スルノ
 感情如此ナルニ乘シフツクス氏ノ印度條例ノ議案ヲ以テ
 國王ノ特權ヲ蠶食スル者ナリトナシ氏ヲ以テ國王及ヒ憲
 法ノ敵ナリト公言セリ是ヲ以テ人民ノ勤王心ヲ喚起シ人
 民ハ争テ身ヲ王及ヒ宰相ノ黨中ニ列セリ而シテ王及ヒ宰相
 ニ向テ人民ノ親愛ヲ表スル所ノ奏詞及ヒ其他ノ書而全國
 各地方ヨリ到來セシヲ以テ王ハ益々反對黨ノ面ニ當リテ
 屈セズシテ其地位ヲ維持セントノ勇氣ヲ得タリ且ツ議院

内ニ於テ夫ノ二政黨(按)ノルス公ノ黨及フカ執リテ以テ其
 軍略トセシ所及ヒニ政黨領袖ノ舉動ハ却テ輿論チ一變シ
 テ王黨ニ左袒セシムルノ勢ヲ養成セリ蓋シ反對黨ハ激セ
 ラレテ極端ニ走り其舉動ニ戒慎ヲ加フル能ハスシテ一ニ
 徒黨的ノ輕進急激ヲ事トセシヲ以テ爲メニ自黨ヲ傷ケタ
 リ反對黨ハ一變シテ王ノ内閣ヲ覆ヘサント欲シ商議ヲモ
 遂ケス猶豫ナクシテ直チニ内閣ニ迫レリ而シテ反對黨カ
 解散ヲ命セラレシトテ恐レ口ヲ極メテ之ヲ難シタルノ一
 事ヲ見ルモ反對黨カ人民ノ贊助ヲ得シトテ自信セサリシ
 ヲ證スルニ足ルヘキノミ反對黨ハ人民ト黨ヲ共ニセスシ
 テ其争フ所ヲシテ單ニ一黨派ノ私争タルニ過キサラシメ
 タリ憲法上ヨリ之ヲ論スルハ王ハ其宰相ヲ罷免スルノ

權利アリ又其新内閣ヲ維持センカ爲メニ議院ヲ解散シテ
 人民ノ輿論ニ訴フルノ權利アリ然ルニ反對黨ハ王ヲシテ
 此權利ヲ行ハサラシメント勉メ現時下院多數ノ勢ニ乘シ
 テ王ヲ強壓セント試ミタリ如此ク反對黨ハ憲法上ノ制限
 チ超テ其權力ヲ擴張シ以テ王ノ特權ヲ攻撃シタルヲ以テ
 忽チニ其反動ノ不利ヲ受ルニ至レリ
 是ニ反シテ宰相タルピット氏ハ宰相ヲ任命スヘキ王タル
 モノ、特權ト宰相ノ議案ヲ討議スヘキ議院タル者ノ義務
 ト若シ議院ニ於テ此等ノ議案ヲ妨グルニ於テハ議院解散
 大王ニ助言スヘキ宰相タル者ノ權利トニ根據シテ以テ進
 退シタリ而シテピット氏ハ策畧判斷勇氣ニ富ミ加フルニ
 其智能ニ世ヲ蓋スニ足ル者アルカ故ニ自家ノ黨衆ヲシテ

信用ヲ生セシメ又自家ノ主張スル所ニ人望ヲ歸セシメタ
 リ且氏ハ終始爭論ノ客位ヲ取リ防禦ノ位置ヲ固守シ敢テ
 反對黨ノ徒黨的ノ軍器ニ應スルカ如キ舉テ爲サ、リキ初
 メ氏ノ宰相ノ職ニ就クヤ數名ノ議院ハ直チニ反對黨ヲ去
 リテ氏ニ黨セリ蓋シ如此キハ當時ニ在テハ敢テ珍事トナ
 スニ足ラスシテ如何ナル宰相ト雖モ豫メ之ヲ期シ得ヘキ
 所ナリ而シテ又反對黨中未タ其領袖ノ過激ナル處置ニ與
 ミセカリシ輩ハ内閣ヲ攻撃スルヲ猶豫シタリキ是ヲ以テ
 朝廷及ヒ政府ハ其權力ヲ盡シテ反對黨中ノ人々ヲ自黨ニ
 移ラシメンコトヲ勉メ而シテ朝廷及政府ノ人望ノ益々増加
 スルニ從ヒ反對黨中ノ熱心ニ乏シキ輩ヲシテ其勇ヲ失ハ
 シメタリ

ピット氏ハ議院ニ於テ氏ニ抗スル反對黨ノ次第ニ其數ヲ
 減シ又世上輿論ノ益々氏ニ黨スルニ際シ忍ンテ時機ノ到
 ルヲ俟チタリ而シテ今ヤ終ニ議院解散ノ結果ヲ現ハシタ
 ルヲ見レハ氏ハ初メヨリ動カス可カラサルノ判斷ヲ以テ
 自家ノ舉動ヲ制シ又豫メ人民ニ訴フベキノ好機ヲ察シ
 タルヤ知ル可キナリ而シテ政府ハ百方手ヲ尽シ王ノ權力
 ナリテ議員撰擧ヲ動かサントナシ又王ハ内閣黨候補者ノ
 當撰センコトニ深ク自ラ意ヲ注キタリ而シテ議院解散ヲ命
 シタルノ時ハ則チピット氏ノ人望其最上點ニ達シタルノ
 時ナリキ故ニピット氏ノ反對黨ハ各撰擧場ニ於テ敗ヲ取
 リ議員候補者ハ單ニピット氏ヲ贊助スルノ一事ヲ約スレ
 ハ以テ當撰者タルヲ必シ得ヘキノ勢ナリキ而シテ前回ノ

議院ニ於テ氏ニ抗セシ者ノ中二百六十人以上ハ其地位ヲ失ヒ新議院ノ集合スルニ及ビ氏ハ果シテ多數ヲ得テ其數殆ソト算テ可カラサルモノアリキ此時ニ方リヒット氏ハ國民ニ對シテハ人望ヲ有シ議院ニ於テハ最大權勢ヲ握リ朝廷ニ在テハ無上ノ信用ヲ受ケタリキ宰相ノ成功既ニ如此シ王ノ勝利ハ夫レ如何ソツヤ蓋シ王ハ下院ノ意見ニ反シ一宰相ヲ罷免シ更ニ他ノ一宰相ヲ擧ケテ之ヲ維持セリ人民ハ勤王心ヲ表シテ王ヲ援助シ而シテ王ハ人民ノ援助ニ據リ其欲スル所ニ從ヒ反對黨ヲ挫折スルヲ得タリ今ヤ王ハ鞏固ナル政府ト自家ノ信スル所ノ宰相トヲ得テ再ヒ自家ノ權勢ヲ張リ自家ノ自由ヲ加ヘ自家ノ人望ヲ増シタリ王ハ其憎ム所ノ政黨ヲ覆シテ其ノミナラズ是ト同時

將來ノ政界ニ
生シタル結果
○王トヒット
氏トノ關係

ニ王權ヲ確立シテ犯ス可カラサルニ至ラシメタリ而シテ爾後殆ソト五十年間ハ王權ノ強盛ナル遙ニ國家自餘ノ各權力ニ超乘スルモノアリキ然レモ此如キノ結果ハ又是ニ伴隨スル所ノ危險ナキ能ハス抑王ノ性タル既ニ權力ヲ貪ルノ甚シキニ失スル者コソ今又其成功ニ鼓舞セテ更ニ其特權ヲ擴張セントスルノ心ヲ長スルナキ能ハス然レモ今王ハ一宰相ヲ有セリ其宰相ノ才能ノ高シク政略ニ富ミタルハ王ノ及ハサル所ニシ其意志ノ牢固ナルハ或ハ王ニ超ユル者アリ蓋王ノ一治世間ニ在テハ最も有力ニシ最モ人望アル政治家ヲ擧ケテ以テ國家ノ政治ヲ是ニ任スル(王自カラ政治ヲ爲サズ)宰相ニ任スルハ自由國當然ノ制度ナルニ拘ラス)ヲ爲サス

王自カラ政務ヲ施行セシヲ以テ常ニ王命是レ奉フル者ヲ重用スルノ傾向アリキ故ニ王カ擧用セル諸宰相中人傑ト稱スヘキ者ハ獨リチヤム公アリシノミ而シテ今ヤ則チ王ハ此政治家ノ第二子タルピット氏ヲ擧ケテ是ニ政治ヲ任シ其評議ニ預リ其政略ヲ可トシ其才能ノ優レル者アルニ服セリ然レモ尙ホ王ノ意ヲ以テ宰相ヲ動ス者ナキニアラサリキ何トナレハピット氏ハ民權黨ノ學校ニ於テ人トナリシト雖モ速カニ該黨ト縁故ヲ絶チ又速カニ該黨ノ主義ヲ放棄シタレハナリ蓋シ氏ハ王ノ眷顧ニヨリ其權力ヲ得王ノ特權ニヨリ其權力ヲ維持シ王ニ黨シタルカ爲メニ最大權力ヲ握ルヲ得タリ故ニ氏ハ不知不識心ヲ王權ニ委テ夫ノ君權黨ノ政治主義ニ傾キ加之氏ハ其大敵タルフックス氏

及民權黨ト抗争セシカ爲メニ益々氏ヲシテ若年ナリシ時ノ政治主義ヲ失ハシムルニ至レリ然レモ佛蘭西革命ノ時ニ至ル迄ハ氏ノ政略ハ尙ホ賢ニシテ且寛ナル者アリシト雖モ是ヨリ後ハ氏ハ擅斷ヲ主義トシ公衆ノ自由ヲ害スルニ至レリ而シテ氏ノ專斷ナル主義ト雖モ尙ホ人望ヲ博スルヲ得タル者ハ實ニ氏ノ才能ノ然ラシムル所ニシテ又世ノ風潮ノ然ラシムル所ナリト謂ハサル可カラズ氏カ久ク内閣ニ在リシ間ハ人民ハ全ク君權主義ニ風化セラレタルヲ以テ王及宰相ハ此勢ニ乘シテ思想ノ自由ヲ束縛シ輿論ニ反シテ干戈ヲ動スニ至レリ故ニ王ハ夫ノノルス公ノ時ニ於ルカ如ク最早ヤ自家ノ宰相ニアラストスルモ今ヤ其力量大ニ自家ニ優ル所ノ政治家ノ手ヲ藉リ以テ自家ノ主義

チ行ハシムルノ満足ヲ得タリ出版ノ自由ヲ壓束シ内國ニ於テ共和主義ノ行ハル、ヲ鎮定セントスルニ於テハ宰相ノ熱心ナルヲ恐クハ王ニ讓ラサル者アリ外國ニ共和主義ノ行ハル、ヲ破ランカ爲メニ干戈ヲ動カサントスルニ於テハ王ノ熱心ナルハ宰相ニ超ユル者アリ然レモ之ヲ要スルニ王及ヒ宰相ハ共ニ全世界ヲシテ立君政治ヲ行ハシメソトニ盡カシ其人民ノ憲法上ノ自由ニ至テハ敢テ是ニ顧慮セサリキ

王益々政務ニ力ヲ出セシ

且ヤ王ノ自カラ政治ニ關セントスルノ習慣ハ毫モ減スル所アラサリキ亞米利加戰爭ノ終局ヨリ俄爾西ト戰爭ヲ開クニ至ル迄ハ王ハ常ニ陸軍卿タルノ職ヲ行ヒ士官ヲ任命スルヲ以テ自カラ快トセリ又ビット氏ノ内閣ニ在リシ間

國王威權ノ増加セシ

行政上ノ事務ハ必ス之ヲ王ニ具陳シテ其判決ト制可ヲ經サルヲアラサリキ加之王ハ外交事務ニ關シテハ精細ナル意見書ヲ草シテ自家ノ内閣ト其說ヲ争ヒ政府ノ政略ヲ監査シ議院内ノ討論及可否決ヲ批評シ自家ノ諸宰相ヲ賞揚シテ反對黨ヲ非難シ租稅增加ヲ可トシ議案ノ修正ヲ議シ官吏ノ任免ヲ裁シ貴族爵位ノ授否及ヒ僧官ノ陟黜ヲ決シタリ而シテ王ハ又自家ノ手ヲ以テ樞密議員ノ姓名簿中ヨリフックス氏ノ名ヲ削除シタリ又ビット氏ノ内閣ニアリシ間ハ王ノ獨斷權力ハ少シク減セシモノアリトスルモ王及宰相カ相合シテ行ヒシ所ノ王權ノ全体ニ至テハ大ニ前時ヨリモ増加シ王及宰相ハ全ク擅斷ノ權力ヲ掌握セリ而シテ戰爭ナル者ハ常ニ官民ヲ和

合セシメテ以テ政府ノ權力ヲ擴張スルノ結果アルモノニ
 シテ彼ノ佛蘭西戦争ノ如キハ重大ナル負擔ト種々ノ失敗
 トチ來セシニモ拘ラス人民ハ其戦争ヲ開キシ所以ノ理由
 ナ可トセシヲ以テ大ニ人望ヲ博スルヲ得タリ而シテ此戦争
 ノ爲メニ巨額ノ財ヲ糜シ人民ヲ苦メタリト雖モ又之カ爲
 メニ國王ノ恩典ヲ廣行シ政府ノ請負人ヲシテ不意ノ大利
 ナ僥倖セシメ各種物品ノ價格ヲ騰貴セシメシヲ以テ農夫
 及ヒ製造者ヲシテ巨利ヲ得セシメタリ故ニ世ノ所謂金満
 家ナル者ハ悉ク戦争宰相（按）戦争宰相トハピット氏ヲ指ス
 ノ旗下ニ蟻集シ
 其攫取シ得タル不意ノ利益ヲ以テ議員タルノ位置ヲ購買
 シ其領袖タル宰相ノ背後ニ立チテ強固ナル隊伍ヲ組織シ
 以テ宰相ノ演説ヲ贊稱シ可否決ヲ取ルノ際必ス宰相ニ同

王ハ尙ホ自家
 ノ權力ヲ以テ
 宰相ヲ動サシ

意ヲ表セリ而シテ如此ク熱心ニ宰相ヲ贊助セル輩ハ其賞
 トシテ或ハ貴族ノ爵位ヲ受ケ或ハ士族ノ位格ヲ受ケ或ハ
 特別ノ恩典ヲ受ケ其他斯カル非常ノ費用ヲ要スルノ時ニ
 當リテ苟モ宰相ガ願與シ得ヘキ所ノ各種ノ利得ハ凡テ之
 ナ此輩ノ贊助者ニ與ヘタリ宰相ハ如此キノ贊助ヲ得タル
 ナ以テ議院内ノ反對黨ハ唯形アリテ實ナキノ虚飾タルニ
 過キス又議院外ニ於テ不平ヲ鳴スモノアルハ法律ノ武
 器ヲ以テ直チニ之ヲ箝制スルニ足レリ如此クニシテ宰相
 ニ抗スルハ國家ニ對スルノ重罪ナリト見做サル、ニ至レ
 リ
 ピット氏ハ大權ヲ有シタルヲ以テ王ハ十分ノ信任ヲ氏ニ
 許スト雖モ若シ政界上其意見ヲ異ニスルコアルハ頭ト

トセリ
 シテ其決心ヲ枉ケサルハ毫モ從前ニ異ナラサリキ且王ニ
 於テ諸宰相ニ對シテ自家ノ權力ヲ敢行セント欲スルハ
 諸宰相ハ其威勢ノ爲メニ制セラル、テ免ル、ヲ能ハサリ
 キ而シテピット氏ノ議案中初メテ王ノ異議ヲ招キタル者
 ハ夫ノ議院改革ノ議案ナリ蓋シ氏ハ曾テ政府反對ノ黨中
 ニアリシトキ議院改革ノ主義ヲ行ハントテ誓ヒタルヲ以テ
 今其身官ニ在ルト雖モ尙ホ當時ノ主義ヲ棄テサルヘシト
 決心セリ然レモピット氏ハ其議案ヲ提出スルニ先ダテ豫
 メ之ヲ王ニ示シ以テ朝廷ノ抗論ヲ避ケン、テ謀レリ一千
 七百八十五年三月二十日王ノ書ニ曰クピットハ其書面ニ
 於テ此事件ニ關シ危ム、キノ結果唯タ一アリ即チ政府ニ
 黨スト揚言スル所ノ人々ノ爲メニ此議案ヲ廢棄セラル

ハノ恐レアルコト是レナリト云ヘリ朕ハピットカ往年此議
 案ヲ行ハントテ誓ヒタルハ甚不幸ノ事ナリト思考セリ然
 レモ到底ピットハ其考案ヲ下院ニ提出セサル可カラヌ又
 朕ハ一身上ニ於テピットヲ敬愛スルノ故ヲ以テ假令ヒ議
 院改革ノ事ヲ議センカ爲メニ國會ヲ開クニ至ルモ獨リピ
 ットヲ除クノ外ハ何人ヘモ朕ノ意見ヲ示サ、ルヘシ是レ
 ピットカ心ニ記セサル可カラサル所ナリ故ニ朕ハ確信ス
 ビットカ此事ニ關シテハ朕ノ意見ヲ以テ人ヲ動カシタリ
 トノ疑惑ヲ容ル、能ハサルヲ若シ他人ニ於テ惡意ヲ以テ
 斯カル舉動ヲ朕ニ歸セント欲スルモノアレハ朕ハ之ヲ以
 テ前日來ノ僞妄ノ言ト同視セサルヲ得スト又王ハ何人ヲ
 リモ自家ノ意見ニ從ヒ其可否ノ決ヲ爲サ、ル可カラヌト

王ノ權勢ノ熾盛ナリシヲ

云ヒ而シテ又ピット氏ニ言テ曰ク其交誼ノ爲メニ自家ノ
 說ヲ捨テ他人ノ議ヲ取ル能ハサルノ件アリト而シテ王カ
 此等ノ言ヲ爲シタルハ抑故アルナリ蓋ピット氏ハ王ノ權
 勢ヲ以テ其議案ヲ破ラルハアラソコヲ恐レ又王ハ自家ニ
 對シテ如此キ疑惑ヲ容ルハアラソコヲ悟リ決シ此事ニ干
 涉セサルヲ約セリ然レモ王ハ自カラ此事ニ干涉セサルモ
 此議案ハ必ス廢棄セラルハニ至ルヘシトノ意見ヲ告グル
 フ禁スル能ハサリキ(此議案ハ實際ニ於テ果シテ廢棄セラ
 レタリ)而シテ此議案ヲ可トスルノ黨ニ在テモ之ヲ非トス
 ルノ黨ニ在テモ議院ノ討論ニ於テ王ノ權勢ノ行ハルハコ
 ハ十分ニ知ル所ナリキ
 當時如何ナル度ニマテ王ノ權勢ノ行ハレシヤハ一千七百

八十八年ニ於テ王ノ疾病アルニ當リ諸政黨カ王ニ對スル
 ノ關係及ヒウエールズ太子ニ對スルノ關係ヲ見ルモ之ヲ知
 ルヘキナリ此時ニ當リ諸宰相ハ十分ニ王ノ信任ヲ受ケ議
 院ニ於テ抗ス可カラサルノ多數ヲ制シタリ然ルニウエー
 ルズ太子カ攝政トナラハ其第一ニ行ントスルノ處置ハ父
 王ノ舉ケタル諸宰相ヲ廢黜シ是ニ代ユルニ反對黨ノ領袖
 ナ以テセントスルニアリシコトハ兩政黨ノ共ニ知ル所ナリ
 夫レ如此ク國王ノ權力ヲ痛撃スルノ政黨ト雖モ尙ホピッ
 ト氏カ數年前マテ巧ニ施シ來タレル術策ニ倣ヒ國王ノ
 權力ヲ利用シ據テ以テ議院内ニ多數ヲ有スル所ノ敵黨ヲ
 破ルノ資トナサントセリ
 既ニマテピット氏其權勢ヲ失ヘリ而シテ其失權ノ原因タ

勢
ピット氏ノ失

恰モ其得權ノ原因ノ如ク王ノ意ニ是レ出テ、又責任ナ
キ評議會ノ之ヲ助言シタルトハ前年來屢々起リタル政變
ト軌ヲ同クセリ(按)責任ナキ評議會トハ内廷諸臣ヲ云フ内
ハ隱然言ヲ進メテ王ノ意ヲ動カシテ責任アリ内廷
而シテ責任ナシ故ニ云爾スルナリ蓋シ意フニピット氏ノ
在ク可カラサルノ氣質ハ久ク議院ト内閣トニ於テ最大權
カヲ握リタルカ爲メニ益々其強剛ヲ加ヘシカハ王ノ私カ
ニ厭フ所トナリシモノ、如シ抑王ガ權力ヲ貪ルノ情ハ決
シテ其宰相ニ讓ラサルノミナラス尙ホ且其信スル所ノ宰
相ニ對シテモ自家ノ權勢ヲ張ラントセリ而シテピット氏
ノ權勢ハ王ノ權勢ヲ蓋ハントスルニ至リシヲ以テ王ノ黨
及ビピット氏ト相競フノ輩ニ在テハ氏ハ驕傲ナル大謀ヲ
貯ヘ頑牢不屈自カラ恃ムノ氣質ヲ有シ國王ヲ敬愛尊崇ス

千八百一十年舊
教疑問

ルノ一點ニ關シテハ全ク憲法ニ背違セル思想ヲ持セリト
ノ説ヲ爲スモノナキニアラザリキ
ピット氏ノ一身ニ關シテ如此キ説ノ行ハル、ニ際シ王ヲ
シテ諸宰相ノ擅斷ヲ怒ラジメ且王ノ良心ニ於テ之ヲ沮止
セサル可ラストノ感ヲ起サシメタル一事ヲ現出シタリ其
事如何ト云フニピット氏及氏ノ同僚諸相ハ羅馬舊教黨ノ
政權剝奪ヲ赦免シ以テ愛蘭併合ノ事ヲ成就セシムルヲ必
要ナリトシ此目的ヲ達センカ爲メニ其方法ヲ評議スルニ
時日ヲ經タリ而シテ此事ニ關シテ王ハ久ク一定ノ意見ヲ
有セ、一千七百九十五年ニ於テ王ハ其即位誓約ノ爲メニ
履行セサル可カラサル所ノ義務ノ事ニ關シケンヨン公ニ
諮議セシトコアリ而シテ羅馬舊教黨ノ事ニ就テハ公ハ確

乎タル意見ヲ示サ、リシト雖也王ヲシテ羅馬舊教黨ヲ赦免スルノ處置ニ出ツルカ如キハ道德上ニ於テ即位誓約ノ許サバル所ナリト固信セシメタリ而シテ諸宰相ニ於テハ其議尙熟セズ未タ意見ヲ王ニ示シテ其制可テ請フヘキノ期ニ至ラサルニ先タチ王ハ早ク既ニ諸宰相ノ計畫スル所ヲ聞知セリ一千八百九年九月ニ於テラフボロウ公ハ此事ニ關シテピット氏ヨリノ書狀ヲ王ニ示セリ又カンターブリ
 一ノ大僧正ノ如キモアウクランド公ノ告知ニ據リ國教ニ取リテ危險ナル一計策ヲ議スル者アルヲ王ニ報セリ十二月ニ至リ大法官ハ羅馬舊教黨ノ要求ヲ辨難スル所ノ精細ナル一書ヲ王ニ呈シ又々往時王ノ寵臣クリンビョート公ノ一子ナルアルマノ大僧正ドクトル、スチユアイトノ如キモ

勉メテ王ガ其諸宰相ノ計畫スル所ノ處置ヲ惡ムノ情ヲ煽起セリ是ニ於テ王ハ羅馬舊教黨ノ要求ヲ非トスル所ノ二三ノ人々ニ諮リピット氏ヨリ之ヲ告クルヲ俟タス時ヲ失ハスシテ直チニ此事ニ關シテ自家ノ意見ヲ明言セリ一千八百一年一月二十八日朝參ノ節王ハ陸軍卿ウヰンドハム氏ニ言テ曰ク朕ハ此議案ヲ可トスルノ起立ヲ爲ス者ハ一身上ニ於テ朕ニ與ミセサル者ト見做スヘシト又此時王ハダ
 ンダス氏ニ言テ曰ク此ノ如キ處置ハ未曾有ノ激變ナリ朕ハ何人タルヲ問ハス如此キ考按ヲ出タス者ハ凡テ朕ノ一身上ノ敵ナリト見做スヘシト二十九日王ハ下院議長ナルアッヂントン氏ニ書キ與ヘピット氏ヲシテ斯カル不當ナル問題ヲ起スカ爲メニ生スル所ノ危險ヲ悟ラシメンコトヲ氏

ニ托セリアッヂントン氏ハ則チ王ノ委托ヲ奉シ王ノ最モ不
 可ナリトスル所ノ議案ヲ出タヌノ非ナルコトビット氏ニ
 説キ自カラビット氏ヲ服セシメ得タリト信セリ然ルニビ
 ット氏ハ初メアッヂントン氏ノ説ニ服セント欲シタルカ如
 シト雖モ後チ内閣諸宰相及ヒ其他自家ノ政治上ノ朋友ト
 相謀ルニ及ヒ氏ハ今將サニ王ニ奏セントスル所ノ議案ニ
 關シ飽シ迄モ責任宰相タル自家ノ位置ヲ固守セント決心
 セリ之ヲ聞ク此時ケンニング氏ハ王ニ歩ヲ譲ラサランコ
 トビット氏ニ助言セリトケンニング氏ノ説ニ曰ク數年ノ
 間王意ニ屈シ緊要ナル考案ト雖モ王ノ抗論ノ爲メニ之ヲ
 廢棄セシモノ頗ル多ク是カ爲メニ政府ヲシテ非常ニ脆弱
 ナラシメタリ今此大事ニ於テ王ニ抗セサル時ハビットハ

ビット氏其説
 フ屈セザルコト

唯タ名ノミノ權カヲ有スルニ過キスシテ實權ハ彼ノ陰然
 王ノ心ト意見トヲ支配スル所ノ寵臣輩ノ手ニ皈スルニ至
 ラント
 ビット氏ハケンニング氏ニ從ヒシカ又ハ自説原ト此ノ如
 クナリシカ之ヲ知ル可カラスト雖モ氏ハ深ク其考案ノ必
 要ナルヲ感シ又大ニ心ヲ羅馬舊教黨ニ傾ケシヲ以テ決シ
 テ其考案ヲ廢棄スルヲ爲サバリキ然レモビット氏ヲシテ
 議院ニ於テ王黨ノ爲メニ其議案ヲ攻撃セラル、ノ患ナシ
 トノ保證ヲ王ヨリ得ルコト能ハサラシメハ氏ハ或ハ自家ノ
 意見ヲ任ケテ王意ニ屈セシヤモ知ル可カラサル者アリキ
 二月一日ニ至リ氏ハ公然其意見書ヲ王ニ示セリ是レ王カ
 數日ノ間豫メ期セシ所ナリ蓋シ王ハ此意見書ヲ受クルニ

先タチ既ニピット氏ノ決心ヲ知リシカ故ニ此時直チニ新
 内閣ヲ組織セシムルヲアツギントン氏ニ托シタリキ然レモ終
 ニアツギントン氏ノ助言ヲ採リ懇篤ニシテ而モ不屈ナル答
 辭ヲピット氏ニ與ヘタリ其答辭中ニ我幸ナル憲法ノ基礎
 ナ破壊スル如キ傾向ヲ有スル所ノ問題ヲ討議スルハ義ニ
 於テ王ノ爲シ得サル所タルヲ公言セリ王カ此事ニ關シテ
 深ク利害ヲ感セシムルハ王カポルトランド公ニ談話セシ所
 ヲ見ルモ之ヲ徵スルニ足レリ王ノ言ニ曰ク朕若シ此議案
 ニ同意スルヲアレハ爲メニ信用ヲ破リ王位ヲ失ハサルヲ
 得ス又曰ク此法律ノ起草者ヲシテ刑臺ノ露ト化セシム
 ルニ至ルヘシト王ノ忠誠ナル助言者タルポルトランド公
 ハ是ニ答テ曰ク余ハ陛下カ如此キ議案ニ同意センヨリハ

舊教疑問ニ關
 シピット氏ノ
 失錯

寧ロ冤死人(按) 教法ヲ固信シ道ノ爲タルヲ甘ンセラルヘキ
 ナ確信スルナリト而シテアツギントン氏ハ王ト宰相トノ不
 和ヲ協和セシメンヲ勉メタリト雖モ其効ナクピット氏
 ノ其説ヲ固守シテ動カス可カラサルハ毫モ王ニ劣ル所ア
 ラサリキ是ヲ以テアツギントン氏ハ舊教黨ニ反對スル所ノ
 人々ヲ以テ新内閣ヲ組織スルノ任ヲ托セラレ又廷臣輩ニ
 於テハ此事ヲ以テ王ノ一身ニ關スル所トナシ舊教黨ニ反
 對スル黨與ヲ集合スルニ至レリ
 ピット氏ハ又其計畫スル所ヲ隱蔽シテ久シク王ニ告ケサ
 リシノ故ヲ以テ非難ヲ受ケタリ王モ亦此疑問ハ八月以來
 之ヲ計畫セシ所ナルニ二月一日ニ至ル迄ハ曾テ之ヲ王ニ
 告ケサリシヲグレンヅル公ニ告ケ以テ其不平ヲ訴ヘタ

リ又王ハ公ニ告ケテ曰ク若シ當初ニ於テ不幸ナル分裂ノ原因ヲ公然朕ニ通セシメンニハ朕ハ全ク之ヲ避クルノ策ヲ立ツルヲ得シナラント抑此事ヲ王ニ告クルノ斯ク遲延セシ者ハマルムスビユリト云ヘル如ク怠慢ヨリ起リシ者カ又ハ適當ニ王意ヲ尊崇セサルヨリ起リシ者カ今其如何ナ知ルヘカラスト雖ニ要スルニ此事ヤ一大過失タルコト必セリ蓋内閣ニ於テ未タ其議ノ決セサルニ先ダチ王ノ甘心ヲ得ンカ爲メニ之ヲ王ニ告クルカ如キハピット氏ノ義務ニアラサルコト明カナリ然レモ凡テ一般ニ關スル疑問ニツキ之ヲ蔽フテ王ニ告ケサルコトアレハ爲メニ王ノ疑惑ヲ招キ氏ニ敵スル者ヲシテ内廷ニ於テ反對黨ヲ組織スルノ好機ヲ得セシムルノ結果ナキ能ハサルナリ

ピット氏遂ニ
舊教疑問ヲ再
ヒ提出セサル
コトヲ約ス

王ノアツギン
トシ氏ヲ信任
スルコト

ピット氏ハ自カラ信シテ國家ノ幸福ニ必要ナリトスル所ノ議案ヲ廢棄セシヨリハ寧ロ職ヲ去ルニ如カスト決心セリ然レモ氏ハ數週日後ニ至リ王ノ疾病ハ近時其宰相ノ舉動ヲ快シトセサルニ原因セシコト聞キ大ニ驚愕シ直チニ舊教ノ疑問ヲ再起セサルヘシトノ保證ヲ王ニ通シタリ而シテ今ヤ反對黨ハ全ク其勢力ヲ失ヒタルヲ以テ内閣及ヒ議院ノ政略ヲ指揮スル者ハ獨リ王アルノミナリキ
アツギントシ氏ハ王ノ信用ヲ博セシノミナラス王ノ爲メニ大ニ親愛セラル、所トナレリ當時王カ氏ニ與フル所ノ文書ヲ見ルニ内治ト外交トノ事務ノ區別ナク細カニ政治ノ各部局ニ注意スルノ點ヨリ之ヲ考フルモ又親愛ノ語氣紙上ニ溢ル、ノ點ヨリ之ヲ考フルモ恰モ王ノ往時ノ寵臣タリシ

ノルス公ニ與ヘシ所ノ文書ト相似タルモノアリ終ニ王ハ
ピット氏ノ爲メニ自家ノ身上ニ課セラレタル束縛ヲ免ル
ハノ快樂ヲ得又自家ノ欲スル所ノ宰相ヲ擧用スルノ満足
ヲ得タリ而シテ此宰相タル王ト其感情及意見ヲ共ニシ万
事必ス之ヲ王ニ謀リ其性質温順忠誠ニシテ王ノ愛ヲ買フ
ニ足り其智力ハ鈍ナラスト雖モ又王ノ智力ヲ壓倒スルノ
恐レナキナリ

千八百四年ビ
ツト氏再ビ内
閣ニ入ル

此新内閣ハ之ヲ組織セシ時ノ事情ニ妨ケラレテ當初ヨリ
鞏固ナルヲ得サリシノミナラス常ニ嫉妬ト隱謀トニ襲ハ
レタリキ而シテ三年間之ヲ維持ヒシ者ハ專ラ王ノ權力ニ
因リテ然ルヲ得タルノミ蓋シ此新内閣ハ議院ニ於テ毫モ
權力ヲ有セサルノミナラス議事ノ才能ニ乏シク且人民ノ

王
フオツクス
氏ノ内閣ニ入
ルヲ許サス

贊助ヲ得ルヲ能ハサリシト雖モ尙ホピット氏及フオツクス
氏ノ協合セル反對説ニ抗スルヲ得タリキ然レモ終ニアッヂ
ントン氏ハ其事務ノ困難ニ堪ユル能ハスシテ其職ヲ辭セ
リ王ハ其親愛スル所ノ宰相ヲ失ヒ再ヒ自家ノ一身ヲ尊大
ナルピット氏ノ手ニ委セサル可ラサルニ至リタルハ固ヨ
リ其欲スル所ニアラスシテ之ヲ爲スニ頗ル遲疑猶豫セリ
然レモ王ハ國家危急ノ時ニ迫リ遂ニ脆弱ナル内閣ヲ解カ
サルヲ得サルニ至レリ
蓋シピット氏ハグレンダール公及ヒフオツクス氏ト相協同シ
テ強固ナル一内閣ヲ組織スルノ必要ナルヲ主張セリ然レ
モ王ハ痛クフオツクス氏ヲ忌ミ斷シテ氏ヲ内閣ニ入ルハ
ヲ拒ミタリ王カ深クフオツクス氏ヲ惡ムハ積怨ノ然ラシム

ル所ニシテ當時王ノ精神錯亂セシヲ以テ此情殊ニ甚シカリキ王ハ其後ニ至リ仮令ヒ内亂ヲ醸スニ至ルモ決シテフォックス氏ヲシテ内閣ニ入ラシムルヲ肯セサルヘシト決心セシヲテ公言セリ如此ク王カフォックス氏ヲ擯斥シタルヲ以テ政府反對黨ハ復タ内閣組織ノ協議ニ預ルヲ欲セサリキ故ニピット氏ハ前内閣ニ類似セル脆弱ナル一内閣ノ首位ニ立タサル可カラサルニ至レリ

然ルニ此際アッギントン氏ハ王黨ノ領袖トナリテ下院ニ位置ヲ占メタリ而シテ此王黨ノ數ハ六七十名ノ間ニアリキ世人ハアッギントン氏カ此時ト雖モ尙ホ王ト相通信セシヲ信セリ而シテ氏ノ黨友ハ時トシテハ政府ニ反對スルノ發言ヲ爲スニ至レリ氏ハ王ニ對スル一身上ノ交誼ヲ以テ

シドマウス公
ノ王及ヒ諸政
黨ニ對スル關
係

氏ノ政治上ノ舉動ヲ定ムルノ規則トナスヲ明言セリ氏ノ其職ヲ去ルヤ直チニ王ニ書ヲ呈シテ曰ク臣ハ諸政黨ニ屬セス別ニ分立シテ王ニ與ミシ而シテ臣ノ良心ニ於テ正道ナリト信スル所ノ行路ヲ取ルヘシトアッギントン氏ノ勢力ハ強大ナル者アリシヲ以テピット氏ハアッギントン氏及ヒ氏ノ黨友ヲ政府ニ入レサル可カラサルニ至レリピット氏トアッギントン氏ノ協同ハ王ノ最モ熱望セシ所ニシテニ氏ノ交情舊ニ復シタルヲ以テ協同ノ事容易ニ成ルヲ得タリ是ニ於テアッギントン氏ハシドマウス公ノ爵位ヲ占メ内閣議長ノ職ヲ得テ以テ内閣ニ列シ氏ノ黨友ニシテ先キニ政府ニ反對スルノ發言ヲ爲セシ者ヲシテ其說ヲ一變シ政府ノ處置ヲ贊成スルニ至ラシメタリ然レトモ氏ハ氏及ヒ

氏ノ黨友カ内閣ニ得シ所ノ權力ヲ以テ足レリトセス後幾時ナラズシテ其職ヲ辞スルノ意ヲ示セリ而シテメルゾル公ヲ彈劾スルニ際シ曾テ官位ニ任セラル可キノ約束ヲ受ケタルハイリ、アヂントン氏及ヒボンド氏ハ共ニ政府ノ意見ニ反對スルノ言起立ヲ爲セシテ以テ終ニピット氏トアヂントン氏トノ間ニ異議ヲ生シアヂントン氏ハ爲メニ其職ヲ辭スルニ至レリ如此ク政黨ノ爭亂ノ熾ナルニ際シ專ラ内閣ヲ保護スル者ハ唯ダ王ノ權力アリシノミ王カピット氏ト其意見ヲ異ニスルノ點唯一アリト雖モ是レカ爲メニ再ヒ王トピット氏ノ交情ヲ破ルカ如キコアラサリキ如何トナレハピット氏ハ先キニ一千八百一年ニ於テ王ニ約セシ所ニ從ヒ更ニ王ノ一生ノ間ハ舊政黨政權回復

ピット氏舊政黨
疑問ヲ束閣ス
ル

ノ疑問ヲ起サ、ルヘキ旨ヲ再約シタレハナリ然レモ王ハ此約束ヲ以テ尙ホ足レリトセシテ内閣ニ於テ毫モ官吏誓約條例(按)官吏ヲシテ舊教ヲ非トヲ一字一句モ改正スルノ意ナキコトヲ公告セシコトヲ要求セリピット氏ハ此要求ヲ肯セサリシト雖モ然レモ氏ハ勉メテ王ノ禁スル所ヲ犯サハランコトニ注意シ仮令ヒ他人ニ於テ之ヲ犯サントスル者アルモ氏ハ止ムヲ得スシテ是ニ抗シタリ如此ク宰相ハ其意見ヲ枉ケシヲ以テ王獨リ議院ノ政畧ヲ指揮スル所トナレリピット氏ハ王ノ信用ヲ恢復スルヲ得タリト雖モ王ハ尙ホ自家ノ獨立ナル意見ヲ立テ國家ノ政治及ヒ恩典ノ事ニ關シテ大ニ權ヲ行ヘリ王ハ議院ノ討論ニ注意スルコト往時ニ異ナラス又演說ノ長短及ヒ可否決ノ數ヲ熱視シ加之